

に移住し、且つセミンチック人種の觀念と接觸するに至りしかば、其根底に大なる動搖を萌し、終に大先導者プロースター及び其の繼續者によりて大に變更改化載されたりきと。

余は實に此の問題を論ずるに本章全体を費せり。けだし幾百萬の生靈が仰き以て安身立命の根礎となせし處の一大宗教は如何なる原因よりして發生し、如何にして發達せしかを知るは實に必要なりと感せしを以てなり。余は氣候、及び他國民との接觸、交通等種々の原因が、一國民の思想上に働きて如何なる變化を生ずるかを示さんと試みたり。内容の能力もどより必要なりと雖ども、又外來の諸勢力にも能く注意せざれば到底如何なる國民の發達をも満足に説明する能はざる可し。吾人の生息する此の世界には偶然より生ずる一物もなし。其の物界の現象たるど、心靈界の現象たるどを問はず、各事各物皆な序あり、則あり。而して此の序を學び、此の則を研究するは、乃ち之れ吾人の義務なり

### 第三章 波斯教(其の三)

#### 第四 拜火の觀念并に儀式

前二章に於て、余輩はアリアン諸宗教中最も古きもの、一にして、且つ最も勝れたるもの、即ちペルシア教の開祖、經典及び其の起源に關する諸問題を論せり。故に本章に於ては其の教義并に儀式を説明すべし。

夫れ天下の宗教、其の數甚だ多く、其の類甚だ異なれりと雖ども、余輩の研究しつる限りには、未だ多少拜禮、祭祀の儀式を備へ、萬有の創造者、并に主宰者に對する感想を、外部の形体もて表はさるものあるを見ず。蓋し宗教にして若し毫も外部の形体、即ち拜禮祭祀の儀式を備へざらんか、遂に哲學の一系統と化して其の生命を枯らし、其を奉信する生靈を指導する能はざるに至らん。茲に其一例をあぐるは敢て無用にあらざる可し。諸君の熟知せらるる如く、ハーバート、スペンサー氏ハ博大通なる學識を振ひ、廣大神妙なる哲學を顯章し、以て法界の萬象人生の各部分を解説せんとせり。氏は實に靈識を包藏し、敏腕を具備し、而して熱火の如くに眞理を愛慕追求するの人なり。而かも氏の傑作、氏の哲學は箇人或は國民内部の生活及品性を形成するに於て、如何程の勢力を有したるか。道徳的、及び心靈的生活の高等なる世界に向て人間を驅進するに於ては、氏の洪大なる著作も、未だ北海の一隅に住するアイノ人の宗教だけの力を振ふ能はざりしなり。惟ふに勁眼なる佛國の大哲學者オーギユスト、コントが一種の理學宗を設立せしとき、全くローマカンチック教に擬して其の祭祀儀式を制定せしも、蓋



力吾に来るを見る時、ア、ア、ア、ア、ア、ア、マズメの大神よ、我はいと大にして、又慈悲愛憐の心の底知れざる神として汝を尊ばん

夫れゾロースターの拜火教は印度歐羅巴の多神教に比するときは大に論理的合理的なりと雖も、後侵入し來れる亞刺比亞一神教の勢力には到底抗抵すること能はざりき。アハレ、マシー神學の全体は左の一詩句によりて打崩されたりけり。

よしや拜火教徒は、百年炎を拜すとも、一瞬其が中に陥らば、身は其まゝに焚かる可し。夫れ人間の良心は、「父母の愛」を以て其の必要及び希望を總て満足せしむる慈悲圓滿なる眞神を見出す迄は、到底安定すること能はざるものなり。然るにペルシア古代の宗教は此の一神を與ふること能はざりき。されば其の教中には高尚純潔なる觀念多く含まれ居るにも拘らず、更に一層深切なる高尚なる宗教に、其の位置を譲らざるを得ざりしこそ是非なき次第なりけれ。

祭祀

祭祀は惡神マニと争闘するアフラ大神を援くるために、人間の行ふべき義務なりと信せり。此く觀想するは神を多神的、神人同形的に見るより、起れるものなり。神も又人間の如く飲食、休息等を要し、又人間と同一の弱點を有するものなりとの觀想より起れるものなり。而して此はヘブリユ人を除きては、總ての古代國民の祭祀の基本的觀念なり。ペルシアの宗教に於ては此の觀念の跡最も明かなり。善神チストリア神、魔神アハオニアの爲に大に苦められしとき大叫アフラ、マズメに訴へて曰く

ア、アフラ、マズメの大神よ、人間は祭祀と讃頌とを以て吾を拜せざるなり。彼等若し祭

祀と讃頌とを以て吾を拜せんには、吾は十馬の力、十牛の力、十山の力、十河の力を得るなるに。さても。

祭祀は供獻と祈禱より成り立てり。奠品は(一)清水(二)鮮肉(三)「ハホマ」なり。「ハホマ」は即ち韋陀に云ふ「ソマ」の事なり。

祈禱は至大の力を有するものと信せり。アフラ神其大敵たるアリマンを打つには一に之により。此く祈禱を以て至大の力あるものと見るは、アリアン太古人の一特質なり、韋陀の時代には之を以て一の神となしし程なり。今日に於てもペルシア人、即ち古代拜火教の殘徒は最も祈禱すきの人民なりと云はる。

祈禱に二種あり。一を請禱と云ひ、他を讃禱と云ふ。請禱即ち「ニヤイス」には日拜詞、ミストラ神拜詞、月拜詞、水拜詞及び火拜詞の五種あり。

日拜詞は一日の中に三回、即ち日出、日中、午後各一回づつ誦讀し。月拜詞は新月、満月、及び終月の現はるとき、各一回づつ、都合毎月三回誦讀し。又火拜水拜の二詞は人々之に近くとき常に誦讀せり。左に日拜詞及び火拜詞の一部分を譯載せん。

日拜詞

第一節

千代八千代ませ、

天どくはしる日の御神。

アフラ、マズメの大神よ、

喜ばしましたまへかし。

千代八千代ませ、

三重の正道歩ませたまふ

千代八千代ませ、

アフラの神とひと心なる、

マメシヤ、スベントの御神たち。

つたなしども、此の祈、

アフラ、御神にとりかなん。

スベント御神にとりかなん。

聖者の靈にとりかなん。

第五節

千代八千代ませ、

アフラマズマの大御神、

千代八千代ませ、

ひろき牧場の主、ミトラ神、

千代八千代ませ、

天とくはしる日のみ神、

千代八千代ませ、

アフラ、マズマのふたまなこ、

千代八千代ませ、

いとるはしき聖牝牛、

千代八千代ませ、

人の初のガヤの犬人、

千代八千代ませ、

聖スピタマのくしみたま、

千代八千代ませ

過現未三世の聖萬物、

ヴァヌーの神や、クシヤストラ神、

アシヤの神の御守を

うけてねひたつ我身かな、

又し此の世の終る時、

最高無上の光界に、

上る此の身ぞうれしかるらん。

第六節

光明遍照、永劫不死、  
天どくはしる日の御神、  
吾等は神饌供ふなり。

廣大牧場しろしめす、  
千耳萬眼備へます、  
圓滿智識、金剛力、  
恒醒不眠のミトラ神  
吾等は神饌供ふなり。

火拜詞

第一節、  
千代八千代ませ、

アフラ、マズメの御子、火のみ神、  
いまし廣大慈悲の神ヤザタに。

第六節

大慈英武のアター神、  
いまし光榮の源府なるみ神に、

治療の主腦たる大神に。

第七節

吾供獻、祈禱、に善供物、  
愛の供物に、扶助供物、  
吾はし捧ぐアター神、  
アフラ、マズメの御子なる神よ、  
汝神は供獻、祈禱をば、  
供ふにかなふ大神ぞ。

青人草の住ふ屋に  
捧ぐる祈禱供物  
受けます神は汝神なり。  
左手に聖薪、もんでに「ハレマ」  
左手に鮮肉、もんでに白を、  
持ちつゝ常に神饌を  
供ふ人をば無事息才に、

第八節

汝神よ、良薪うけたまへ。  
汝神よ、良香うけたまへ。

汝神よ、良饌うけたまへ。  
此の屋を守らん其が爲めに、  
汝神は生長ましますよ。  
保護を與へん其が爲めに、  
汝神は生長ましますよ。

第九節

此の屋に燃へさせ玉へかし、  
常に燃させ玉へかし。  
此の屋に焰を吐きたまへ、  
此の屋に増大ましますよ、  
此の世の救はる其時まで、  
めでたき救のくる時まで、  
永くもへさせ玉へかし。

第十節

アハレアッラの御子アター、  
めぐみ玉へよ。  
たのしき平安、 たのしき給養、 たのしき生活、  
圓滿なる平安、 圓滿なる給養、 圓滿なる生活、

智慧、敏才、敏舌に、  
靈の神聖、善記憶、  
さて又進む悟解力、  
學び得られぬ妙力を、  
さて又男子の勇氣をも。  
右の祈禱、若し精細に之を吟味すれば、甚だ面白きものなり。されど余輩は今之をなすの時間  
を有せず。只左の二點に注意しれかん。(一)即ち該祈禱の廣大深遠なること、即ち吾人人間が宇  
宙の創造者に向て云はんと欲する總ての事柄を含めること。(二)該祈禱の最上無上の神なるアッ  
ラ、マズダに捧げられたるものにてはなく、火に捧げられたるものなることなり。  
上載の祈禱は「ニヤイス」と稱して、吾人の今日家族の祈禱と稱する處のものに同じ。第二種の  
祈禱即ち讚禱は「シタイス」と稱して「アベスタ」經中諸處に散見す。

○尊淨惡穢

清淨潔白は拜火教徒の最も尊ふ處なり。但し其の清淨潔白と云ふは、吾人の今日云ふが如き、  
精神的の意味にはあらずして、身体の清淨潔白を云ふなり。身体を汚すの最大原因は死なりと  
云へり。蓋し死は惡魔の有にして、惡魔は死によりて人間の全身を奪ふべければなり。

ザラサストラ問ふて曰く  
ア、實界の創造者よ水は人を殺すか。  
アッラ、マズダ答へて曰く

水は人を殺さず。人は皆な其頸にアストサアフツのくゝりねける輪を持って、ヴァヤ  
ハ此の輪を探りて、彼を引き下す。其の時水は彼を呑込むなり」

此の如く人は水中に溺死するにもせよ、火中に焚殺さるゝにもせよ、死の第一原因はマイニユー  
にして、水や火は只マイニユーの殺具となるのみにて、恰も殺人者に於ける兇器の如しと信せ  
り。

清淨潔白は生命に次て人間の尊ぶべきものなりと教ゆ。故に信徒の之に注意すること實に至れ  
りと云ふべし。實に清淨はヘルシア教の精神なりと云ふ可し。而して其の結果は今日も尙ほ見  
らるゝなり。諸君の知らるゝ如くヘルシア現今の國教はマホメット教なり。今日の波斯人はマ  
ホメット教徒なり。而かもマホメット教民の中に、彼等は最も文雅なる、最も教育ある、又  
最も清淨なる、人民なりと云はる。實に少數ながらも拜火教徒は其の衣食、風習なかゝりに清  
潔なり。余も彼等を目撃したることあるが、中々奇麗なる人民なり。彼等は日々沐浴を怠らず。  
否な一日の中にも幾度となく沐浴す。然るに彼等は又余輩の嘗て目にせしことなき、甚だ汚  
穢なる奇習を有せり。即ち毎朝臥床を出つるや、直に「ニラング」即ち牡牛の尿を以て、其の顔面  
手足を洗ふとなり。抑も此かる奇慣は如何にして始まりしか、蓋し左に述ふる原因より起りし  
ものならんか。

夫れ前卷に述へし如く、韋陀時代の人民はマルツ神と稱して雲を拜せり。之れ又源始アリアン  
人の信仰なりしならん。且つすでに雲を拜する上は、又雨をも拜せしならん。而して彼等の高  
原に漂泊しつゝ、ありし間には飲食沐浴等多く雨水を使用せしならん。然るに波斯の如き降雨少

なき地方に移住せし種族に於ては、宜しく雨水に代ゆ可きものを求めざる可らざりき。然り而  
して彼等は雨水を以て天界雲上に奔躍する大牡牛の尿なりと信せしを以て、遂に之に代ゆるに  
地上の牛尿を以てせしならん。蓋し天界の牛尿に代ゆるに地界の牛尿を以てするは敢て背理に  
非らずと考へしものならんか。之れ「ニラング」俗の起りし原因なる可し。されど此かる汚穢な  
る習慣は到底文明社會に保持さる可きものにあらず。是に於てか數十年前印度にある拜火教徒  
の中に其等の汚穢有害なる習俗は、今日も尙ほ保持す可きものなるや、否なやに付て一大議論  
起り、彼等は遂に正統自由の二派に分かれぬ。保守黨は大抵年長者及祭司より成り立ち、神な  
がらの古き慣例は一點も之を變更又は禁止すべからずと主張し、自由派は近世の教育を受けた  
る青年より成り立ち、「ニラング」の如き悪習は到底今日に維持すべきものに非らず、彼等は大に  
國民の進歩を害するものなりと痛論せり。

「アベスタ」經中には「ゴメス」、即ち牛尿を以て汚穢を洗除するの徳ありとせり。一例をあぐれ  
ば産婦は如何にして清めらるゝやの問に答へてアフラ大神のたまはく。

火より三十歩、水より三十歩、「バレスマ」の清き束より三十歩、信徒より三十歩、距たり  
たる場處

其の場處に「マズマ」の崇拜者は一小屋を作り、其の内に産婦を入れ、食料及び衣服を與へ  
ねけ、

産婦は子宮内の汚物を清めんが爲に、灰を混合たる「コメズ」を三杯或は六杯、或は九杯の  
むべし。

然したる後には産婦は牝馬、牝牛、或は羊或は山羊の乳汁をわかし之に麵包を入れ或は入  
れず飲むを得」

産婦は以上の有様にて三日三夜を過したる後、其の身并に衣服を「コメズ」及び水を以て洗ひ清  
め更に九日九夜隔離されたる上、再び「コメズ」及水を以て身体及衣服を清めたり。  
前文に述べし如く、拜火教徒は人死すれば悪魔之れに宿ると信せしを以て、死体は最も不潔な  
るものとせり。而して死体を奇麗にすれば、悪魔いよく喜んで降り来る可ければ、宜しく之  
を汚くなくしれに若かじと考へたり。又物死体に觸るれば直に汚かると信せり。地は人  
間をのせ、草木を生育する聖物なれば、死体を之れに觸れしむ可からずとて、夫れより埋葬は  
嚴禁せられたり。「ヴェンデマ」篇に曰く、

人若し、夫の屍、或は人の屍を地に埋め、而して二ヶ年の内に其を發かざるときは、如何  
なる贖を拂ふ可きか。如何にせば其の罪を贖ふべきか、如何にせば清めらるゝを得るか。  
答へて曰く、

是れ拂ひ得る一物なき罪業なり。贖ひ得る一物なき罪業なり。清め得る一物なき罪業なり。  
是れ永久に贖はれ難き極悪罪なり。

火に關しても亦然り。火は聖き物なり。之を以て死体をやくは均しく贖はれ難き極悪罪なりと。  
此の點に於て、拜火教徒は又全く印度人と異なれり。印度人は今日も尙ほ火葬を行へり(但し  
佛教の火葬を行ふはバラモン教にならへるなり)蓋し彼等は死を以て汚穢となさず、却て此の  
世を解脱して神界に入るの渡場なりと信すればなり。

さて水火土等の諸行は聖なるものなれば、死体は之に接觸せしむ可からずとの教は、遂に死体  
を山嶺に抛棄するの習慣を生ずるに至りぬ。  
ゾロスター問ひ玉ふらく。

ア、物界の創造主、いまし聖なる神よ、我儕は何處へ死体を運び、如何なる處にか之ををさ  
めん。ア、アトラ、マズダ大御神よ、

大御神答へ玉ふらく、

いと高き山の嶺、なが知るごと屍食鳥屍食犬の常にさまよひて餌をわさる處へ。さよさ  
ザラサストラよ

其の處へマズダの信者は屍の足及び頭髮に眞鍮、石或は鉛をくゝりつけて、すてれく可し。  
しかせざれば屍食鳥屍食犬は水又は森の内へ其の骨をくはへさる可ければなり。

ザラサストラ問ひ玉ふらく。  
若し信者、屍をくゝりれかずして、屍食鳥及屍食犬が其の骨を水又は森の内へくはへさる  
ときは、其の人は如何なる神罰をうく可きか。

マズダ神答へ玉ふらく。  
彼等はいと恐ろしき罪人なり。アスパエストラにて二百、ストラオシヨカラにて二百皆撻せ  
らる可し。

ザラサストラ問ひ玉ふらく。  
物界の創造主、いまし聖き神よ。我儕は何處へ屍の骨を運び、又何處へ之をすてれく可



マズメ大神答へ玉ふらく

マズメの信者は、犬、狐、及狼の來らざる處、又雨水の溜らざる處に一の室をつくる可し。之を造り得る信者は宜しく石、煉化石、及び土にて造る可し。之を造り得ざる信者は地上に毛氈をしき、枕を具へ、天光に浴し、太陽を見得る處に屍を横たへたく可し。

拜火教徒は今も尙ほ此の教に従ふて葬れり。波斯に旅せし人は彼等の住へる村里より遠く距りたる高山のいただきに、幾坪かの地を圍める高さ障壁を見玉はん。之れ即ち彼等の墓場なり。茲に彼等の屍を、さめ、之を野の獸、天の鳥に食しむるなり。冬に至て高原深く積雲を以て被はれ、屍を山巔に送ると能はざるときは、彼等は「マクマ」と稱する一小屋を造り、再び春の立ち歸りて、積雪の立消ゆる迄で、爰に之をたくはへねくなり。

○葬式

之れより少しく拜火教徒の葬式に付て述ぶ可し。但し現今の儀式は「アベスタ」經の教とは稍々異なれども、大差なし。さて醫師來りて、病人のハヤ頼み少なきを告ぐるや祭司は直に其の傍に集り、「アベスタ」經中の數偈を誦讀し、又救罪の祈禱を捧ぐ、夫れより病者の愈々氣息絶ゆるや、祭司は親族を集めて、死体を洗ひ、白衣を以て之をつゝみ、又惡靈を追んが爲めに一頭め、祭司はうるはしく法衣を飾り、野邊の送りの人々をつれて、「マクマ」に至る。(マクマは小さき建物にして云はゞ日本のやさばの如きものなり)而してこゝに屍をすてねき、祭司及び送

れる人々は各々家に歸る。さて數日を経る内には、屍の肉は野獸野禽の食ひつくす處となりて、只骨のみ後にのこる。其の時、死者の家族のものは其處に至り、之を拾ひ集めて「マクマ」の下に設けたる籠の内にねさむ。以上は葬式の概略なり。

○死後靈魂の有様

上文には葬式の一斑を述べたり。此れより死後靈魂に關しての信仰を略説すべし。

ザラサストラ(例の如く)問ひ玉ふらく

何處にて報賞は與へらるゝや。何處にて報賞もて充たさるゝや、人間が地上に住へる間になしし功業によりて得べき死後の報賞を得んが爲めに、靈魂は何處へ行く可きや。

アフラ、マズメの大神答へ玉ふらく。

人死するとき、彼の生命の終るとき、其の時地獄の惡魔は彼を襲ひ來る、而して第三夜(死せし日より)の過ぎたるるとき、黎明現はれて照りかゝやき、うるはしき武器持てる神ミストラ幸なる山の端に上り玉ひ、而して太陽ののぼりそむる時、

其の時グイサンシャてふ惡魔は、罪の内に住む惡しき惡魔崇拜者の魂魄を縛して引き去る。魂魄は「時」の作りたる途、惡人にも善人にも均しく開かれたる途にのぼる。マズメ大神の作り玉ひにしキングヴァド聖橋の端にて、彼等は彼等の靈及び魂魄のために、下界に於てなしし善業の報賞を求む。

其の時、いとうるはしく、たくましく丈け高さ處女、兩側には犬を従へつゝ、現れ來る。此の處女は辨知(善人と惡人とを)し、此の處女は恵み深く、(此の恵ふかしてふ語は如何な

る意なるや、疑はし。マルメスタター氏の註釋にもしか云へり。此の處女は己か思ふ様總ての事をなし、又勝れたる了解力を具ふ。

此の處女は善人の靈をしてハラ、ベレザイナ山の上のぼらしめ、而してキングハト橋の彼端にて、天つ神達の前に彼をおく。

ホヒュー、マノ神は黄金の御産より立ち上り、いと聲高くのり玉ふ。「如何にしてか汝、聖者よ、汝は死の世より、此の不死の世我等が前に來れる」

喜にみちくして、善人の靈はアフラ、マズダの黄金の座に、

の座、アフラ、マズダの住處、アメシア、スペンタスの住處、總ての聖者の住處なるガロチマナに入る」。

「ゼントア、ペスタ」經第一卷(二百十二)

以上は善人の靈の未來の報賞に付てヘルシヤ人の抱けりし最古の觀想なり。されど悪人の靈の罰に付ては、只「ヴィザンシア」てふ惡魔は罪に住む惡魔崇拜者の靈を縛して引き去るてふ語を見るのみにして詳かならず。但し「ヤスナ」篇には善悪人の靈の行先きに付て記述する處あれども、後世の觀想にして、且つ以上に引用せしもの如く、自然の趣味なし。其の大意を摘記すれば左の如し。善人の靈は死せし日より三夜の間、總ての歡樂幸福を受け、夫れより天に上る。悪人の靈は死せし日より三夜の間、總ての苦痛災害を受け、終に鬼につれられて地獄に墮つ。右に引用する處によれば、彼斯太古の人々は靈魂の不滅を信せしこと疑ふ可らず。此の世に成しし善惡の業によりて、未來に賞罰を受くとの教は、存在の永久なる連續を承認しふること確

實なり。「アペスタ」經中の「永世なる」語は、到底只或る年期間を意味するのみのものとして解する能はざること、ミル氏の云へるが如し。

#### ○拜火教の現狀

今や余輩は此の偉大なる宗教、健全高尚なる觀念を發生せし偉大なる宗教の研究を終らんとするに當て、其の現狀に付て少しく陳述す可し。前文にも云へりし如く、其の教徒の今日に残れるもの實に僅少なり。されど尙ほ彼等は吾人の研究を煩はすに十分なる價値を有するものなり。少數ながらも彼等は雄威を西亞南歐に振ひし古代の一大帝國を支配し、之に生命活力を與へし、一大宗教のかたみなり。彼等を見て吾人は愈々ザラサストラ教の感化力の廣大なりしを悟るなり。彼等は實に暴逆極まれるマホメット教の大権力も、全くザラサストラの感化力を打滅すること能はざりしを證するなり。

さてザラサストラ教はマホメット教の侵入に遭ふ迄は、尙ほ大なる活力を有せしかど、紀元後六百四十年にペルシアの國王ヤズダマルトが、オーマルに於てカリフの爲に破られ、遂に波斯帝國の全くマホメット人の奪ふ處となりて、彼等の百方暴を盡し、ペルシア人をして己れが宗教に轉宗せしめんとするに及んで、あはれ、ザラサストラ教は殆んど消滅せんずるばかりのかなしき様に陥りぬ。千八百八十一年の統計によれば其の教徒のペルシアに残れるもの八千四百九十九人、又難をさけて印度に住するもの七萬二千六十五人、其の他歐州各地に散在せるものを悉皆合せて八萬一千の數に足らずと云ふ。アハレ此れが大聖ザラサストラの面影、ペルシア大帝國のかたみなるかや。

左に記する處は多年彼等の内に住へる人の記事なり。曰く

五十四

男子は天性活潑にして、知力英敏、体格恰好にしてたくましく、容色は淡薄なる「オライブ」色なり。眉は濃くして、弓形をなし、瞳は黒く、頬はブツテリとして、鼻は高し。常に軽るくちやれたる八字鬚をたくはふ。婦女は容貌殊に優美なり。色は白く、艶ありて、手足はさゝやかなり。眉毛は三日月形にて濃黒、眼元はパツチリとして、鼻すじ通り、瞳はくろくしてうるはし。常に黒く房々したる髪を後に結び、寶玉寶石もて之を飾れり。拜火教徒は婦女を遇すること他のアツアリアン人よりも寛大なり。婦女は一般に教育を受け、諸國の語を學ぶ、性温和にして愛憐の情深く、外客を遇すること殊に親切なり。又自由に戸外に出つるを得、交際の道にたけたり。

正統派の拜火教徒は毎朝床を出つるや先づ神に祈り、次に少量の「コラング」(牛尿)を顔及び手足にぬり。招福拔災の祈禱をなす。夫れより顔及び手足を洗ひ、漱ぎ祝詞を白し、而して後朝飯を喫す。朝飯は茶「コツファイ」「パン」「バター」等なり。午飯は稍皿敷を用ふること多く最後の夕飯は最も御馳歩の時なり。美酒佳肴を用ゆ、されど牛飲暴食すること稀なり。以上記述する處二ヶの注意すべき點あり。即ち(一)には彼等の慈悲の情に富めること、(二)は婦女の位置の高きことなり。(一)「アベスタ」經中多少、善行、殊に施與に付て説かざる處一もなし「アマズメ神、汝の王國とは如何なるものか。汝の富とは何ぞや。吾は正しき法と、汝のみめぐみ深き心とをもて、汝の貧しき者を守り施す。かかる行によりて吾を汝の王國の人となし玉へよ。」蓋し貧者に施すことは拜火教徒主要の一徳行なり。(二)婦女の位置に關しても亦「アベスタ

經は多くの教をたれたり。其の一に曰く「妻を持つ男は、子なきものより遙かに勝る。家を持つものは家なきものより遙かに勝る。」

蓋し拜火教徒の生活の總ての點は、「アベスタ」經に遡りて其の始源を見出すことを得。彼等は數々贅澤なり、衣食に心を用ゆること甚大なりとの非難を受く、されど其の根源は「ハリ」「アベスタ」經にあるなり。「アベスタ」經の教に曰く、身体健全なるものは惡魔と戦ふに屈強なり。故に「マズメ神」を助くるを得。されど怯弱なるものは、直に惡魔の餌食となる。故に人々は最も身体の健全を希ふ可しと。

「ツエンチメト」編には左の語あり曰く

肉食する人は、肉食せざる人よりも多く善靈を以て充たさる。肉食せざる人は死せるなり。肉食する人は「アスペラナ」の値だけ、一年の値だけ、一牝牛の値だけ、一人の値だけ、肉食せざる人にまさる。

かかる思想の存在せしものから、自然彼等は贅澤に流がるゝに至れるなり。夫れ古代の宗教の經書として今日に傳はれるもの其の數少なからずと雖ども、「アベスタ」經程詳細に人生の各部に付て説けるもの一もあるなし。其の内には實にツマラヌ馬鹿氣たる事も多しと雖も、されど此等の教も亦嘗て幾千萬の生靈を指導し、教化したるものなることを忘る可らず。然り而して其等の瓦礫の中に混淆せる金魂を發見せんこと、之れ余輩比較宗教學生の最も勤む可き點なり。渠の中にも月影宿る、鄙陋なる往古の諸宗教中にも、眞神の面影豈現はれでやはある可き。

夫れ文化の開けたる支那より早きはなし。希臘羅馬の國民が未だ光彩陸離たる人文開化の光を煥發せざる前遠く、彼は既に一ケの文明國にてありけり。聖徒オーガスチン、英國に傳教して慘憺たる蠻風を爰除せんと奴力するに先つと遠く、支那は既に文明的生活の諸方面を殆んど完成したりけり。近世日耳曼人の祖先が、未だ野蠻の域を脱せずして深林中に漂泊せし時代には、彼既に整然たる社會的道德を立て、實直なる孔門哲學を解したりけり。若し普天の下、文化の古きを以て支那に比適し得るものを求めば、恐くは埃及國民之に當らん。されど埃及國民今日の有様は如何、實に憐れむ可き次第なり。其の復興は到底望み得べからざる有様なり。然り然らば今日尙は悍然天下の一方に割據せる國民の中にては、支那は最も古國なりと云はざる可らず。歐米近代の諸強國を以て彼に比するに、恰も未だ垂髮の少女が、白髮温容なる老嫗に對するが如し。

さて諸君、貴邦は既に往古より此の老嫗と親密に交際し又大に彼の文化を採納せり。隨ふて貴邦に於ては、支那の文學歴史哲學等の研究、盛んに行はれ、諸君は既に此等の點に付て知らるゝ處多かる可し。之を思へば余の如き支那學に暗きものが、諸君の前に立ちて、敢て之を喋々するの必要なかる可し。よりて余は始めには此等の點にも論及せん心組なりしかど、今は全く之を省けり。されど其の宗教に至ては事情や、異なれり。本書前部の目的は世界の諸宗教を狀寫講説し、以て諸君をして一目の下に亮然、萬教の花をながめしむるにあれば今若し其の宗教

をも省かば、大に諸君の趣味をして缺然たらしむ可く、又本書後部に至りての所説の都合も悪かる可ければ、今茲に之を講述す可し。

さて支那現今の宗教には三種の別あり。儒道佛の三教是れなり。儒教は高等社會及教育社會の宗教、佛敎は中等社會の宗教にして、道教は下等社會の宗教なり。此の内儒道二教は支那固有のものにて、佛敎は印度傳來のものなり。而して道教は既に前卷に講せり。佛敎に付ては後卷佛敎傳道史中に論ずるを便とす。故に本章には只儒教、即ち孔教のみを講す可し。

始めに余は本章に於て孔教てふ語を如何なる意義にて用ゆるやを辨明せざる可からず。夫れ支那の宗教を以て、孔子の時代に始めて起りしもの如く論ずるは大なるひがごとなり。彼は疑ひもなく先聖傳來の宗教を保存するに於て、大功ありし人なり。否な其の宗教は彼の性行識見によりて、多少化裁せられし處もあらん。されど彼は新宗教の創唱者に非ざるなり。彼自からも明かに祖述者を以て任せりき。決して創唱者なりとは云はざりき。論語述而第七に曰く「述而不作信而好古」と。彼の孫子思も亦中庸に「仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章す」と云へり。

故に余は孔教てふ名稱に、先づ支那古代の宗教、次に此の宗教を祖述憲章するに於て孔子の抱懐せし見解を包ましむるなり。恰も基督教てふ名稱の内に、新約書の教と共に、舊約の教をも含ましむると同じ趣なりと解し玉へ。

以上本書に於ては孔教てふ名稱を廣義に用ゆること、并に孔子と支那教との關係を正しく實際と想はるゝよりも大なるか如くに主唱するの纏なるを辨せり。更に又反對の説に就ても一言せざる可からず。或る論者は云ふ。「余輩の見る處によれば純粹なる孔教は全く宗教に非ず。蓋し孔

教の眞腦は先王傳來の禮法に従順し。人間と生きたる神との關係を全く懷疑的に否定するにあり。但し壓制的政治説と結合したる一種の鬼神祭祀は稱勵されたり。されど誰かまじめに之を一の宗教なりと云ひ得んや。若し孔教の眞腦にして果して論者の言の如くならば余輩も亦其の説に賛同し其の言に従ふ可し。されど孔教の眞腦は果して論者の言の如くなるか。然り豈然らんや。本論を通讀せば其理明かなる可し。

#### 第一 上帝論并に郊社之禮

さて支那文學中最古の書と云はゞ書經なること既に定論となれり。されど支那人の宗教的思想は此の書に淵源するにあらず。否な此の書に現れたる宗教的思想其物は、既に其の源泉を遙か上古の世に發せり。余輩は先づ其の源流に遡らざる可からず。然り而して余輩は今源始の文字を分析して以て此の目的に達せんとするなり。アリヤン博言學者は語根の分析によりて、該民族太古の文明を窺はんとす。之れもとより良法なり。されど源始文字の分析には及はず。テニソンの句に曰く

見しものは、聞きしものよりいや重し。

余輩は之より宗教的觀念を表せる源始の文字を分析して、以て支那太古人の宗教を瞥見せん。先づ研究す可きは天てふ文字なり。此の文字はもと可視的空を表はしたるものならざる可からず。其の構成を考ふるに、一大に从ぶ。以てもと至高上なく萬物を覆へる廣大無邊の空を表せしを知る。されど英語の天の如く直に又主宰力を表はすに用られたり。マクスミューラー氏曰く「支那語の天は空又は日を表はす。而して又アリヤン語の「デュー」の如く神の名として用ひ

らる」と。氏の言の如し。然るに爰に吾人の注意す可きは、支那太古の人々が天の名を以て主宰力を表はすに至れるは、アリヤン人の如く、天の光明燦然たるよりしてには非ずして、其の廣大無邊なるよりしてなること之なり。余輩の考ふる處にして誤なくは、こゝに支那太古人の觀念とアリヤン太古人の觀念とに於ける根本的差違は存するなり。前者の觀念はハーキユレスを以て表され、後者の觀念はアポロを以て表さるゝを得。更に又支那人は天よりして神の通稱として用ひられ、且つ吾人をして最上實在者を一の人性的實在者と想はしむるに至る文字又は名稱を作らざりしなり。

此の名稱は「帝」なり。之れ余輩の次に研究す可き文字なり、此の文字は天てふ文字よりは其の構造遙かに複雑にして、且つ其構造分子を分析して、以て所表の觀念を明確にすること能はず。されど此の文字を以て表明せる觀念の「君主支配者」と云ふ觀念なること疑ひなし。天は上帝と稱せられ、又屢々單に帝とも稱せらる。帝に上を冠して上帝と云ふときは乃ち帝てふ觀念に體體的の旨を含ましめ、且つ之を高むるなり。詩書二經中には天、帝及び上帝てふ三語は常に換用せらるゝを見る。帝は又國王の稱號として用ひられたり。されど此く國王の稱號として此の語を用ひしは秦始皇帝が始めにして、紀元前二百二十一年の事なり。彼は何故に皇帝と稱せしかと云ふに其徳三皇帝にも劣らぬが故なりと云ふ。但し三皇帝とは後世此等の聖人を神視して、之に與へし尊名なり。とにかく帝てふ語は其の作られし始より専ら天の人性的名稱として用ひられたるなり。天てふ語はヘブライ語の「シャープ」の力を用し。帝てふ語は主及び支配者として人間に接する絶對的の神を表はしたり。惟ふに帝てふ語は支那人の祖先に對しては、

恰も「ゴッド」てふ語の吾等基督教徒の祖先に對するが如き感を引き起さしめしならん。

以上天及び帝てふ文字に施したる研究よりして、支那古代の宗教は一神教なりしことを知る。此の一神教の詳細は今知るに由なれども、此く上古の世に於て、彼等の中にかかる觀念の存在せしむる事を發見したるのみにても、煩雜なる源始文字分析の勞に報ふるに十分なり。余はここに只左の語を加へん。曰く現今に至るまで、支那固有の宗教に於て、一神教的の元素を顯著ならしめ、且つ帝てふ語の濫用を防ぎたるは、實に今研究しつる二語の間に存在せる關係なりと。

次に研究す可きは「示」なり。此の文字の音にナヒヒとの二ツあり。ナヒヒと發音するときは神祇、祭祀、祈禱、等を表示する文字の有義的部分として用ひらる。一般に靈(のミコト)殊に天上に在ます靈は神と呼ばれ。地上に勢力を有する靈は單に示と稱せらる。而して彼等の祭壇を社と云ふ。又人の靈を表すには他に鬼と云ふ一文字あり。

「示」ヒヒと發音するときは表彰及び啓示の記號なり。説文には「示天垂象見吉凶所以示人也从二三垂日月星也」と云へり。故に此文字は、支那人の祖先は既に天人の交通を信せしことを示す。又此の文字の下部なる「小」、若し説文の解するが如くならば、此く上古の世に於てすら、既に星占術の迷信恐くは又天体崇拜も始まりおしならんと思はる。

死人の靈は鬼の字にて表はさる。許慎説文には之を解して「田鬼頭、凡は人脚、ムは姦邪」と云へり。此の分析には贊同せざる人多し。余は敢て之に贊同せざるにはあらざれどもヨシ此く分析するとも此の文字にて身体を離れたる靈を表はす所以は解せられず。されど余輩は此の文

字あるによりて、支那上古の人々は人はたとひ死するもそれにて萬事終るにわらずと考へしことを知る。右數々の文字の外に、彼等の宗教的觀念を瞥見せしむるに足る文字更に三ヶあり。第一は「卜」てふ文字なり。此の文字は或る方法によりて龜甲に現されたる線を見てうらなふ事の記號なり。之によりて余輩は、如何なる理由かは知らねども、支那上古之人々は大に龜甲を尊敬し、之に人間の運命を指示するの神秘力ありと信せしことを知る。

第二は卦てふ文字なり。伏羲氏の製作に成れる八卦によりてうらなふことの記號なり。此の文字は卜を以て其の一部となすを見れば、八卦によりてうらなふ方法は、龜甲の線によりてうらなふ方法よりも、後に出來しものと思はる。

第三は占てふ文字なり此の文字、又卜を以て其の一部分となせり。龜甲を以てうらなひ得たる答の解釋の記號なり。又卦を以てうらなひ得たる答を表はすには筮てふ文字あり。此の文字は占の如く古きものに非ず。

右述べつる處によりて、卜卦に關する一種の迷信が、早くより支那上古の人々の心裡に現れ、而して天又は帝てふ文字にて表されたる高尚なる觀念と共に併存せしことを知るゝなり。

以上の研究によりて知らるゝ如く、五千年前には支那人は一神教徒なりしなり。而して此の一神教は一方に於ては自然崇拜によりて、他方に於ては卜卦の迷信によりて敗類さるゝの危難に陥りたりき。先づ本章に於ては、此の源始の一神教が、歲月の移步に隨ひて、如何に其等の危難にて傷害され、又如何程其等の危難に打勝ちたりしかを示さん。

余は先づ近來の歐洲學者中、支那の宗教を以て拜物教の部類に入るゝもの説を批判して、以

て本論に入るの端緒とせん。ライデン府のチール講師は支那古代の宗教を論じて左の如く云へり。

西紀前第十二世紀頃より——恐くは更に上れる世よりも——存在せし古代支那帝國の宗教は、拜物的傾向の著しき拜靈教の純化且つ組織されたるものなりと云はれ尤も適當ならん。但し此の拜靈教は一の正式なる神傳の、其の内より發生し得る前、既に一の系統に結合されしものなり。其の崇拜の目的物は只神祇鬼の三類に分たれたる神靈の *Divinities* のみ。而して此等の神靈物は尙ほ概ね自然の事物と密着せり。

若しチール氏の如く、單に神靈を拜すると云ふのみを以て、拜靈教なりと云はれ、天下の宗教一として拜靈教ならざるはなかる可し。所謂拜靈教なるものの拜靈教たる所以は單に神靈物を祭るが爲めに非ずして、其の祭る處の神靈が祭祀者并に最勝の神靈即ち上帝に對して有する關係の如何にあるなり。若し支人古代の宗教を以て單に拜靈的のものなりしとせば、祭祀の最高目的物としての上帝と観念は、吾人の探知し得る限りには、何處より來りしか。又下等の祭祀の拂はれ、且つ自然の諸部分と密着すると信せられし諸神靈に關しては、彼等は上帝に代りて人間に盡くすものとして祭られしなり。決して拜靈主義にて祭られしものに非ず。此は祭文を讀まば明かなり。

チール講師は又支那古代の拜靈教には拜物的の傾向著しと云へり。講師の意は恐くは次句に云へる言即ち「諸神靈は尙ほ概ね自然の事物と密着せり」と、云ふに外ならざらん。されど其等の神靈が自然の事物と親密なる關係を保つと云ふ思想は、上帝人類を恵み、之に安穩幸福を與へるが爲めに自然の諸勢力の上には各神靈をかきて、之を司らしめ玉ふとの觀想より來れるものなり。之れ自然に對する一種の繆想なるには間違なし。されど余輩はこゝに毫も拜物的の傾向を見ざるなり。又諸神靈をして各々獨立せしめ、之を神 *Gods* の位置に上げんとするの危難は起らざりしに非ず。されど最も古き且つ強健なる一神的信仰は之を障礙したりき。

されどチール講師の語は、支那の國祭并に祖祭に於て、神靈の鎮在處として用ひらるゝ木牌に就て云はれたるものとせば、やゝ恕す可き處あり。其等の木牌は正方形の木片にして其の高は少くとも廣の二倍なり。祖廟祭には祭主の前に之をすへ、其の上に神主、或は神位、或は靈座等の文字を記し、又祭祖の姓名及び官名を記す。祭禮の行はるゝ間は祖靈其の木牌の上に鎮在し而して祭禮の終るや否なや直ちに己が住ふ處に歸り、其の木牌は他日再び祭禮に用ひらるるまで、毫も通常の木片に異ならずと信せらる。此の木牌を用ゆることは何時頃に始まりしや確かならず。されど此は靈物として用ひられしにあらざり、又用らるゝにあらざるなり。マクス、ミュラー講師は曰く

靈物 *Fetich* とは、其の正當の意義にては、其自身或る超自然的の勢力を有すると信せらるる物を云ふ。而して偶像とはも只或物の肖像或は表號として作られたるものなり。疑もなく、偶像は靈物となり易きものなり。されど其始源に於ては靈物教は偶像教と同一のものにあらざるなり。

右の解によれば、支那教の木牌は決して靈物と云ふ可からず。彼等は其自身神聖なるもの、或は超自然的なるものとして用ひらるるに非ざるなり。然り而して此の木牌を用ゆることか、乃

ち孔教内に於ける偶像主義の發生を防きたるなり。

さて源始文字創作の時代より、下りて西紀前第二十三世紀に至る間には國家の盛衰興亡交々起りしならんと思はるれども、今史書の徵す可きものなければ、之を詳知するに由なし。されど上帝并に祖先の祭祀は確かに此間に制定せられしものなり。而して其等の祭祀は、今日に至るも、尙ほ其本質に於ては毫も變化なし。

堯舜の時代に至て、漸く史書の徵す可きものあり。支那最古の書なりてふ書經最初の二部即ち堯典舜典是なり。此二書は堯舜の性行并其治績を殆んど百五十年間に涉りて記録せり。尤ども此の書の編纂は其内に含まれたる事柄と同時代又は直次の時代にありとは云ふ能はず。されど其中には確かに歴史の元素を含めり。且つ孔子の檢閲を経たりと云はるれば、余輩は十分注意して之を研究せざる可からず。

さて舜典の内には、種々の祭祀を録せり。堯既に帝位の事終りて之を舜に譲るや、即位の禮は文祖の廟に於て行はれたりと云ふ。舜典に曰く「正月上日受終於文祖」こゝに文祖とあるは、堯の始祖の廟を云ふならん。又舜の愈々位を攝するや、上下の神祇を祭祀し。之を告げたり

肆、類三千上帝、祀二千六宗、望于山川、徧于群神

こゝに注目す可きは肆類二千上帝とてふ語なり。之によりて、當時既に上帝を祭るの常祭ありしを知る。又左の語あり

二月東巡守至三千岱宗、柴啓于山川、五月南巡守至三千南岳、如三岱禮、八月西巡守至三千西岳、如三初、十一月朔巡守至三千北岳、如三西禮、歸格三千藝祖、用特。

以上の祭祀に付て詳しき説明を與へんことは、到底望む可き限にあらずと雖ども、とにかく右の言によりて舜の祭祀には既に源始の一神教に加へて、數多の神祇を従祀することの始まりしを知る。而して此等の神祇祭祀の自然崇拜主義にあらざりしこと、および此等の神祇は只上帝の祭に従祀されしのみなること、而して此は上帝の宇宙管理に關する一種の誤想より起れるものなること等は既に上文に於て辨じたり。

書經に次て古きものは詩經なり。周代の詩に前代の詩六篇を合せ、都合三百五篇を収む。其の最も古きは西紀前千七百年代のものにして、それより同第六世紀時代のものに至る。

詩書二經の中には、天及び上帝の性徳に關する高尚純潔なる觀念多し。其の主要の點を摘記せば左の如し。

上帝は萬有の主宰者、人は萬物の靈、特に上帝の恩寵を蒙れるものなり、天は萬民を幸せんが爲めに、賢明なる國王を撰び、且つ其の行爲を監守す國王の選定は天の命なり。國王若し祭祀を怠り、無辜を罪し、天の命に順はず其の義務を怠るときは、天其の位を奪ひ、更に之を他の賢明に授けらる。天の攝理は屢々變ずることあり。國家の災害は天より來る。天は無慈悲と呼べる。されど此は天の奇妙なる裁判法なり。天は此くの如にして人々をして其の罪過を悔改せしむるなり。天は如何なる人をも惡まず。實に凶歳を生ずるは天にあらざるなり、治國の王道を失せるよりして國王自からの招く應報なり。天は萬物を生育し、殊に人間には良性を賦與す。されど之を保持して失はざるものは只僅少のみ。

以上は詩書二經に見へたる、支那古代の人々の神に對して抱けりし思想の綱概なり、其等の二



書を精讀せよ。右に縷陳せる言に撞着する一句だに見ざる可し。又天地山川の諸神祇を以て、上帝よりも勝れたる、否な彼と同等のものだに、見たりと思はるゝふじ一もあらざる可し。彼等は只上帝の役者、上帝の僕として従祭されしのみ。

さて周朝に至るまでは、天或は帝或は上帝、此の三語の一を以て神の言をよび來りしが此の朝に至りて始めて天地てふ一新熟語の用ひられしを見る。泰誓上に曰く

惟れ十有三年春大に孟津に會す。主曰く嗟々我友邦家君及び我御事庶士、明かに誓を聽け。

夫れ天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈、誠實にして聰明なるは元后となる。元后は民の父母となる今商王受上天を敬せず。災を下民に下せり云々、

されどこゝに天地と云へるも、單に天と云ふと其の意に異なる所なきは次句にやはり天地と云ふ可きを只天とのみ云へるにて明らけし。故に其形は二元的なれども、決して萬物の創造者に二体ありと云ふ意に非ざるなり。恰も國君を民の父母と云ふに異ならず。此は泰誓の全体を閱了せば更に明かなり。蓋し天地てふ熟語は冬至の日に天を祭り、夏至の日に地を祀るとて二つの場所にて祭らるゝ同一實在物即ち上帝を表はせる語なり。されどとにかく二元的の語を以て上帝をよべるより最古の一神的觀念を誤解せしむるの恐ありしが、幸にも孔子は早く之れに注目し、郊社の禮を解して曰く「郊社之禮所以事上帝」と、以て知る可し、其形は郊社と別るれども均しく同一の上帝を祭れるものなるを。

或る儒者は右の孔子の意を布衍して曰く、國王は冬至の日に天を郊り、夏至の日に地を祀る、此くの如くして上帝に事ふ。國王は萬物億兆を生育する上帝の恩寵に謝せんが爲めに、誠實敬

虔の念を以て、天を敬ひ地を尊ぶ」此等の語に基きて余は郊社の理想を解説すると左の如し。

天地は上帝の大作なり。彼等は其聲異なりと雖ども、均しく其の創造者の實在と性徳を吾人に告ぐ。仰ひて天を見れば、吾人は直に上帝の御威稜に打たれ、伏して地に臨めばねもむるに上帝の大慈悲心を感悟す。天は神威の代表なり。地は神愛の代表なり。よつて以て上帝の威權と慈悲を悟る。よつて以て萬物の主宰者、統治者として、吾人の恐懼と愛情と、尊敬と感謝とを以て事ふ可き責任者として、上帝を認識す。之れ支那宗教の最大祭たる郊社の祭の理想なり。

右の言或は基督教的觀念に牽強附會したるものならんとの疑を發する人もあらんが、されど上帝に捧ぐる祝文を一讀せば思半に過ぎん。蓋し支那人の宗教的觀念の精髓は上帝の祝文に於て最もよく現れられり。

さて孔子の言は既に郊社の眞想を發揮して餘蘊なしと雖ども、未だ天地てふ二元的の語の使用を禁ずる能はざりしなり。されど此の語は常に或る正常なる語の其と同伴するによりて、後世に至りてもさほゞ人々の誤解を起さざりしが如し。余は左に一例を擧げん。清朝の第一世皇帝、紀元後千六百六十四年に王位に陟るや天を祭り、祝文を捧げて之を告げたり。左に掲ぐるは其の初めの數句なり。

朕大清の天子、かしこみ／＼敢て皇天后土に告す。上帝は私なく、天下萬民をみそなはし玉ふ。朕が皇祖父さきに天の命をうけまつりて、國を東方に立てたり。朕が祖父は之に繼

きていよ、其の國をひろめ且つ堅めたり。今や天の僕、寡徳なる朕、之が嗣となりぬ。……朕天の恩寵を蒙り、億兆の望にひたがひて、此の十月上日帝位に陟りしことを天に告げまつる。

右の誥文を見よ、皇天后土とは只天及び上帝てふ名稱を飾りて、之を云ひまはせるに外ならざること明なり。

今更に他の祝文をかゝげて、孔教の有神主義を明示せんとするが、之に先つて易經に就て一言す可し。

或學者は易經を以て最古の國民の最古の書なり、支那古文學中の最とも古き書なりと云ひ。又支那人の深遠なる信仰を正しく會得せんには、是非遡らざる可からざる源泉なりと云へり。されど今詳しく此書を研査するに、其の中の一文字も西洋紀元前第十二世紀より古からず。其本文は、孔子の附録を除けば、二部より成り立てり。即ち一部は文王の作にして、他部は其の子周公の作、而して文王の部の編成は西紀前千四百四十三年にありと考へらる。故に支那古代宗教の權輿としては、易經は到底詩書二經に及ばざるなり。

然らば、如何にして易經を以て支那最古の書なりと云ふ一般の意見は作られたるかど云ふに、蓋し此の書は伏犧氏の作なりてふ全分二線(一及び二)より成立せる線畫即ち卦を基礎となすが爲めなり。但し此等の線畫の今に傳はれるもの六十四ありと雖ども、伏犧自から作りしは只八箇なりと云ふ。是れ有名なる八卦(☰☷☱☲☴☵☶☸)なり。

易と呼ぶる、文字は變易の觀念を表せる記號なり。易經とは「變易の書」なり。此の世の状態は

絶へず變遷す。動靜行止相繼ぎ相前後して瞬時もやまず。而して八卦の變化は此の物界及び社會の變遷に對應す。又幸福を生ずる人間并に物の關係及状態は吉なり。之に反して災害を生ずるは凶なり。而して此の結果は卦線の各々相對する位置によりて預示さる。而して其等の線畫は定數の木莖を以て組織的に變化せらる。此くして易經は卜占の用をなせり。易經の性質既に此の如し。故に諸君は此の書を研究するに先ち、前以て其の内には迷信的なる、妄想的なる、又奇怪なる多くの觀念を見ることを覺悟しねかざる可からず。

さて卦の全線は剛なり。分線は柔なり。此の二者は萬有成立の本体たる隱微幽玄なる原物質(此原物質は所造の物か、又は無始無終の物か説ける處なし)の二形を表す。一の形にては原物質は動なり、陽と稱せらる。他の形にては靜なり、陰と稱せらる。總て剛且つ動なるものは陽性のものなり。柔且つ靜なるものは總て陰性の物なり。日月、天地、男女、君臣等は此等の對比の一例なり。此等の對比の集合はすなはち宇宙萬有の全体を成す。而して易經の圖式は此の全体の現象の縮圖なりと信せらる。

又變易の因て生ずる幽微なる運用は鬼神と稱せらる。こゝに鬼神と云ふ語は一種異常の意義を有せり。神は陽なり。原物質開展運用にあるときの名なり。鬼は陰なり。同じく原物質收縮作用にあるときの名なり。されど孔子は此の運用中、一の物質的ならぬ力の存在することを承認したり。此の事は下文に述べ可し。

以上述ぶる處によりて、聊易經の性質を示し付たりと信す。余は爰には更に詳説するを得ず。とにかく此の書は占筮の用をなさんが爲めに構成されたる、奇怪なる物理的思辨の書なり。而

して宗教の問題を研究するに於ては、些少の扶助を與ふるのみ。

余は爰に隨手に支那人の卜占思想を畧説す可し。卜占に關する迷信が、上古代より既に支那人祖先の心裡に現れおりしことは源始文字の分析によりて上文に示したり。蓋し支那人は卜占法によりて、未來の事件そのものを預知し得ると信せしにあらざして、其目的は人が將に爲さんと企つる事が、若し實行せらるれば實際善惡何れの結果を生ずるか即ち其の事の吉凶如何を前知するにありしなり。今日専ら卜占にたづさはるものは道士なり。

さて再び易經にもどりて説かんに、此書の大部分は孔子の手に成りたりと云はる。彼はヨホド易を好みしものと見え、「讀易章編三絶」又「加我數年。五十以學易。可無大過。」等の語傳れり。今易經の附録として孔子のものせし文を見るに、少くとも二ヶの目的は明かに現れおれり。一は易經の教に道德修身の質を含ましむること、二は易の線畫は自然に於ける變易の現象を如何に表す可く作られしかを解説することなり。

左に該附録中の最長篇より二文を引きて、以て易經の解説を終らん。其の一は實に僅々數語を以てよく易の本性を表せるものなり。曰く「一陰一陽之謂道」其の二も亦簡捷なり。曰く「陰陽不測之謂神」。孔子は易に現はれし總てのものが、事實界に現はれし總てのものを解説するにあらざることを感じたりき。事物の狀態に陰陽の區別が與へられ又陰陽の動力は與へらるゝと雖ども、されど彼は尙ほ更に各現象中に不測の或物あるを悟れり而して此の不測の中に彼は神明の運動を認識せり。余始めて彼の眞意を解せしとき、使徒パウロの「同一の神は總ての中に働く」と云ふ觀念自から予が胸裡に現はれ來りぬ。余は確信す。孔子は宇内の萬類萬象中に上帝

の現在と活動を認識したりきと。

但し皇天  
上帝と變  
更されたる  
なり。

以上易經に關する問題を畧解し了りたれば此より再び國祭中に現れたる支那人の一神教にもどりに、千五百三十八年明朝の皇帝が、上帝の尊稱を些少變更せんが爲め、大祭を行ひて、之を天に告げし時の祝文をかゝげて以て余が所説をいよ、確めん。さて些少にもせよ、此まで呼び來りし尊號を變更することはよういならぬ一大事なり。故に國王は先づ郊社の祭に關係ある天地山川の群神を祀りて、宜しく此事を上帝にとりなさんことを乞へり。其祝に曰く（譯者云ふ不肖の殊に漢學に淺薄なる、左に掲ぐる祝文の原文は何の書に出でおるやを知らず。但し本章原文には *The Statue of the Ming Dynasty* より引用せりとあるが故に、此は明令か又は明律より引用せしならんと思ひ、此二書を探りたれども此かる祝文あるを見ず。よつて不得已レツゲ氏の英譯を其儘に直譯したり。讀者之を諒せよ）

朕大明朝の皇帝、謹で日神、月神、五星の神、獸帯星宿の群神、全天の群神、雲師、風師、雨師雷師、在天各有職の群神、五大嶽の諸神、五大丘の諸神、五丘の諸神、四海の諸神、四大河の諸神、在地各有職の諸神、天下の全天神、天下の全地神、現年守護の神、第十月守護の神、各日守護の諸神及び郊社の地守護の神に告げんが爲めに、祇て本紙を備へたり。來月上日、吾等は謹で、吾等の吏人庶民を率ひ、九府の蒼穹を仰ぎて以て、皇天上帝のいと大なる御名をわがめんと欲す。之をあらかじめ汝等に告ぐ。總て汝天上の群神、汝地上の群神よ吾等が爲めに汝がくしき力をつくし、汝が能徳を現はし以て吾等が賤しき欲望を上帝に通し、吾等が祈願を許し、吾等が祇で呈する稱號をうけたまはんことを上帝に乞ひ

願ひ玉へ。

七十二

之を汝等に希はんが爲めに、吾等は本紙を備へつ。總て群神達よ、能く吾等の望欲を察し玉へ。祇で群神達に告ぐ。

右に見る處、此の祝文は支那源始の一神教の周圍に、天地山川の諸神の認容及び祭祀は如何に生長せしかを示せり。されど尙は一神教は留存せり。上帝は群神の内にあらず、否な群神の上に獨り超然たるなり。群神は只役者に外ならず。特に彼等の爲めに祭祀の行はるゝ場合なかりしに非ずと雖ども、國王は威權的の吾等を以て恰も其の臣民に對するか如くにいと應揚に彼等に告げたり。

さて撰定せし日は來りぬ。國王は皇后を伴ひて圓壇に立ち、百官は整列せり。先つ上帝の天降り近づけるを祝して、曰く

太古元始に大極ありき。無形にして、幽冥なりき。五行は未だ遁環を始めず、又日月未だ照らさざりき。其の眞中には形もなく、又聲もなかりき。ア、神皇 *Spiritual Sovereign* 汝は汝の高職に於て現れ來まじき。初めに清濁を分ちき。汝は天を造り、地を造り、人を造りき。萬物は各其の實體と共に生産力を得たりき。次に稱號變更の告示を呈して曰く。

ア、帝、汝陰陽の道を開けりしとき、汝の事業は進行したりけり。ア、神よ、汝は日月五星を造れり。彼等の光は純粹美麗なり。天穹は幕の如く張り、方地は其の上にある總てのものを負ふ。而して萬物は幸福なり。吾、汝の僕祇で敢て汝に謝す。而して今汝を祭る間に、

汝を皇 *Sovereign* と呼びまつることの告示を呈す。

夫より寶石綿布を奠して曰く。

ア、帝よ、汝は吾等の父として、吾等をみそなはし玉ふものから、吾等の願をきゝ入るゝことを許し玉へり。吾、汝の兒、愚昧不文にして吾が感情を十分表はすこと能はず。汝、吾等の告ぐる所を許容し玉へることゝ汝に謝す。汝の大なる名はたふとし。祇で吾等は此等の寶石絹布を獻す。而して春光を喜べる燕の如く汝の大なる愛を讃稱す。次に下の祝を執て、饌を盛りたる盤を獻せり

大饗は來りぬ。吾等の喜びの聲は雷の如し。皇神は吾等の奠品を受けんことを許し玉へり。彼の僕の心情は一點の塵埃の如く、彼の心情の中にあり。肉は大鍋の中に煮られ、香料は備へられたり。奠を饗けよ、ア、帝よ。而して萬物は幸福を得可し。吾、汝の僕、汝の恩恵を蒙りて、實に幸福なり。

それより初獻あり。祝に曰く

廣大なる者は其の恩恵と寵愛を下せり。吾等力なきものは之を受くるに難し。吾、彼の實直なる僕、今祭祀を行ふに於て、此のたふとき杯を、無始無終の彼に獻す。

夫よりつゞいて感謝の祈、及び中獻終獻等ありて後、總ての奠品を撤し、左の如く祝せり。歌頌の禮は畢りぬ。されど吾等の微誠は十分表さるゝ能はず。汝の大なる仁恵は無限なり。陶工の如く、汝は總ての有生物を造りたりき。大小は(汝によりて災害より)かこはる。汝の仁恵は賤しき汝が僕の心裡に銘せらるゝと雖ども、吾が感情は十分表さるゝ能はず。大

七十三

なる仁愛を以て汝は吾等を護り、且つ敢て吾等の罪の惡をどがめず生命と安寧を賜はる。最終に送神の禮を行ひ。種々の奠品を焚けり。此の儀の行はるる間には、又一の祝文は誦讀されたり。其の最終の文は左の如し。

吾等は祭り、且つ此の玉帛の上に大なる名を録しつ。今之を帝の前にさげ、而して之を火中に置く。又た絹布鮮肉等の種々なる奠品を、彼等は炎々たる火焰となりて、高く蒼穹に上り得んが爲めに、其等の正實なる祈禱を以て之を焚く。地上の總ての目的は彼を仰ぎ望む。地上の萬民萬物は共に大なる名を祝す。

余は今こゝに以上掲げし處の祝文が諸君の心裡に印したらざる可からざる感覺を強めんとして、嗚々辯せざる可し。支那國民源始の一神教は今日も尙ほ國祭中に留存しおれり。余輩は既に如何に支那太古人が彼等の源始文字を創作し始めしとき、萬物の上にある廣大無限の一物として可視的の天を像りたりしかを見たり。其の時彼等の心裡に、萬物の主宰てふ神の觀念は此の可視的の天の畫字を表號として起りたりき。彼等は此の神の觀念を、人性的實在者と見たるときには、之に帝てふ名稱を與たり。而して天と帝との二語の關係結合は多神教の興起を拒ぎたりき。余は今爰に如何なる次第にて、多神教の觀念が支那人の心裡に起り、又天帝二語の關係は如何にして之を排除したるかを詳しく述ぶる能はず。とにかく漠然たる多神教的臭味は、西紀後第十四世紀の中頃、明朝の興起するに當て、總て國祭中より掃蕩されたり。(此の朝の皇帝中には前上に掲げたるが如き有名なる祈文を、吾人に傳へたるが如きもあり。)されど尙ほ余輩は郊社の祭の行はるゝ方法には決して同感を表する能はざるなり。天地の神祇が其祭祀中に各々

一の位置を占むるを悲むなり。併し彼等は帝 Gods に非ず又帝と稱せられず、隨て未だ先聖傳來の一神教を陰蔽するに至らざるは、せめてもの事なり。既に述べつるが如く、真正なる孔教の祭祀に於ては、眞神の外、如何なる神靈にも帝なる名稱は與へられざりしなり。惟ふに羅馬カソリック教は天使聖徒等をも拜するが故に、一神教的ならずと云はるれば、均しく支那の宗教も亦、天地山川の群神に下等なる祭祀を行ふが故に一神教的ならずと云はる可けれども、さはれ羅馬カソリック教にして一神教的なりと云はるゝ以上は支那の孔教も亦然か云はる可きなり。

余は將に本章を終らんとするに當て、孔教の祭祀の性質に就て一言す可し。

## 第二 孔教の祭祀

支那人の祭祀には毫も贖罪或は罪障消滅の觀念を見ず。彼等は全く祈請と感謝を伴へる義務の貢物報恩の禮物なり。彼等は毫も罪惡の觀念を現しおらず。全く依頼の念にてみちみてり。又身代 Substitution の觀念は郊社の祭に於ても、又は其他如何なる神事に於ても現れおらず。更に奉獻 Consecration の觀念も亦、祭祀の何たる部分に於ても、表されおらざるなり。尤も身代及び奉獻の觀念は支那國民の歴史には現れおれり。書經湯誥に曰く「其爾萬方有罪、在予一人。予一人有罪、無以爾萬方、又書經中には見えざれども、史記には湯土雨請の事を記せり。此く身代并に奉獻の觀念は歴史中には見出さるゝなり。されど彼等は宗教上の儀式中には進入せざりしなり。

エドキンス博士は郊社の禮に就て、「郊社の諸禮中にある祭祀の觀念は饗應の觀念なり」と云へ

り。是れ解し難き言なり。儀禮全体の觀念こそ或は饗應の觀念なるならめ。されど祭祀と饗應とは調和され難き觀念なり。更に又饗應の觀念は全く郊社の禮に適せざる觀念なり。實に當代國王の列祖は、靈体にて祭壇の上に来り、國王より崇拜を受くと思像せらるゝことは疑ふ可からず。蓋し祖先は上帝の伴隨者にして郊社の祭に於ては上帝と共に崇拜を受くと思せらるればなり。されど彼等祖先のこゝ祭壇の上に、降り來るは只家族堅固てふ深き信仰に基づけるのみ。而して此の家族堅固てふ觀念は支那人の特質なり。

國王は嚴然たる威權を備へて、祭壇の前に立ち。而して其榮光は靈体を以て彼と共に現れ、相次で王權を彼に傳へ來れる祖先の上に反照す。然れども拜禮全体は上帝に對せるものなり。最終の禮は奠品を焚き、送神の祝を誦讀することなり。此の禮に於て國王は自分及び其の子孫の爲め、且つ萬民を代表して、彼等が神に盡す可き義務、及び政治的制度に於て上帝の志ざし玉へる目的を達せん様國家を治めんとする彼等の意志を、いと嚴肅なる言辭を以て誦ぐるなり。郊社の禮に關する管見以上の如し。郊社の禮に於ては、國王は同時に祭司長并に萬民の父として祭壇の前に立つとは、屢々云はるゝ言なり。されど彼若し祭司長ならば、彼の下にありて祭司族てふ一階級をなすものは何人等なるか。蓋し支那に於ては祭司族と稱す可き一々特別の階級はなきなり。余輩は常に彼等の禮拜に用ひふる供獻に、不適當にも Sacrifice なる名を適用し而して夫より其等の Sacrifice を供ふる爲めには祭司あらざる可からずと推測す。されど此は繆なり。

夫れ國民を分ちて四階級とすことは、甚だ古し。既に書經の一書中に見ゆ。蓋し四階級とは

吏 Official 農 Husbandman 工 Mechanics 商 Merchants を云ふなり。されど此は社會的區別にして、宗教的區別にあらず。此くて支那にはバラモン教の階級制度の如きものは皆て存在せざりしなり。支那の歴史を通じて吏族はヤ、祭司衆に類似する點を有せり。封建制度の連續せる間は、此の階級の人々は諸國の候族の嫩芽にてありけり。彼等は特に彼等の爲めに設けられたる學校にて教育を受けたりき。後名族の元素、社會より消失するに當て、教育の元素之に代り、學者は一般に主なる階級、即ち概ね人民の支配者の撰出せらるゝ階級となりたりき。彼等は常に余輩の祭司衆 Clerical body と稱するものに近似せり。されど彼等は祭司を去ること遠し。否な國祭に關する或る職務をとりつゝあるときは宗務官とも稱す可からざるなり。

國祭に於ては、國王は自から宗務大臣として祭祀の最要の儀を司り、上帝に對する先聖傳來の高尙なる觀念を宣揚し。宇宙の萬物は悉く上帝に依屬するものなるを誦ぐ。されど彼は庶民の父母、庶民の代表者として之をなすなり。決して祭司としては非ざるなり。

第五章 孔教論(其の二)

第三 祖先祭祀

本章に於ては先づ孔教の祖先祭祀を説く可し。

夫れ支那太古人の宗教的信仰の一神教的なりしことは、既に源始文字の分析に據りて辨じたり。されば上帝の祭祀は支那太古人の最第一の祭祀なりけり。恐くは或時代の間は、唯一の祭祀にてありしならん。然るに後漸々自然は上帝の顯現なり、其各部分には上帝の命をうけて、之を司宰する神祇ありとの迷信發生し來りぬ。是に於てか上帝と共に其等の神祇をも祭るに至れり。而して上帝及び群神の祭祀は全く國王の吸收する處となり、隣にも一般の人民は全く上帝の交通を切斷されたり。されど人類は崇拜的動物なり。固有の崇拜心は何にかに向て、發出せざれば已まず。而して上帝の祭祀は禁せられたれども、尙は祖先の祭祀は許されたりしを以て、彼等は終に滿腔の宗教心をこゝに注射するに至れり。

夫れ孔子の教に従へば、考妣の祭祀は孝道の一部分なり。彼曰く

生事愛敬、死事哀戚、生民之本盡矣、死生之誼備矣孝經親章

生民の本は孝なり。而して死に事ふる哀戚の禮の内にて、之を祭るは一要事なり。孔子は以上の言を以て、先聖傳來の思想を顯章したるなり。今考てふ文字を分析して、其の所表の觀念を窺ふに、此の文字は源始文字の一なり。而して老人の記號なる字と子の記號なる字との二源字より成れり。此くて孝の源始想は其の父に奉養する子を畫きて表はされたりしなり。されど奉養

は未だ孝道を盡さず。孔子の解説を見よ。孝經紀孝行章に曰く

子曰孝子之事親也。居則致其敬、養則致其樂、疾則致其憂、喪則致其哀、祭則致其嚴、五者備矣、然後事其親、事親者居上、不驕、爲下不亂、在醜不爭、居上而驕則亡、爲下而亂則刑、在醜而爭則兵、此三者不除、雖日用三牲、遂爲不孝也。

之に對照するに論語爲政第二の

今の孝者は是れ能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで皆能く養ふ。敬せずんば何を以て別たん。を以てせば孔子の意更に明也。

上帝并に群神の祭祀は、書經舜典中に於て始めて見ゆることは既に前章に説けり。余は更に祖先の祭祀も亦、此時代に於て、既に行れたりしならんと思惟す。

帝四岳に咨ふて、曰く、能く朕が三禮を典るものあるか。兪曰く伯夷。

帝曰く、兪り、咨伯汝秩宗を作れ。夙夜惟れ寅んで直哉。惟れ清し。こゝに秩宗を作れとあるを英文には祖廟之整理者たらざる可からずと譯せり。

右の文によりて見れば、舜の朝に於ては、今宗務大臣とも稱す可き官は特に祖廟の整理者と呼ばれしなり。惟ふに祖廟に屬する諸儀諸禮は大に舜の時間及び注意を費せし所ならん。

書經を通覽するに余輩の豫想に違はず、舜朝以後歳月の移步すると共に、祖廟の祭儀に關する記事の漸次増加するを見る。惟ふに孔子の周朝の建設者によりて行はれたりしとて記録せる祭祖の儀禮は更に早き舜の時代より既に行れおりしものならん。廟祭は毎季一回づゝ行れたりき。中庸第十九章に曰く

春秋(夏冬を含む)其祖廟を脩め、其宗器を陳ね、其裳衣を設け、其時食を薦む。而して將に其親を祭らんとするものは、内に致齋し、外に散齋す。齋するの日、其居處を思ひ、其笑語を思ひ、其志意を思ひ、其樂む處を思ひ、其嗜む所を思ふ、齋すること三日にして、乃其の爲めに齋する處の者を見る。祭の日室に入て儼然として必ず其の位に見ゆることあり。周還して戸を出づるに肅然として必ず其容聲を聞くこと有り。戸を出て而して聽け、愾然として必ず其の歎息の聲を聞くことあり禮記祭義第二十四。詩經には商朝の建設者成湯を祭る樂二篇あり。作者は其の祭儀にあづかりし商の一國王なりと云ふ、左に其の一を掲ぐ可し。

猗與猗與。置我鞀鼓、奏我鞀箎、循我烈祖。

湯孫奏假、綏我思成、鞀鼓淵々。

嘒々管聲、既和且平、依我磬聲。

於赫湯孫、穆々厥聲。

庸鼓有攸、萬舞有奕。

我有嘉賓、亦不夷懌。

自古在昔、先民有恪。

溫恭朝夕、執事有恪。

顧我蒸嘗、湯孫之將。

書經甘誓篇は夏朝第二代の國王、將に有扈氏に天誅を加へんとて出陣する際に、六卿を召して

誓ひし言を録せるものなり。始めに士氣を鼓舞し而して終りに至て曰く

命を用ひば祖に嘗せん。

命を用ひずんば社に戮せん。

予則汝を孥戮せん。

右の語によれば、支那古代の帝王は、其出軍のときには必ず勝軍の端として、祖神并に地祇の木牌を戰場に携へ行きしもの如し。

余は又此の語によりて、前章に辨せし神主は既に夏代の始めに於て用ひおられしものと断定す而して此の隨手に、周代に起りし廟祭の儀式の奇異なる變更に付て一言す可し。周代に至て此まで廟祭に用ひ來りし木牌を去り、而して同性の生人を用ひて之に代るの儀始まれり。此く祖先の代表者として用ひらるる人は、其祖先の祭祀中は己れ其祖先の位置に上り其の祖先に歸す可き一切の敬禮を受け、且つ其の祖先の靈は其身に宿ると信せられたりき。彼等は神酒神饌を飲食して祖先の供物を享くるに擬し又祖先の意向を祭主に通じ、又祭主及び其の家族の上を下れる祖先の祝福を告げたりき。然るに此の生人を用ゆることの奇慣例は其の共に起りし周朝の衰滅すると共に又衰滅したりき。余は今こゝに一言諸君に注意を加へん。曰く此の儀式は甚だ奇なりと雖ども、されど此の奇異なる儀式の行はれしことは、愈々以て神主の使用に拜物教的の臭味を含みおらざりき、又おらずと云ふ愚見を確むるなり。

詩經には周朝諸王の祖廟の祭儀を叙せる詩多し。又孝徳の聖詩と稱さる可きものもあり。蓋し孝は此の朝の建設者が主上の徳として尊びし所のものなり。左に武王の頌をかゝげて一例とせん。



下武維周

世有<sub>二</sub>哲王<sub>一</sub>。

三后在<sub>レ</sub>天

王配<sub>二</sub>于京<sub>一</sub>」

王配<sub>二</sub>于京<sub>一</sub>」

世德作求。

永言配<sub>レ</sub>命

成<sub>二</sub>王之孚<sub>一</sub>。」

成<sub>二</sub>王之孚<sub>一</sub>。」

下土之式。

永言孝思、

孝思維則。」

媚<sub>二</sub>茲一人<sub>一</sub>、

應候順德。

永言孝思、

照哉嗣<sub>レ</sub>服。」

昭茲來許、

繩<sub>二</sub>其祖武<sub>一</sub>。」

於<sub>二</sub>萬斯年<sub>一</sub>、

受<sub>二</sub>天之祜<sub>一</sub>、

受<sub>二</sub>天之祜<sub>一</sub>、

四方來賀。

於<sub>二</sub>萬斯年<sub>一</sub>、

不<sub>二</sub>遐有<sub>レ</sub>佐<sub>一</sub>。

前述せる尸祝新設の外大立法家周公は又祭祀上一の新しき禮を起したり孝經聖治章第十に曰く  
天地之性人爲<sub>レ</sub>貴。人之行莫<sub>レ</sub>大<sub>二</sub>於孝<sub>一</sub>。孝莫<sub>レ</sub>大<sub>二</sub>於敬<sub>レ</sub>父<sub>一</sub>。敬<sub>レ</sub>父莫<sub>レ</sub>大<sub>二</sub>於配<sub>レ</sub>天<sub>一</sub>、則周公  
其也。

多くの支那の學者は此の文を解して曰ふ。舜は只其の祖先の徳を思ひたりしのみにて、未だ其  
一をも郊祭に配せざりき。之をなせしは夏商の諸王なり。されど此の榮譽を當代の國王の父に  
まで及ぼしたるは實に周公を以て始めとす。余は此解説を信ぜざる可からず。此實に解説は  
史前時代に於ける上古の上帝祭の面影を窺はしむるなり。即ち上古の上帝祭は只上帝を拜せし  
のみにて、其の祭壇上には祖先の神主もなく又大人の神位もなかりし状態を想はしむるなり。  
其の供獻も亦純粹なる感謝的崇敬的の貢物にして、後世の供獻の如く饗應或は宴會に非ずやど  
の、疑を發せしむるが如きものには非ざりしならんと想ふ。

周公は更に「大王王季を追王し。上先公を祀るに天子の禮を以てせり。」而して後世の諸朝は皆  
な之に倣へり。現清朝の諸王の眞に王位に陟りしは千六百六十四年以後なり。然るに同年以前

の六酋長は追王せられ、眞實なる諸王と共に大廟に於て祭らる。彼等の妻も亦祭儀の一部分を占め、其の神主は其の夫の神主と共に一祠の中に並列さる。右に述べし處より、諸君は支那の朝廷にて行はるゝ其等の大祭節は、實は家族の大會合と稱す可きものなるを見らるるならん。こゝに死者生者相共に會合し、飲食し、生者は死者を尊び、死者は生者を恵む。此は魯頌關宮の一章に於て甚だ明かに現はれおれり。

秋にして戴ち骨すれば  
夏に福衡す。

白牡、駢剛、犧尊將々たり。

毛包戴蕤、籩豆、大房、

萬舞洋々たり。

孝孫慶あり、

汝をして熾にして昌ならしめ、

汝をして壽にして安かしむ。

かの東方を保ちて魯邦是常あり、

虧けず、崩れず、

震はず、騰かす。

三壽を朋となして、

岡の如く、陵の如けん。

周朝の禮法を精窮したる一學者近頃、一論文を支那評論に寄せけるか其の内に左の語ありき。

正しく孝の情を會得し、之を以て天下國家を治むる機關となしたるは、實に古代の聖賢政治家の榮譽なりと想像されたりけり。聖人の志向に付て今に傳はれる記録を見るに、吾人は迷信の觀を失ひ、基督教國に於ても亦行はるるが如き無邪無害の儀式の前にあるが如き感あり。

此の語、其の中に大なる眞理を含めり。既に辨じつるが如く、庶民は全く上帝の祭祀を禁せられたるなり。而して彼等が宗教的感情を注ぎ得る溝渠としては、只祖先祭祀の残りしのみ。是に於てか聖人は孝を基本として一宗教を成せり。之れ主宰者たる唯一の上帝の信仰及び祭祀を離れて獨立し得る宗教にはあらざりき。されど其はかの高等なる祭祀と並立したりき。而して其の影響は有害なりけり。

國王の祖先は該朝の守護神となり。各家族の祖先は其の家族の守護神となりたりき。此の結果は既に早代に於て現れおれり。前文に引用せる魯頌關宮の一章を見よ。又書經に於ては周書金縢篇中最も明かに現じおれり。就て見る可し。

支那の祭祀には又其に附着せる一缺點ありき。即ち祭法の廣大にして複雑緻密なることなり。夫れ諸侯士大夫等にあつては時間もあり、資産も豊かなれば、大なる祖廟をも建築し得可く、又種々の儀式をも一々行ひ得しならんが、されど一般の人民に於ては此は到底爲し難きことなり。紀元後第十一世紀頃の有名なる一學者は彼の時代には既に大夫の内にすら祭廟の禮を忘り、又は捨てて顧ざるものあるに至れりとして大に慨嘆せし由或書に見ゆ。此くて庶民は多く佛教殊

に道教の迷信に陥りぬ。

支那人の尊孝教育は、全く子弟の心情を父兄の方に引きつけ、又父兄の道に附着せしめたり。之より生せる敵害もどより少からずと雖も、されど又孝順の無数の例あるを忘る可からず。余輩は此の大國民の連綿として永續せる存在并に發達を、余輩の第五誠「汝の父と母を敬へ、斯は汝地の上に於て、汝の命を長く在らしめんが爲めなり」に附與されたる約束の徵驗として見れば可なり。

第四 大人祭祀

以上祖祭の大概を畧述しつれば、此より大人祭祀の綱要を説く可し

大人祭祀の觀念は禮記祭法第二十三に明かにして、余輩の敢て喋々するを要せず。

夫れ聖王の祭祀を制するや。法民 施せば則ち之を祀る。死を以て事に勤めたるをば祀る。勞を以て國を定むるをば祀る。能く大蕃を禦きたるをば祀る。能く大患を捍げたるをば祀る。

それより祭祀す可き聖帝、明王忠臣烈士等を列舉し終に臨で曰く

夫の日月星辰は民の瞻仰する處なり。山林川谷丘陵は民の財用をとる所なり。此の族に非ずんば祀典に在てせず。

前章に山林丘陵等を祭るは則ち上帝の命をうけて人類を惠まんが爲めに彼等を管理する群神を祭るなりと云へるが今大人祭祀に就ても亦同じく然か云ひ得るなり。彼等は死後上帝に屬し上帝の任職の一分をとり以て萬民を惠むと信せらるゝが故に祭らるるなり。實に支那人の祭祀は何れの部分に至るも均しく彼等源始の信仰なる唯一眞神、萬物の主宰者てふ觀念を現はしおれ

り。左に掲ぐる詩經周頌執競一章は能く支那の大人祭祀の真相を寫せりと云ふ可し。

思文后稷。

克配彼天。

立我烝民。

莫匪爾極。

貽我來牟。

帝命率育。

無此疆爾界。

陳常于時夏。

大人の恩恵に戀々として永世之を紀念するは、もとより余輩の言を挿む處に非ず。されど廟を興し、祭祀を行ひ、神饌を供へて之を饗するに至ては、其の可なるを知らず。殊に後世に至つては國王は其の祭祀する處の帝王の德行如何に注目せず苟も帝位に陟りしものには、其の徳なき價値なきをも、總て祭祀するに至れり。されは今庶民の間にありては、如何に此の祭祀は濫用さるゝに至りしか、此は諸君の想像にまかさん。惟ふに孔子の「其鬼に非ずして祭るは諂なり」と云へるは、此の濫用の既に彼の時代に萌生せるを見て、之を矯正せんとの意なる可し。余は然りと信するなり。

余は此より次の問題に移らんとするに當て、暫時前文に述べし處を反省し。此かる神靈崇拜は果して善良なる、道徳的なる、宗教的なる影響を及ぼすや否や、又及ぼせしやを一考せん勿論

余輩は廟祭に用ゆる木牌の上に、神靈の降り來りて之に宿るてふが如き信仰の愚妄なるを嗤笑す。されど支那人の祭と云ふ語は、鬼神と交通する、又は會合する等の觀念を含めるものなるより考ふれば、祖祭に於て、祖先の靈を呼び來り、此れが德行を顧みんとて一心一向に祈念する敬虔なる祭者に有ては、深く祖先の親愛を感じ、彼等が德行善業を明かに想ひ起し、而して彼等の如く善良有徳なる人たらんと、決心するに至るまでは已まざる可し。余は屢々此の問題に就て、支那人と談じたり。されど彼等よりは未だ満足なる答を得ず。彼等は通例云ふ。祭祀によつて吾人は益を得ると、而して此が證として經典中の三章を引くを常とす。第一は孔子の言なり。中庸に在り。

子曰く鬼神之徳たるそれ盛なるかな。視れども見へず。聽けども聞へず。物に體して遺す可からず。天下の人をして齋明盛服して以て、祭祀に承ふまつらしむ。洋々乎として其上に在ますが如く、其左右に在ますが如し。

第二は詩經大雅文公の什三の一思齋二章なり。

惠<sub>三</sub>于宗公。神罔<sub>三</sub>時怨。  
神罔<sub>三</sub>時恟。刑<sub>三</sub>于寡妻。  
至<sub>三</sub>于兄弟。以御<sub>三</sub>于家邦。  
雖<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>宮、肅<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>廟。  
不<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>亦臨、無<sub>レ</sub>財亦徐。

第三は同じく詩太雅蕩之什三之三抑十三章中之二章なり。

視<sub>三</sub>爾友<sub>三</sub>君子、

輯<sub>三</sub>柔爾顏、

不<sub>三</sub>遐有<sub>三</sub>愆。

相<sub>レ</sub>在<sub>三</sub>爾室、

尙<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>愧<sub>三</sub>于屋漏。

無<sub>レ</sub>曰<sub>三</sub>不<sub>レ</sub>顯、

莫<sub>三</sub>予云觀。

神之格思、

不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>度思。

矧可<sub>レ</sub>射思。

第五 人性論

本節に於ては孔教の人性論、殊に人間の性質、義務并に運命に關する教説を論述す可し。前章に述べし如く、宇宙萬有、天地人の三才は獨一の實在者即ち上帝の所造なりとは孔教の世界觀なり。而して人間を以て所造物の最上位に置けり。書經周書泰誓に曰く

人は萬物の靈なり。

されど人は何故に萬物の靈なるか。人間の如何なる性質が彼をして萬物の長たらしむるかど云ふに至ては孔教の思想明亮ならず。經典中には一も之に説き及ぼせる處なし。げに孟子は人之所<sub>三</sub>以異<sub>三</sub>於禽獸<sub>三</sub>者幾希。庶民去<sub>レ</sub>之、君子存<sub>レ</sub>之。

と云へり。されど其の人間と、禽獸と異なる所以の性質に至ては毫も説及せずして、直ちに舜を以て君子の例として曰く。

九十

舜明<sub>ニ</sub>於庶物、察<sub>ニ</sub>於人倫、由<sub>ニ</sub>仁義<sub>ニ</sub>行、非<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>仁義<sub>ニ</sub>也

孟子ここに人獸の差を云へるは、此が差を哲學的に説明せんが爲めにあらず。只聽者をして德行を修めしめんとするが其目的なりしなり。故に西紀後第二世紀の有名なる註釋家は之を補ひて、曰くここに所謂人獸の差とは單に仁義を知ると、知らざるとにありと。實に此の差は大なり。されど支那古代の人々が一般に人は萬物の靈なりと云ひしは、斯る差別けぢめを辨めての上なりしとは思はれず。

さて此の萬物の靈たる人間に對して上帝の求め玉ふ義務并に人間が此の義務をはたし得る道に就ては下の如き語あり。書經湯誥に曰く

惟れ皇なる上帝は衷を下民に降し玉へり。若ふて恒の性あり。克く厥の猷(道)を綏するは惟れ后なり。

詩經には左の語あり。

天生<sub>ニ</sub>蒸民。

有<sub>レ</sub>物有<sub>レ</sub>則。

民之乘<sub>レ</sub>舜。

好<sub>ニ</sub>是懿德。

此くて人間の能力は各々なす可き任職を有し、而して人間の各關係にははたす可き義務あり。

人間の從ふ可き法則は、此の任職と義務なり。人間の行爲を不變に正しく指導するものは天より賦與せられたる恒性即ち道德官なり。此の道德官は則ち種々の關係に於ける人間を指導す。『されど下民は彼等の恒性を用ゆるに於ては、指導を要し、扶助をもとむ。而して此の指導者たり、扶助者たるは則ち國王の天職なりとは湯王の思想なり。此の思想既に舜帝の語に現れおれり。されど漠然たり。之を明かに言表したるは湯王なり。故に支那の學者は、湯王を以て始めて人性哲學を明説したるものと云ふ。宜なり。』

夫れ湯王の帝職説は、以後幾千年間支那國民の歴史を貫通して、諸王の理想たりしと雖ども、之れアマリ高尚に過ぎたる理想なり。總ての帝王は能く國家を治め、萬民の幸福を増進せしむると共に又之れが教師たり、之れが指導者たるを得ざる可し。ヨシ此かる帝王ありとするも之れ異數の人なり。之を總ての帝王に望む可からず。帝王は權威の位置に立てり。されど才能德行總て萬民の師たるを必ず可からず。是に於てか湯王の帝職説はやや敷衍されたり。周の第一世武王は一新元素を其の内に注入せり。

天は下民を佑けて之が君を作り、之れが師を作る。夫れ君師たるものは克く上帝を相け、四方を籠み綏す可きなり。

されど師の觀念は、タトヒ未だ十分には發達しおらざりきとは云へ、既に湯王の心裡に浮びおらざりしにあらず。湯誥に曰く

台小子天命の明威を將ふて敢て救さず。敢て玄牡を用ひて、敢て昭かに上天神后に告ぐ。有夏を罪するを請ふ。聿に元聖を求めて之と力を戮せ、以て爾有衆と命を乞ふ。

以上纏陳せし處、之を概括すれば、蓋し支那の宗教は「上帝は人類を造り、又彼等をして常に正道を踏ましめんか爲めに、良徳を賦與す。而して此の効果を確めんが爲めに、更に彼等を治め且つ化する君主、及び聖賢を撰ふ、教は以て彼等の徳を養ふ所以、政は以て彼等の幸福を増す所以。此等は即ち天の人類の爲めに備へ玉ふ處の物どもなり」と教ゆるなり。夫れ天は既にさる良性を庶民に賦與したるに、何故之を治化せんが爲めに更に此かる順備を要するか。湯王の相仲虺曰く

嗚呼惟天生民有欲。無主乃亂。惟天生聰明時乂。

民は既に徳性を具ふと雖ども、尙ほ惑ふの恐あり。否な惑ふこと確かなり。湯王に先つこと殆んど五百年舜王既に同一の眞理を顯揚せり。

人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。

同眞理は、又や、後に作られたる詩經大雅中の著名なる詩の第一句中にも現れおれり。

蕩々上帝、下民之辟。

疾威上帝、其命多辟。

天生蒸民、其命匪誥。

靡不有初、鮮克有終。

人性に關する以上の教は余輩の聖書の教と毫も撞着せざるが如し。然り余は撞着せずと信するなり。されど支那人の見解の十分なる説明に至ては、之を湯王以後千二百年及び千三百年の間の孟子の書に於て求めざる可からず。孔子曰く「人之生也直、罔之生也、幸而免」と、孟子は例の

如く更に明亮に、且つ完全に其説を述べて曰く「人性之善也、猶水就下也」と。されど彼は此の語を左の如くに解説せり。曰く乃若其情則可爲情矣乃所謂善也若夫爲不善非才之罪也」と。苟も僻見を挿せずして此の問題を考究する人にして、孟子の説に首肯せざるものは非ざる可し。實に孟子は其身は監督ハットラーより二千年あまりも以前に生れたりと雖ども、彼れの人性論は該監督の主唱したりし説の綱概を悉皆豫想せるなり。彼は仲虺の如く、民は惑ひ易きなり。物欲に陥溺し易きものなり、己れ獨にては其の良性を安全に保つこと能はざるものなるを承認せり。人若し不善をなさば、之れ本來善なる人性の法則を破れるものなり。彼等は「彼等の失ひたる心をさがし求めざる可からず。」而して聖人の例に倣ひ、聖人の訓言に従ひて此の心を保たざる可からず。實に孟子の人性分析は正當を得たり理に適へりと云ふ可し。されど人は如何にして其の實際の行爲に於て、本性の指教する理想の實現を過るか。又之を害するか。又彼等は如何にして其理想を回復し、且つ之を保存するかの問題に至ては彼の説く處缺然たり。

さて萬民を教化し、指導せんが爲めに、天に撰ばれたる聖人の制定したる人間の義務の課程は、如何。余は之に答ふるに、前世紀の一儒者の説を以てせん。西紀後千六百七十年 Kang Hsi Sacred Edicts 康熙聖敕として世に知られたる訓言（總て十六ヶ條あり）庶民教化の爲めに現朝の第二代の皇帝によつて公布されたりき。而して次代の皇帝は更に此の訓言を敷衍したりき。今此の聖敕は毎二回全國各所に於て誦讀講説せらる。其狀大に余輩の説教に類せり。さて聖敕第一の訓言は孝を尊ふ可きことを命ず。是れ支那人の第一且つ最大の誠なり。其の第七條に

は曰く

九十四

正教を尊ばんが爲めには異端を賤め、且つ之を斥けよ。  
有名なる註釋家 Wang Yungo. 此聖教を解せる内に云へる言は、能く支那教の教ゆる人間義務の全体を示せり、左に之を引用せん。

夫れ人には君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の關係あり又此の各關係に屬する義務あり。人は賢愚を問はず、一日も此等の關係義務を棄つ可からず。若し此の外、其の本分を超出して、幽玄なる教、奇變なる術を求めば、汝は身から極悪人たるを示すなり。

是れ支那人自からによつて解説されたる、支那の宗教に於ける人間義務の全体なり。夫れ支那聖人の教へし所は、社會内に於て人々を相結合せしむる義務なり。神に對する義務に就ては一言も云はず。蓋し人性及び社會の組織は上帝より來る。五常の道を盡すは上帝の意志に順從するなりとは正しく支那人の思想なり。されど其等の義務は全く上帝と何たる直接の關係なしに命せらる。

五倫五常の教は、既に書經舜典に見ゆ。孟子は其の意を布衍して曰く

人之有道也、飽食暖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人(舜)有愛之、使契爲司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。

余は支那の倫理ほど、友誼に重目を置けるものあるを見ず。此に關する道德家の思想は甚だ高尚なり。彼等は云ふ。朋友の交は相互に扶助し、殊に相互に其の徳を進歩するを目的とすと又夫婦の職務の關係は左の如し。即ち夫は導き、婦は之に順ふ、夫は外にありて働き、婦は内に在りて事を整ふ。余は夫婦の任職に於ける此の區別を以て纏れりとはなさず。されど支那の社會的生活も、追々西洋のに類似し來れば、到底此の區別を維持し難きに至る時節の到來期して待つ可し。されど女子の位置は常に男子の位置に劣りたり。其宗教は平等の眼を以て女子を視ず。妻たるもの子を生むまでは、其夫に伴ひて、家庭并に祖廟に於て、一の位置を占むるを得ず。

「つま」てふ意義を有せる普通の文字ニケあり。他よりも古く、且つ史前時代に屬する源始文字の一たるものは「妻」なり。男子の同伴者たる女或は男子と同等なる女を表はせり。此文字が「つま」の最も古き記號なりしことは實に喜ぶ可し。若し他の一文字すなはち「妾」、にして源始文字の一ならざりしならば、更に喜ぶ可きことなるに。支那の大古社會に於ては、男子は寢床の伴隨者として、只一女子をのみ有せしか、又只一女子をのみ有せざる可からざりしか、源始文字も古文書も共に默然たり。故に今之を知るに由なし。されど妾は確かに妻より劣れるものなりき。而してかかる男女間の關係は、果して一夫多妻なる名稱を興ふ可きや否や、余は未だ確言する能はず。されど總て支那の歴史は一夫多妻より生ずる啟害を現證せり。

書經堯典には、堯帝舜の果して帝位を繼ぎ得るや、否やを試みんとて、二女を降して彼に嫁たらしむと云ふ記事あり。又夏商の滅亡は各朝末代の王の淫亂に歸する事を記せり。又詩經には文王及び諸侯の家族的生活を瞥見せしむるもの多し。文王の皇后は有名なる才女にして、多數の詩の女主人公たるを見る。而して彼の最も高尚なる品性の一は、嫉忌心なく、且つ内宮に女官の充盈せるも敢て其の平心を失ふこと、あらざりしことなりと云ふ。

九十五

支那には殺兒の惡風あり。之れ彼等が天然の愛情を缺損せる證として、大に西人の非難をうく。此の風習は屢々西人の狀叙するか如く殘刻には非ざれども、確かに國內諸州に行はるゝなり。其の源因は主として貧窮にあり。余のここに此の事を記するは、此の不人情なる習慣の犠牲となるものは概ね女子なるか爲めなりげに女子は支那の宗教よりしては、大なる恩恵は受けざるなり。孔孟共に其の慈母を尊敬親愛することの大なりしを以て著しく、且つ彼等は蓄妾の非難を受けず。されど彼等が有妻的生活は福樂なりきとは見へず。又婦女の位置を改良せんとするの傾向を生ずるか如き女子に對する寛大なる愛情は一も彼等より發せざりき。女子の足を束帶する習慣は、今より九百餘年前に生まれり。基督教并に回教徒は之を禁せんとて百方盡力すれども其甲斐なし。現清朝の第二世皇帝は勅令を發して之を禁せんとし玉ひしかば、之れ亦詮なかりき。最とも奇異なるは此の時最とも烈しく禁令に反對したるものは、婦女彼等自身なりきと云ふ。習慣の力、實に驚くに堪へたり。人間死後の成行に就ては、孔教は一も明言する所なし。人は、たゞひ、其肉体土に歸するとも、尙ほ其存在を未來に續くるものなることは、常に彼等の信する所なり。されど其未來永續の狀態に就ては説く所、甚だ稀なり、明確には一も説く所なし。今死後永續の信仰の、支那古代の人々の思想中に存在せしことは之を經書に徵すれば明かに知らる。前文に引用せし武王の頌の中には三后在天てふ語あり。又同節中に紹介しおけりし周書金縢篇の中には、周公三后に祈りて國王の身代たらんことを乞へることを録せり。其他詩經中には、徵す可き所いと多し。又商書盤庚には先祖の靈災害を下民に下すてふ信仰を見る。又前

章より縷々陳述し來れる、上帝并に大人の祭祀は、其裏面には明かに靈の獨立なる存在并に生人は祭祀によりて彼等と交通し得ることを承認しおれり。上帝は爲すことなく、只割然として其位にあるものにあらずと信仰せしことは、古書中引證し得る處多し。詩經周頌の一に

敬之敬之。天維顯思。命不<sub>レ</sub>易哉。

無<sub>レ</sub>曰<sub>二</sub>高々在天。陟<sub>二</sub>降厥士。日監在<sub>レ</sub>茲。

更に易經文言傳中の一句を引證して之を示す可し。

積善之家必有三餘慶。

積不善之家必有三餘殃。

右引證せる語は、只天は善を愛し、惡を惡む。賞罰は單に時にありと云ふことを教ゆるに止る。又死後善人の靈は報賞と高位とを得るてふ信仰あるを見れども、惡人の靈の懲罰に就て云はるる所は一もあるなし。蓋し祖先祭祀の組織は未來賞罰の觀念をして、十分發達するを得ざらしめたるなり支那人は其の善人たると、惡人たるとを問はず苟も其祖先なる以上は、孰れも同等に祭祀せり。故に善人の靈の幸福は想像したれども、惡人の靈の苦罰には考へ及ぼさざりしなり。否な彼等に於ては祖先は悉く善人なりしが如くに表はせり。彼等は勉めて祖先の惡德汚行を隱蔽し、恰も非凡の善人なりしが如くに表はせり。

余は孔教の未來賞罰を辨せんが爲めに、易經の一文を引證しつ。蓋し此の語は家族の歴史中に、善惡禍福の生ずる次第を説けるを以て、最とも好く此點の思想を表はせばなり。されど其未來と



云ふは、單に此の世に於ける時の未來を云へるにて、來世を云ふに非ざるなり。而して此の觀解は孔子の時代までは、甚だ漠然として、未だ一定の形体を備へざりき。始めて此の觀解を明亮に言表したるは、魯の大夫孟釐子、其子をして孔子の門に入らしめんとて、死に臨んで言ひ聞かせし遺言なり。彼は先づ孔子の祖先を列擧し、而して孔子に至て、古人吾を欺かざるを知るべしと云へり。蓋し古人の言に「賢明善行なる人は、タトヒ生時に其の名著れずとも、後世其子孫の中より必ず聖賢起る可し」とあればなり。然り而して是れ現今一般に支那人の抱懐せる未來賞罰説の形式なり。彼等は信ず、徳不徳は若し一箇人自からの經歷中に其の應報を受けざれば、必ず後世子孫に於て受ぐ可しと。

此く支那古代の宗教の、人間未來の狀態に就て説く處の、甚だ漠然不定なるは敢て驚くに足らず。寧ろ余輩をして、其の教説するが如く簡純に靈魂の存在并に善靈の升天を承認し、而して敢て猥に愚妄なる想像をめぐらさざりしを感謝せしめよ。されど孔子の時代には、人々は此の點に就て更に明亮確定なる教を要するに至れり。孔子自からは亂神怪力の四事を説くを避けたりと雖ども、されど、弟子等の其等の問題に就て質問するを禁ずる能はざりき、其等の問題に關する孔子の語は甚だ甚なし。左に之を列擧して以て本章を終らん。

此の問題に關する孔子の語にして、最も能く知らるゝものは論語先進第十一章に在り。  
季路、問事鬼神。子曰未能事人、焉能事鬼。敢問死。曰未知生、焉知死。

此の語に就ては後世種々の見解を下せり。或る學者はここに深妙幽玄なる旨の含まれ居れりと云ひ他の學者は是れ只孔子が此かる問題に就て説教するを避けたるなりと云ふ、後者當を得たるが如し。

第二の語は劉向説苑に在り。

子貢孔子に問ふ。死人知あるか、知なきか。孔子曰く吾死者知ありと言はんと欲するや、孝子順孫生を妨げ以て死を送らんことを恐る也。知なしと言はんと欲するや、不孝なる子孫は棄て葬らざるを恐る也。賜死人知あるか、知なきかを知らんと欲するや、死徐に自から之を知る。猶未だ晚からざる也。

第一の語は論語に在れども、此の語は説苑に在るなり而して説苑は論語の如くに信據すること能はざる書なり。此の語は概ね支那人か孔子の語として承認する處なりと雖ども、余は其の眞實孔子の語に非ざるを望みたり。余は此の語の現せる思想は確かに孔子固有の教にあらざらざる也。

第三の語は禮記禮運第九に在り。

及其死也、升屋而號。告曰皋某復、然後飯腥而菹執。故天望而地藏也。體魂則降。知氣在上。故死者北首、生者南鄉皆從其初。

此の語若し眞實孔子の語ならば、死に於て身靈分離し而して靈は天上に於て其の存在を永續すと云ふ、古代の信仰を證するに於て甚だ緊要なり。  
第四ハヤハリ禮記祭義第二十四に在り。

宰我曰吾聞鬼神之名、不知其所謂。子曰氣也者神之盛也。魄也者鬼之盛也。合鬼與神教之至也。衆生必死。死必歸土、此之謂鬼。骨肉斃于下。陰爲野土。其氣發揚于上。

爲三照明蒸蒿悽愴。此百物之精也。神之著也。

百

以上經書の難句を數多掲載したれば、多少之に註釋を施さざれば諸君をして了解に苦ましむるの恐われども、余は今之をなすの暇なし。されど、タトヒ一言一句之を明細に吟味せずとも、肉体は土に歸するも尙ほ靈魂は天に上りて、其の存在を永續すと云ふ信仰は明かに窺はるゝを得可し。余は只之を示さんが爲めに以上の語を引用したるのみ。此く靈魂升天の信仰の存在せること明かなれども、されど其在天の狀態、及び天降り來りて誠實なる祭主に交通するの次第に至つては一も説く所なし。之を要するに支那の宗教は死後靈魂其存在を永續することは教也れども、其の存在の狀態に至ては説かざるなり。故に其の奉信者をして來世の信仰未來の希望を尊ぶに至らしめざりき。

説去説來、支那最古の宗教即ち支那國教の綱概を説述し了りつ。今にして願れば單に講説に非ずして、或は辨論に亘れる處もありと思ふ。されど之れ實に已を得ざるなり。余は偏に講説を旨としたれども、未だ學者の所見の一定せざる點に至て、己れ是と見る所を主唱せんには、勢ひ他を排せざる可からず。殊に支那古宗教論の如き、學者の研究日淺きものに於ては此は到底避く可からざるなり。

終りに臨て一言す、是に至て、本論(其の一)の始めに載せたる二ヶの孔教論は、到底繆説たるを脱れざることを亮然たる可し。支那國民は其の國教を孔子より授かりたるに非ず。他の諸國民の如く亦史前の時代より之を受けたるなり。而して此は本章及び前章に於て陳述せる處によりて、既に十分明かなる可し。余は今更に一言の加ふ可き必要を見ず。本章は之れにて擱筆せ

ん。

孔子は魯襄公二十二年庚戌の年、即ち西紀前五五十一年魯の昌平郷陬邑に生る。父を叔梁乾と云ひて、容貌骨格にたくましく、力も亦人に勝れたる知名の士なりけるが、孔子の生れたるときには、既に七十の齡をこへいたりき。其の先は殷の紂王の庶兄、微子啓より出づと云ふ。孔子三歳にして父を失ひ、母一人の手にてねひたりき。家貧ふして、生計の途甚だ困難なりし由は、論語第九章に於ける子自らの言にて知らる。其の言に曰く「吾少して賤かりければ、鄙事に多能なり」。されど子の幼年の生活は如何なる有様にてありけん、今は知ること難し。只「兒たりしとき、嬉戯常に阻豆を陳ね、禮容を設く」と云ふことの傳れるのみ。而して其の始めて學に志ししは十五の年なりしこと論語に見ゆ。

十九にして妻をめとり、明くる年一男子を擧げたり。又此の頃始めて仕官の志を起し、委吏となり、次て司機の吏に進めり。孟子陳子の間に答へて、君子の仕官すべき場合を説明せるとき、君子は單に飢餓を免かるゝが爲にも、仕官することありと云へるは、蓋し孔子此の時の仕官を暗示せるならん。

二十二の年、教授を始む。彼の家は先聖の遺教、國家古代の歴史を顯揚せんと希望せる、銳意熱心なる青年の簇集する處となりぬ。其の受くる處の謝禮は甚僅少なりしかど、彼は決して教授を否なまざりき。又多くを要求せざりき。されど才能を練し、徳行を修めんとすの熱望を抱かんことを尤も要求したりき。

紀元前五百二十八年、彼の日頃孝養をつくし奉れる慈母顔氏、はかなく此の世を去られしかば、彼の悲み云はん方なかりき。彼は二十年許以前に葬れる父の棺を掘り出し、母の棺と共に孔氏の魯に逃れ來りしとき、始めて住ひし地に葬り。其の墓を忘れざらんが爲めに、弟子に命じて其の上に塚を造りたりき。後暴風雨にて、此の塚崩壊せし由聞へしとき、彼は流涕して嘆きたりきと云ふ。喪終りてより十年の間尙魯に止まりて、古聖先王の遺教を探り、國家のこしかたをしらべ、又樂をも學なび、かたはら弟子を教へて以て日を送りぬ。

さてかくてある内、彼がうはさは日々國內に廣まりもき、西紀前五百十七年には、其の國の大夫妻孟釐子、其の子に遺言して彼か門に入らしめたり、此かる名家の子弟の入門せしことはいよ／＼孔子のはまれを高くし、且つ孔子の古典研究上よなき好機會を興へたり。孟氏の傳奏によりて、孔子は遂に魯君の補助をうけ、國都に行き、先王の遺教を探るを得ることなりぬ。此の時老子は周の守藏室の吏にして、先王の禮に詳しとの譽れ高かりければ、孔子は就て之に問ひたりきと云ふ。同年の冬孔子は再び魯に歸りて、弟子を教へつゝありしが、いよ／＼其の名高まりもきて、其の門に入らんとて四方より集ひ來れる青年は、實に幾千を以て數ふるに至れり。然るに彼等は一家に寓し、衣食を共にしつゝ、孔子より教授を受けたりしかと云ふに、決して然らざりしなり。今日の學校とは大に其の趣を異にせしが如し。最も孔子は後常に弟子の群集せる内に立ちて、之に教へしことを見ると雖ども、されど彼等の大數は各々自ら己が生業を營みつゝ、特に師の教を要する時にのみ其の前に至りて之を問ひ質したるが如し。

紀元前五百十六年魯に大亂起りて、昭公遂に國を去りて、齊に奔りければ、孔子も亦之に従ひ

て、共に齊に行きたり。齊の景公孔子に政を問ひしに、其の答心にかなひしかば、封するに尼谿の田を以てせんとせり。然るに其臣晏嬰可かざりければ、公も心惑ひて決する能はざりき。孔子遂に再び魯に歸りぬ。

此より後十四年の間、孔子は何の君にも仕へず。又其の國をも出でずして、勉學教授に日を送りぬ。此の間に昭公は齊に卒し、季氏強潜にして、其の臣陽虎亦亂を起し、政を専し、魯の國家日一日と亂れに亂れもきければ孔子は出でて、仕ふるを快とせず、退て詩書禮樂を修めたりき。或學者は子其の妻を去りしは、實に此の間なりきと云へれど、惟ふに彼等は禮記檀弓上第三の一句を誤解して此く臆測せるならん。

紀元前五百年、即ち千五十一才と云ふ年に、内亂やみてやや民心平温になりぬれば、子出でて仕へて中都の宰となりたり。治績いと著しく暫時の間に、中都の風俗頓に改まりければ一年にして、四方之に則れりと云ふ。國君定公之を見て、大に驚喜して謂へらく、今若し孔子の治道をひろめて、更に之を全國に施さば、國家の安全、堅固以て期すべしと。遂に孔子の官を進めて大司空となせり。之に於てか孔子先づ第一着に農事の改良を行ひけるに、物産大に増殖せり定公更に進めて大司寇となしければ、民に法を犯すものなく刑罰措て用ひざるに至れり。

此くて孔子は三年の間、此の要路にありたりしが、數々國家を潛亂するは季孟叔の三氏、各強固なる都城をかまへて、之によるが故なるを悟り、公室の威を強め、國家の安寧を維持せんには、先づ此の三都城をこぼちて、彼等の巢窟をよわめおくにしかずと考へ、遂に定公に勸めて此の大事をあげたり。

されど此等の成効は、永く孔子を悦ばしむる能はざりき。魯政の改革、治績の顯著なることいよく、諸外國に喧傳しければ、近隣の諸大侯に驚き、殊に齊侯の如きは餘程うるたへたりしと見へ。和を求め、好會を請ひ、つひて、魯の侵地をも戻しける。されど孔子の魯に居る以上は尙ほ心やすからず、何んとかして孔子を魯より追ひ出しくれんと、種々工夫を凝らしけるか、遂に黎祖が策を用ひて女樂を送り來れり。然るに季恒子愚にも之を受け收めければ、定公之れより心を祭政に致さず、日ごと、夜ごとに宴をはり、美人を舞はしめ、いと淫樂にふけるに至れり。孔子は之れに堪へやらで、遂に魯を去りたり。されど其の去るや、いと餘々たりしを見れば、尙ほ魯に心のこりのありしには非らざるか。定公若し召し返したらんには、或は再び返りて其の職をとりしやもはかられず。

さて聖人魯を去りしときは、齡既に五十六に達しけるが、此より十二年の間、諸國を遍歴して、舉げ用ゆる主君を求めしかど、一も得ず。されど其の舉はいよく高まり行きて、至る處厚遇されたり。余はここに詳しく此の間の經歷を述ぶる能はざるが、子の數々災難にかかりしは又此間なり。衛より陳に至らんとするときは、匡人の難にあひ、又宋に入りしときは桓魋の暴行を蒙り、殊に陣蔡の大夫等に圍まれしときは、七日進む能はざりしが爲め、糧絶へ又、弟子の内には疫病にかかるものもありきと云ふ。されど此等の大危難の場合にも、孔子は毅然として、毫も動かざりき。其は其の際の子の言に徴して明かなり。匡人の拘留する處となりしとき、弟子の内には大に恐れ、惑ひしものどもありしかど、子は獨り悠然として曰く、「文王既に没しけれども、文茲にわらずや天斯の文を喪さんどせば、後死のもの斯の文に與ることを得ざ

る可し。天斯文を喪さざるなり。匡人其れ余を如何にせん。又恒魘の暴を蒙りしときも、數多弟子の驚き恐れし中に、獨り孔子は悠然として、「天德予れに生せり。恒魘夫れ子を如何にせん」と云へりき。以て子の確信の程を察せらるゝなり。

葉公、子の弟子、子路に子の爲人を問ひしとき、子路之に答へざりしが、後孔子之を聞きて、子路に云へりし言は、大に孔子の爲人を見るに足れば、左に之を掲げん。

子曰く、子路何すれど、吾か人となりを云はざりし。其の人となりは、憤を發しては、食をも忘れ。樂んでは憂を忘れ。身の老ひ行くを知らず。」

さて孔子は四方を遍歴したる後、遂に紀前四百八十三年と云ふ年に、其の生れ故郷なる魯の國に歸り來れり。國君と宰相は禮を厚ふして、子を遇したれども、子は再び政界に入らんとはせず。ひとへに古典の研究に身を委ねたり。彼の春秋を作りたるは、實に此の時代なりけり。さて紀元前四百八十二年即ち魯に歸るの翌年には其のひとり子なる伯魚を失ひ又其の翌年には、最愛の弟子なる顔淵を失ひたり。伯魚を失ひし時の子の悲は如何なりけん。今は知るに由なけれど、顔淵の世を去りしときは、其悲み非常なりしと見へ、「ア、天我を喪せり。ア、天我を喪せり」と嘆せしよし論語に見ゆ。然るに同四百七十九年には、顔淵に次いでのみな弟子なる子路、亦あはれなる最後をどげけるが、子の悲痛如何ばかりなりけん。されど子自らの世を去る可き時も、はや真近に來りありしなり。同四百七十八年の春孔子終に逝きぬ。書に云ふ、一朝早く子は床を離れ手を負ひ杖を曳きて庭のあたりを逍遙しつゝありしが如何に感じげん、小聲に歌へる様、

泰山其頽乎、梁木其壞乎、喆人其萎乎。

子貢之を聞て曰く。

泰山其頽則吾將安仰、梁木其壞吾將杖。喆人其萎吾將安放。夫子殆將病也。」

此く云ひながらいそぎて内に入りけるに、孔子は戸に當りて坐し、物辭かに前夜の夢（但し子は此の夢は彼の死を豫告せりと考へしなり）を話し、はや死の近けるを告げ。さて云ひける様「明王不興、則天下其孰能宗余、余將死」とげに子の豫言の如く、子は後病むこと七日にして、終に逝きぬ。之れ支那大哲人末日の有様なり。

さて聖人いよく此の世を去り玉ひければ、數多の弟子たち四方より集り來りて、盛んなる送葬式をいとなみ、城北泗水にぞ葬りける。弟子たちは恰も己れが父母を失へるが如くになげき悲しみ、三年の喪に怠なかりき。誠實なる高弟子貢の如きは慕の傍に盧して、六年喪に服し以て崇敬愛慕の念をぞ表しけるとぞ。

以上孔子の經歷の一斑を述べつ。今少しく子の人となりを述べん。論語并に禮記の二書は、孔子の言行を記載すること甚だ多し。殊に論語卿黨篇の如きは、全篇悉く孔子日常の容色言動を記せり。彼の朝廷、宗廟、鄉黨、室内、寢所、及び車中に在る有様、可に適ふて多く食はざりしこと、酒は量なけれども亂に及ばざりしこと、蔬食菜羹と雖も必ず祭りしこと、迅雷風烈には必ず變せしこと、及び朋友死して歸する處なければ我に於て殯せよと云へりしこと等、實に夫子平日の一舉一動漏さず之を記せり。右論語に記する處によりて、よく子は如何なる人なりしかを窺ひ得る可し。余は敢て喋々せず。

或る學者は云ふ、孔子は先王の遺教を起し、古代の記録を保存すると同時に、又之を變更改削したりと。余は之に反して、決して然らずと云ふものなり。古典に於ける彼の勞力は通例、想像せらるゝほど廣大なるものにては非らざりき。彼れ自からは之を學び、又弟子をして之を學ばしめたり。されど之を變更することは決してなざりき。否な其現在に傳はれる形すら彼の整理類集をへたるものにはあらざるなり。

第五 孔子の教

支那道徳上に於ける、孔子最大の成績と云ふ可きは、古典に於ては未だ簡健なる語を以て表されおらざりし黄金律を彼は嚴然格言的に言表したる事なり論語中庸大學等の内には數々此を見る子貢嘗て一言にして以て身を終るまで之を行ふ可きもの有やを問へるとき、孔子答へて曰く「其恕乎。己所不欲、勿施於人。」後子貢「我れ人の我に加ふることを欲せざるを、吾も亦人に加ふることなかん」と云へるに答へて、彼は「賜や爾が及ぶ處にあらざるなり」と云へり。彼は此の格言をまもり之を實行することの決して容易ならざるを熟知したりき。實に或る處にては、彼自らも此の法則に反せしことあるを自白せり。彼は又此の格言を單に消極的に守りしのみならず、又積極的にも守りしものと見ゆ。此は中庸第十三章の言にて知らる。曰く「君子の道に四ツあり。丘未だ其の一をも能くせず。子に求むる處を以て、父に事ふると能はざるなり。臣に求むる處を以て、君に事ふる事能はざるなり……………」と。支那の註釋家は、此は只孔子の謙遜せる言に過ぎすと云へれど、余輩は然か思はざるなり。茲に孔子は其の真情を打開けて、吾人に告げたるなりと思ふ。されど余輩若ししか思はば、之れ孔子に對して無禮なるか。

否な、否な、孔子も亦人なり。人間普通の弱點を有せりと考ふればとて、何を無禮なるの理あらんや。

故に支那宗教の道徳に關する以上は、孔子は此の黄金的格言を以て、大に國民の道徳心を激勵したりと云ふ可し。而して若し、彼は人性の分析によりて、此の格言に達し、而して神明の裁定なしに、之を庶民に與へたりと云はるゝならば、余輩は孔子に於ては、湯王及び其の他の古聖に於ての如く、人性は天の賦與し玉へる物にして其の指示する處の道は即ち人間の義務に關する天の意志なりしことを忘る可からず。而して此の教は中庸第一章に於て、最もよく現はされたり。曰く、

天之命、之を性と云ふ。性に率ふ、之を道と云ふ。道を治むる、之を教と云ふ。

さて孔子の欠點の見出さるるは、道徳上にあらずして宗教上にあるなり。彼の常に上帝なる語をさけて、やや漠然たる天てふ語を用ひしが如きは、余輩の大に遺憾とする處なり。彼の語の今日に傳はれる内にて、古書より引用したるものを除けば、只一ヶ處より、上帝てふ人性的命稱を用ひたる處なし。(其の上帝てふ語を用ひたる唯一の場合と云ふは、即ち前章に引用せし郊社の禮の説明なり)彼かく常に上帝てふ語を避けたるは或は彼の宗教心の冷淡なるを表するが如くにも見ゆ。されど支那に於ては、上帝の國祭は只人民の代表者たる國王にのみ制限されしものなるを思へば彼或は之が爲めに成るべく上帝てふ語を用ひざる様、注意せしものならんとも云はれがたきにあらず。然れども余の見る處によれば、敢て右の如き想像をなすにも及ばざるなり。トトヒて天てふ語は其の字義、他人の用ゆる處にては然らざりしにもせよ、彼にありて

百十  
は確かに人性的實在物を表示せし語なるなり。此は數々引用せる彼の語によりても既に明かならんが殊に左の二語はよく之を示せり。

「罪を天に穢るれば祈る處なし」

「ア、我を知るもの一人もなし、されど天あり我を知る。」

又孔子が其の弟子樊遲に與へし知の定義、即ち「民の義を務め、鬼神を敬して之を遠く、知と謂ふ可し」(論語雍也第六)てふ語は、大に樊遲をして鬼神の存在を疑はしめしならん。よし然らずとも、彼が祭祀を尊ぶの念をして大に損せしめしならんとは、數々學者の口にする處なり。然れども余輩は此の語を讀て、「其の鬼にあらざして祭るは謫なり」と云ふ彼の誠言を想ひ起すなり。右の知の解の樊遲の上に如何なる感化を及ぼししやは、今確かに知る能はざれども、恐くは「其の鬼にあらざして」云々と云へる誠言と其の効果には大差なかりしならん。げに祖先及び大人の崇拜は疑はしき性質のものにして、且つ迷信に陥りやすきものなり。故に孔子は數々上載の如き語を出して以て人々をして其の迷信及其他之に伴へる弊害に陥らざらん様戒めたるものならん歟祭祀に關する彼の真正なる觀念は左の言にて明かなり。「祖先を祭ること先祖いまずが如く、神を祭ること神いまずが如し。吾祭に與からざる時は、祭らざるが如し(論語八脩第三) 故に右の非難は全く證據なきものとして放棄せざる可からず。孔子は又徒らに禮の形式に拘泥する儀式家にはあらざりき。彼の禮法儀式を重じたりし精神は左の語にて知る可し。

古は天子常に季冬を以て、來歲二月の朔を諸侯に頒ち、諸侯は之を受けて、之を祖廟にをさめ、月朔に特羊を以て廟に告し、請て而して之を行へり。然るに魯は文公の代より此の禮を行はざりしかど、有司は尙は羊のみを供へいけるが、子貢之を見て此くは、只羊のみを供するも、何の用なきことなり。宜しく之を去る可しとて。之を去らんと欲しけるに、子の曰く「賜よ爾其の羊を愛すれども、我は其の禮を愛す」と。蓋し孔子の意は、トヒ禮は既に廢せられたりと雖ども、餘羊の存する上は、尙は以て之を識るを得て復す可し。然るに今若し其の羊をも併せて、去らば此の禮遂に忘らるゝならんと云ふにあり。彼は枯木に花の咲くことあらんを望みたりしなり。されど右の言によりて以て、孔子の尙禮説は只徒に禮の形式のみに拘泥するにあらざるを知らる。孔子は又禱を賤めたりとの非難を受く。されど此の非難の基ける語は、未だ之を證するに十分ならざるのみならず、偶々以て孔子の祈りせしことを示すなり。其の語と云ふは論語述而第七章にあり。曰く「子病あり。子路祈らんと請ふ。子曰く有や。子路對へて、曰く之れ有り。誅に曰く爾を上下の神祇に祈ると。子曰く丘の祈ることや久し」と。余輩は此の語の眞意の如何なるやを知らずと雖ども、彼恐くは祈に關する或る迷信的觀念を、弟子の心中より、爰除せんと欲したりしならん。とにかく此の語よりして確かに言はるゝことは只彼の信心は明白ならざりきと云ふことのみ。今余は孔子の爲めに、種々の非難を排除したり。されど余も亦到底沈黙する能はざる二事有せり。夫れ余輩は已に彼の黄金律の組織をよみしたり。されど老子は更に彼れよりも、一步進みいたりき。曰く「怨に報ゆるに徳を以てせよ」と。而して或る人此の言を會得しかねて、之を孔子にただしたるに孔子も、亦如何に答へて可なるか少々惑ひたるが、此の語の意義を分析し

て心中一の推測式を作りつつ、之に對へて曰く「然らば徳に報ゆるには、何を以てするぞ。宜しく直を以て怨に報ひ、徳を以て徳に報ゆべし」(論語憲問第十四)然り、直は善徳なり。余は此の時孔子の心中に毫も復讐の觀念ありきと考へず。されど余輩若し徳を以て、徳に報ずるのみならば、之れ當前の事なり。何ぞ別に徳とするに足らん。余は更に聖人一步進んで或る人の質せし語の如き高尚なる理想に達せざりしを憾む。他の一事は春秋に關す。春秋は孔子の作なり。孟子之を評して孔子の最大業績なりと云ひ。又亂臣賊子は之れによりて恐れ慄かんと云ひ。著者ミツカ自も亦之れに均しき意見を有せり。彼れ曰ふ「我を知るものは、其唯春秋乎。我を罪するものは其唯春秋乎」と。蓋し彼自ら我を罪するものは云々と云へる時、既に彼の心中、一點の安からざりしもありしにあらざるか。此の書は實に缺然たり。否な意のままに事實を取捨し、且つ偽る處あり。公羊傳に云ふ(譯者云ふ原文には King King とあれば、公羊の事ならんと思ふ。されど公羊傳は今手下になきを以て、茲に引用せる語は果して公羊傳の語なるや否なや確かに云ふ能はず)「春秋は高貴同族及有徳を尊ぶのあまり事の眞を失ふ」。然るにドーグラス氏は曰ふ、「孔子は眞實を欠けりとの非難を受く。されど余輩は其等の非難を精査するときは、其等は只眞とは何ぞや、と云ふ問題中に消失するなり。」(孔教及び道教百四十)氏の言は以て孔子の經歷中たまたま起れる不要なる事柄を口實として子は眞實を欠けりとか誠實ならずとか、猥にわやく非難するものをして口をつぐましむるに足る。されど春秋の書体より起れる非難は未だ排除するに足らざるなり。己れ叙する處の事實を或は故意に取捨し、或は或るものを陰蔽して載せざるか如き罪を犯したる歴史家に於ては、「眞とは何ぞや」の問題の解せられ

ざるに託して、彼の歴史上の眞實を欠けるを辨護する能はざるなり。余はしばし此書も今傳はれるが如き書体にてあらざりしを辨じて、以て孔子の爲めに之か非難を除かんと企てしかば、されど反對なる證據の十分なるからに、如何んともする能はで遂に止みたりき。孔子に關する事柄の中にて最も著大なるは彼が其の弟子等の上に及ぼしし感化力の大きなことなり。彼等の腦裡に印象せし感覺の強大なることなり。彼等は皆な當代の君子なりき。支那歴史中の偉人なりき。而かも彼等は常に云ふ、孔子は人間中の最大なるものなり。堯舜にこれること遙かなりと。或は獸中の麒麟に比し、或は鳥中の鳳凰にならぶ。又大山の丘壑に於けるか如く、河海の溝澗に對するか如しと讚せり。孔子は實に彼等の全心を得たり。彼等の讚嘆を吸収せり。爾來幾千年間の歴史を貫通して、此の讚嘆の聲は常に國民の心底に響けり。それ孔子の將に世を去らんとするや、慨嘆して曰く「明王不興則天下其孰能宗我」と。然り彼の生時は未だ彼の徳彼の價値を知らざりしなり。されど彼の靈魂、天に達するや達せざるやに、王侯貴人は忽ちに彼の徳を認め而して廟を起し祭を設け始めたり。西紀前二百二十一年秦の始皇帝六國を併呑して、封建制度を一掃し、以て一箇のわたらしき帝國を建設せんとするに當て、至大の困難を與へしものは實に孔子の名、孔子の崇拜者なりけり。始皇は兵力を弄して儒を坑にし、書をやけり。然れども既に國民の心裡に深く根抵せる孔教的信仰は、決して坑にする能はざりけり、焚きつくす能はざりけり。彼若しローマのツェリアン帝なりしならんには、死の床に横はりながら、天をあはぎて一天嘆聲を發し、「ア、孔夫子よ、汝は世に勝てり」と叫びしならん。



さて王家より始めて孔子に尊號を送りしは紀元後第一年なりしが僅かに五十七年をへて、更に一敎令の下るありて、毎年官立の學館に於ては、孔子を祭ることとなりたり現今は毎年二回、春秋各月中月に祭ることとなり。而して此の祭日には國王自から北京の王立大學校に幸して、祭儀を行ひ、孔子及四大弟子の神位に饗す。左に掲ぐるは即ち其の祭の祝文なり。

康熙某年、歲次某甲子春某月朔越、某日某甲子主祭官某率某各官某等、敢照告二於

至聖先師孔子。惟

師德配二

天地。道冠古今。刪述六經。垂憲萬世。維茲仲春謹以牲配黍盛庶品。式陳明薦以二

復聖顏子

宗聖曾子

述聖子思

亞聖孟子一配尙饗一。譯者云右之祝文は東京圖書館所藏の寫本文刷祭

右の祝文は余の孔教の名の下に支那古代之宗教を講じたることの敢て不常ならざるを證して餘あり。孔子は實に大人なり。實に偉人なり。されど彼の祖述憲章して以て萬世に傳へたる宗教は更に大なり。更に偉なりと云ふ可し。

### 第七章 希臘之宗教

#### 第一 總論

吾人第十九世紀の文明を組織する諸元素、其出に源を尋ねれば一として希臘に非ざるはなし。希臘は二千有餘年のむかしに、吾人の今日試みつゝ、むる處のものを完成したりけり。彼が文學は千古の模範を吾人に與へき。哲學を學ばんか先づ彼に行かざる可らず。科學を學ばんか又彼に問はざるを得ず。近世科學の眞の祖なるアリストートルは實に彼の生みたる珍子にぞありける。彼は又詩女神たるうるはしきひすめをも有しき。ソフオクルス、エイスキラス、ユリピデス等の三詩仙が萬代の規範たる脚本を作せしは、實にセキスピアーが萬心を發現する前幾百年の頃にてありけり。ダンテが神劇、ミルトンが失樂園を詠せし前、彼には既にホーマーの「イリアッド」を歌ふありき。あゝ希臘哉希臘哉。タトヒ吾人は第十九世紀今日の文明を以て二千年前の汝に向ふも、吾人は一點の誇る可きものなきを悲む。

然り然らば、かゝる古今未曾有の國民の宗教的觀念を精究せんには、先づ博く彼か風俗、習慣、否な歴史全体に涉りて研究を施さざる可らず。然れども此は余輩の本書に於て企て得べき限にわらず。

さて前述せるが如く、吾人今日の文明は希臘古代の文明に負ふ處ありと云はば、さらば吾人の有する高尚純潔なる宗教的觀念に於ても、亦然らんと推論する人なきにも限らず。されど此の點に付ては吾人は毫も彼に負ふ處なしと云ふは、あまり過言ならんが、實に僅少なりと云ふは

決して過言にはあらずるべし。つらく、況き世界に多なる諸宗教の歴史を精窮熟察するに、確かに一事の明かに現はるゝを見る。何ぞや「神聖なる天啓の祐助をからざる宗教にひとして自國家的宗教の範圍を超出したるものなし」と云ふ事是れなり。彼等を一々比較對照するに左の言を發せざるを得ず。もはく「宗教上に於ては、總ての國民は殆んど同一の地平線上に立てり」と。實に希臘人や、羅馬人の如き形而上的哲學的觀念に富豊なる國民が、蠢愚野蠻の種族間に於てすら、稀れに見る處の陋劣なる習慣にかたく束縛されて、之を脱する能はざりしは、吾人の大に怪む處なり。されど事は先づ精究したる後にあらざれば、何たる判然をも下す可からず。然らざれば常に不公平なる結論をまぬかれざる可し。故に余輩は先づ此れより希臘人古代の宗教的觀念并に其の神傳の梗概を描寫せんとするなり。「概するに希臘の宗教は自然の崇拜として正しく叙記さるゝを得神祇の多數は物質界の事物、又は抽象的總念の下に包括されたる事物の種に對應す」とは蓋し監督サールツォール氏の言にして、今日の批評家の概ね異存なく承認する處のものなり。明美秀麗にして無限の變化を現顯する風光の中に住まひ、身邊を圍繞する萬象にて深く感奮せらるる快恬多情の希臘人は、其の耳目に接觸する事々物々の中に偉大壯麗なる勢力の潜在するを感識したりき。豊富肥滿なる沃土、赫灼たる紅輪、激波息むなき碧海、怒號乾を旋し坤を轉する颶風、彼等の接する處一として異靈怪力の發現と見へざるはなかりき。即ち彼等は字内には玄靈の存するありとの觀念を以て深く印象せられぬ。然れども彼等は、印度にある彼等の兄弟の如くに、事物其物をとりて直に之を神とすることはなかりき。よし彼等も亦然かなしきとするも、此は極上古の事にてありけらし。吾人の歴史的に知り得る

限りにては、彼等は日月河海風雨等の現象其の物を直に崇拜するにはあらで、先づ彼等の微妙なる想像力を以て此等の物象に人性を附與し、而して後崇拜したりき。彼等の日々目に、耳に、接觸する事々物々の中に、彼等は生命、意志、意匠を稟有する幽冥なる鬼神の玄力を認めぬ。彼等の眼には宇宙は此かる隱微なる靈物にて充滿せりと見へにき。或は大地の上に、或は大空の中に、或は海洋の底に、或は日光の照らさざる大地の下、暗黒溟其の冥土の境に。グロート氏は云へり「此等の群神には種々の部類及び權力と性徳の優劣、更に年齢、男女、住處、父子、夫婦の別、同情及び反情の性僻等ありき。彼等は又特殊なる一種の政治的社會を組織し、而して其社會には神祕政治、位階、任職の配分、權力を得んとする争鬪、度々の革命、オリムプス神嶺上に於ける公會及び數多の宴會等ありき。實にオリムプス大神は只擬人間的或は超人間的人物の中の最も卓越せるものに過ぎざりけり。此等の擬人間的或は超人間的人物とは鬼魅魍魎英魂山祇水神市府村落之守護神及び妖力を藏せる不死の馬牛犬、惡相奇休の怪物、怨靈祖神等なり。此く奉信の神祇の多數なることと、其活潑なる人性を備ふる事とは即ち希臘古代の宗教第一の特色にして又自から真先に觀察者の注意をひく處のもの也。吾人は何處の宗教に求むるも、此く多數の神祇を見出す能はず。嘗に外界の萬象が鏡に映する物像の如く、靈界に反照するのみならず人生の各方面及各事情、心意の各能力及身體の各性質も亦概ね人性を附與せられ、而して神となるを得たりき。即ち睡眠、死亡、老年、苦痛、体力、心力、争鬪、勝利、戰爭、謀殺、饑餓、夢幻、記憶、忘失、背法、法律、豫想、回想、悲痛、嘲弄、報酬、無思慮、詐譎、智惠、愛着、美德等も亦或は男神或は女神として、神傳の中に其地位を有せりき。更に又上載の自然界の諸部分と區

別して、自然界の諸事實、即ち混沌、晝夜、時、時間、曉、暗、電、雷、反響、虹等も、ゾニスやアポロの如く、人性を有するものとせられたりき。

希臘宗教の第二特色は、神祇の中に整然たる階級及び權力の優劣あること是れなり。彼等は明かに五つの階級に分れたり。第一はオリュプスの群神、十二柱あり其内六柱は男神六柱は女神、されど相互に配偶をなすにはあらず。其名はゾニス、ポサイドン、アポロ、アレス、ヘフェスタス、ハーメス、ヘラ、アゼチ、アルテミス、アフロダイテ、ヘスチア、デメター。次は多數の男神女神相集まりて一階級をなす。其名はハデス、ダオニサス、クロナス、ウラナス、ヒペロン、ヘリオス、チリウス、ポルチユース、ヨールス、レト、ダイオチ、パーセフォチ、ヘカテ、セレチ、ゼミス、ハーモニア、ゼクレイセス、ゼフェエーツ、ゼプリーズ、ゼアイライ、タイユ、ゼ、オシアニツ、ゼ、チライツ、ゼニンフス、ゼナイアツ等。第三階級は大神に奉待する群神なり、ゾヨブの使者アイリス。 ゾヨブ神の戯技官ヘーベ。 スフェスタスの僕クレイトス及びピア。 ヨールスの侍従ポリアス及びノルタル。 アフロダイトの侍女、ゼ、アウリス等なり。

第四は人性の明着ならざる諸神なり夜、晝、エーテル、曉、暗、死、眠、争闘、記憶、名譽、報酬、粗齒等なり此等の神は詩に於ての外は神として表されたること稀なり。恐くは眞實々在の神と信せられたるにはあらずる可し。第五階級は陰陽兩神の交合より所生怪神なり天と地の子なるサイクロプス、及びセンチマニ。 ソーマス、ドエレシトラの娘なるゼ、ハーピイス。 フォルサ、イスドセトの兒等なるゼ、ゴルゴンス及びグレア。 メツサがハーシユニスによりて殺されたるとき其の死より所成クリサオル。 タイファオン及びエナドナ、より産れたるゲリオンの二頭犬なる

るオースロス。五十の頭あるハデスの犬なるセルベラス。 サイルラ、及びチヤリプチス、ゼ、ラレニアン。 ハイドラ。 セーベスのスインクス。 チミアンの獅子。 ヘスフェリダスの龍、セントリル、ス、チミートラ等なり。

本書に於ては、右諸部の群神に付て一々叙述すること能はざれば、其の中の最も要重なるもの、即ちオリュプス神嶺の大神のみに止めん。

(一) 崇拜の目的物

ゾニス神

八百萬の群神の上に立して、御感徳奇靈しき大神の名はゾニス、此の神ハ太古の世には希臘人のまことの神にておはしけらし後の世にありては、群神の天つ祖、神中の大神とぞとなへまつられける。いにし世の歌人うたいけらく

ゾニスの神は 天や地

世にあるもの、 そか元始。

ゾニスの神は 天や地、 其か御中。

世にあるものは すべてみな、

ゾニスの神より 所生にける。

ゾニスの神は天つ國をしるしめす主にして、いや高き神嶺の頂に住はせ、そかみめぐりに雲霧をつはせ、雷もて大空を鳴動させ、神怒に怒らすときはいなづまをひらめかざる。此く此の

神に就て諸人の抱けりし此等の想像を素として、世々の詩人は此の神の性を組み立てたと見ゆ。而して其神性と云ふは強弱善惡の奇妙なる混淆なり。哲學者がさまざまに彼等詩人を非難せしむるは、もとより理なきにあらぬども、されば彼等はさかしらに已がし、此等の性を作り出たし、ものとは見へざるなり。これは免れ角も詩人等が、此の神を以て最勝無上の神となし、神界の主權を握らしめし事は、希臘多神教の中に統一の主義を注入し、恐くは彼等を非難せる哲學者其者の上に少なからぬ影響を及ぼししと思はる。(たとひ普通の人民の迷信上にはさしたる影響なかりきとするも)。オリンピアの群神はジュヌス神を家長として、一の家族をつくり、彼の周圍に簇集せり。此の神は群神に各々所知す境を與へ、己れ其の上に立たして、之を統べおさめたり。其威徳廣大にして、其訓令には如何なる神とても脊く能はざりき。其の訓令を確定し玉ふとまじくになし玉ふらん恐ろしき首肯は如何なる神とても之を變ずること能はざりき。さて此く其の御力の廣大無双なるにかなひて、其の智慧も亦廣大不可測なりけり。國民及び箇人の運命をはかる黄金造りの天秤を有し、有情の衆生を幸し、又災する善靈惡靈を藏する二ヶの大瓶を、其の神庭にすへ玉ひき。自然の運行に一定不變の秩序あるは、此の神の定め玉ふ處なり。人間界の律法は其裁定を此の神に仰ぎ、地上の帝王は其の笏を此の神より受けたりき。此の神は社會權利の守護者にして、人と人又人と神との間になれる契約の履行を司り、謀反、傲慢、及び暴逆を嚴罰し玉ひき。頼るべなき旅客、及び迫害に遭ひたる不幸の人には殊に惠をたれて守護し、住家をめぐらす牆壁は厚く守護し玉ひき。又來客を遇するに冷淡なるか、若くは之を否むものには其の罰として災を下し玉ひき。さてジュヌスの大神は此く無上最勝の神に在しませども、

他の八百諸神の如く情欲にくらまされ、數々神ならぬ處行をなし玉ひへりき。概ね諸神は其の身体不死不滅にして、最にうるはしく、又人間より更に純粹なる血にて温められませども、苦樂の感には超然たる能はざりき。禮拜者よりは新鮮なる神食を求め玉ひき。又其の他の情欲も人間のとほ異ならず。愛慕、憎惡、憤怒、猜忌、等の欲念は屢々神達をして愼患の災をもやさしめ、黨徒をくみ反逆を謀らしめ、以てオリンピア神嶺の平和を破らしめたりき。而してジュヌスの大神、自らも超然として諸神の争鬪を下に見る能はずして、屢々之にあづかり玉へりき。又屢々其の計畫を誤り他の神の奸策にかゝり、欲に眩され、憤怒度を過ごし玉ふとありき。さて此の神の運命に對する關係は前に一言したれども、此はホーマーの詩に於ては一樣にしるされず。恐くはホーマー此點に付て未一定の觀想なかりしならん。前にも言へる如く、通例運命は此の神の意志より出づると記さるれども、されば此神も亦己が運命に逆ふ能はずして大に苦ますこと數々見ゆ。さてジュヌス神の人間に對する關係は父子の關係なり。此の神に祈願する人々は皆な彼を「神父」とよべりき。八百萬の群神及び青人草の祖」とは蓋し此の神の稱號なりけり。聖徒ポロは希臘の詩人アラタスの句を引て「我等は彼の裔なり」(使徒行傳十、七章二十八)と云へりき。

## ボサイドン神

ボサイドン神はオリンピア群神中第二位に立たせ玉ふ。之れ他の諸神より勝れたる處あるが爲めならず、寧ろジュヌス大神の兄弟にてをはずと想像せらるゝか爲めなる可し。此の神は特に海洋を守護し玉ふ神として、主として海邊の諸國、諸府の人民に祭られたりき。されば陸地上に於ても大なる力を保たせ玉へる事は、其の讚頌の序辭に「大地を震はす」「大地をしるしめ

す」などの語あるにてもしらる。此の神の祭祀は甚だ古く、粗野暴戾の痕を存じ且つ希臘宗教の奇怪野蠻なる方面と結着せり。人身御供を奠げたるは此の神なり。或る學者は此の神の祭祀は希臘固有のものならずして、外國輸入のものなりと云へり。されど他のオリンピア諸大神より離して、獨り此の神をのみ、外國輸入の神なりと論ふ可き、根據なし。其の性行の他神より粗暴、嚴刻、野蠻なるは、其の表はす元素、即ち其の守護する境の「大わだづみ」なりと云ふと、其の主なる崇拜者の喧騒なる海人なりと云ふにて解せらる可し。更に希臘の諸神中には稀れなる毅然として容易に動かされ難き意志を備へしことも、亦其の性行の苛刻なるを解するは一の光を與ふるならん。さて此の神は今云ふか如く確固たる意志を備へ、且つ其の力の強大なるからに、其の企圖したまふことども大抵(非ユス)は成効し玉へりされど之をユスの大神に比するに其の劣れること幾段なり。更に徳行、智慧等に至りては該大神に比す可くもあらず。

## アポロ神

アポロ神を日の神と観るは、希臘後世の觀念なれば、彼等太古の信仰を叙記するときには、全く此の觀念を放棄せざる可からず。さて此の神はもとユス神の如く唯一大神の一相を表はせしものにてユス神の未だ知られざる地方に始めて現はれ後ホーマーの時代に至りて當時流行せる神傳の中に入れられ、而してユス神の珍子及び其の託宣を人間に通ずるものとして祭らるゝに至れるらし。されどユス神よりは純粹なる精神的觀念を表はせり希臘古代の歴史に通ずるもの、眼には、此の神は殆んど純粹なる觀想を表はし、又殆んど天使的の神性を備へおると見ゆ可し。快活雄麗なるが上に、凜たる威風を具へたる理想的美容、之れに加ふるに智慧廣大

にして未然を洞察するの靈識を藏し詩歌管絃の魔力をたくはへ又窮客を救助し病客を療治するの大慈悲心を保ち更に心のままに死と衰滅を國民の上に降すの大權能を具へ玉へり。故なくして怒ますことなく、欲の爲に心を動かされ玉ふことなく、ユスののり玉ふまゝに行ひ玉ひ、善惡應報の大道を破り玉ふことなし。神祖(カト)の總ての神議(カト)にあづかり玉ひ、思ひましますがまゝ之を地の上の萬民につたへ玉ふことを許させられて、萬民の尋ぬるかまゝに、其の命を宣り玉ふ。其の宣言は國家歴史の大勢を左右せり。戦争なり、講和なり、條約なり、總て此の神のインスピレーションを蒙りたる巫税の云ふかまゝに行はれたり。實に希臘人の上に及ぼせる此の神の感化は大なりけり。基督教の三位一体の第二位を以て此神に比較したる學者ありし程なり。此の比較のなまさかしき想像にして信じ難きは云ふまでもなきことながら、兎に角く此かる比較する人すらあるを見ても、此の神の純潔高尚にして、御威徳のあやにかしきことを知らるゝなり。余輩は之を天啓の祐助なき純粹の人智が、嘗て臻達したりし神の觀念の最も高尚なるものなりと云ふに吝ならざるなり。

## アレス神

アレス神は「情欲の化身」なり。希臘人は、人間が他の動物と共有する此の争闘的情操を以て、常に神聖なる一物となせしのみならず、其の化身を第一階級の諸神の中に列せしむる程高尚なる神聖物となしたりけり。此の情は神人通有にして、天界の争闘も、人間界の争闘も皆此の情に由因すと觀じたりき。此神は天界の王たるユス神及び女王たるヘラ神の珍子とせられたりしかど、其のオリンピア群神の内に占むる位置は下等なりき。此の神は丈高くうはしく且つ

活潑なるいどめでたき姿にて表はされたり。されど其性行は粗暴殺伐無道なるものなりき。其の崇拜はホマーを去る遠からざる以前に、スレシアより輸入されたりと考へらる。されど此の神の観想、甚だ粗野にして、文雅なる人民の同情を惹くに適切ならざりしものから、其の祭祀は廣く行はれざりき。

## ヘフェスタス神

ヘフェスタス神は火の神、特に煉金、及び冶金の神なり。レムノスリスに住ひて、常にシユエス神の電光を鑄、又諸神の武器を作れり。此の神の名作の内にて殊に有名なるはオリムプス神嶺の自動三脚器及び赤銅作りの下女なり此の神に付て特に注意すべきは其の身體の不具なること即ち趁跛なること之れなり。之れ希臘人の趣味の通視に反せり。彼等は總て不整を惡みて、均整調和を愛し、諸神の身體は概ね完全に表せり。故に此の變則的の神を説明せん爲めに、諸學者或は此の神を以てイザプトより輸入されたりと云ひ、或はアヒシニアより渡來せりと云ふ。然れども他のオリンピア諸神と對照するに、特に此の神をのみ外國輸入のものなりとなすの證據を見出す能はず。余は之を左の如く解するなり。全体希臘人の思想感情は多角的なり。彼等は調和を愛すれども、徒に單調的なるを好まず。時に波瀾を要せり。且つ又彼等は滑稽に付て鋭敏なる感覺を有せり。さるが故に彼等は壯麗嚴肅なるオリンピア神界中に一波瀾を起し、又其の嗜好たる滑稽を弄せんか爲めにヘフェスタスを設けるなりと蓋しヘフェスタスのオリンピア神朝に於けるは、宛も中世紀の諸王の殿上に於ける滑稽家の如し。廣大なる神朝に整列する嚴肅なる諸神をして數々大笑解頤せしめ、以て其の勞を慰さむるは實に此神の任職なりけらし希臘に背く處なきなり。

臘人が此の神を設けたる精神の茲にありしは、此の神がアフロダイテ女神と感懃を通ずるてふ物語によりて更に明らけし。但しアフロダイテ女神は美及び戀の女神なり。最も美はしき女神なり。然るに今此の衆美女神中の逸物が、不具なる、趁跛なる無骨漢、鍛冶屋神と感懃を通せりと云ふ。諸神人敢て哄笑せざるを得んや。

惟ふに近世の道徳家にありては、かかる不具なる、滑稽的なる神を設くるの不聖の業なるをかこたんが、されど此は人間の優性と共に劣性をも總て神界中に反映せしめたる希臘の宗教の通性に背く處なきなり。

## ハーメス神

ハーメス神は商業の化身なり。夫より富及び殖産の神、發明力の神、欺騙及び竊盜の神として、祭られたり。彼はオリムプス神嶺の事務家なり。故に常に使節として用ひられたり。此神は又甚だ工藝に熱心にして、且つ發明力に富みたり。始に七絃琴を作り、後又「パンヌ、パイア」を作り。遂に一般に智慧學問の神としても祭らるゝに至りき。商業の神たる此の神が又竊盜の神として崇拜されたりと云ふ事は商賣上の掛引は殆んど商業其のものだけ古きものにして、或人の云ふが如き「善き古代」も亦全く無邪氣の時代にはあらざりしことを示す。又此の神がオリムプス大神の中に列せられたるにて、希臘人の道徳の標準の低かりしを知らる。されどアゼンヌ人か特に此の神を崇尊せしは、主として彼等が大に商業を重せしによるなり。之より以下はアゼテ、アテミス、アフロダイテ、ヘチア、及びデメターの六大女神に付て叙述すべし。

ギリシアの宗教の最大要素たる神人同形主義は、男性の神と共に女性の神をも亦オリンピア群神の中に設くるに至りき。此くて數多の女神は想像せられ、女子も亦最高の天界に其代表者を有することゝなれり。さてヘラはもと「エラ」即ち地なりしならんが、此の地でふ觀念は早くも其の影跡を失ひヘラ女神は全く大地の産生力を表せる東洋の地女神とは異なるものとなれり。此の女神太古にはジュヌス神の妻神、天界の女王、オリンピア朝の女王なりき。其の権力は全くジュヌス神の反影なり即ちジュヌス神の特權は總て之を利用せり。此神は又母性の化身なるからに、婦女の出産を守護せり。此の神は女神の頭に立てども、其の性情は女性の摸範たるに適せず。其の位置は高けれども、女性の缺點を數多有せり。種々うるはしき性情を有すれども、婦徳の最大元素たる柔和、温厚、親切、忍堪、沈靜、少言等の徳を缺けり。實に驕慢暴戾なる女王にして、懇切なる、美はしき婦女にはあらざりき。實に希臘の神傳は數多不完全、不健全なる部分を有するが女性の摸範としてヘラ女神を萬神の頭におけるほど不完全不健全なるはなし

アセチ女神

若し夫れヘラ女神は余輩が文雅なる希臘古代の宗教の最上の女神に於て表はされたらんと豫望せし秀麗なる女徳を備へざるも、アセチ女神は確かに之を備へたり。此女神は毫も缺點なき性行を有したり。もとことさらに神智を化現せしものと見ゆ。而して上古の世より智識、戰爭、政略、工業の女神として尊崇されたりき。或學者は云へり此神は女性の同情を缺けりと。之れ此女神は溫柔の質少なく、全く纖弱ならず、且つ女性の性質とは見へぬ多くの性質を有せりと

の義に解せば眞實なり。されど此の女神は埃及のチニス女神の如く、武夫政治家の賢明なる指命者たると共に又善良なる家妻の女神なりけり。其の住はせらるゝ空氣の寒冷靜寂且透明なるからにヤタラニ纖弱なる女性的同情は現する能はざりしかど純潔、健全、知慧の三質を高度に具足し玉へりしものから其の希臘男女の上に及ぼしし影響は決して少々ならざりき。ギリシャの青年は心裡に嚴然たる本眞の良心の命令を以て、彼等を眞善に導き榮譽及び義務の道に勇進せしむるアセチ神の聲なりと感識したりき。此の神が、特にアセンス及びアチッカに於て尊崇拜せられしことは、希臘の宗教的系統上愈々此の神をして緊要なるものとならしめたり。蓋し希臘人の至善心并に最寛性の上に格別高尚純潔なる影響を及ぼしたればなり。

アルテミス女神

アルテミス女神は全く影神なり。其の性能は兄アポロ神の弱き反影に外ならず。獵を司ると云ふ外には、此の女神の特殊なる性として指示すべきものあるなし。其の月の神なりと云はるゝはアポロ神の日の神なりと云はるゝが如く、後世に發達したる思想なり。

アフロダイテ女神

アフロダイテ女神ハアポロ神に對比する、否な或る意味に於ては彼の性行を補へる女神なりアセチ女神は人性の高尚、純潔、剛毅なる總ての部分を化現する如く、此の神は女性の温和、纖弱なる總ての部分を化現せり。美及び愛の女神として甚だうるはしく表はさるれども、其の美と云ふも、愛と云ふも、均しく物質的感覺的のものにして高尚なる心靈的のものにはあらず。惟ふに此の女神はもとアシアの或地方より轉借せられたる神ならん。されど吾人の知り得る限

りにては、其の容貌品性等の、全くギリシア風の女神なるを見れば、よしアシアより轉借されたりとするも、此は極く上古の事にてありけらし。さて其の性行の一斑を摘示せば、今云ふが如く容姿艶麗なりしが、其の道徳性に至ては大に欠くる處多く、弱者に對しては壓制に、強者に對しては卑怯に且つ我欲にして術策に巧なり。其の高尙なる道義性を欠乏するだけ、動物的情欲に富めり。さればそのギリシア國民の上に及ぼせる影響は、甚だ有害なりしならんと思はるれども、實際に至つてはさまで大ならざりき。何んぞなればギリシア人は其の容姿の艶麗なるをば甚だ愛慕したりしと雖ども、又常に此の女神を卑しめ擯斥したればなり。而して其の擯斥するの度は大に愛慕するの度に越へたり。されど、とにかくかかる女神を設けて、高等なる神の中に列せしむる以上は、彼等が道義心は纖弱なりきと云はざるを得ず。奸惡無道なる人は其の所業を辨する爲めに、大に此の神に託したりしならん。

ヘスチア女神

ヘスチア女神はアルテミス神よりも甚しき影神なり。火の女神なりとも云はるれどされども主として竈及び家庭の神聖なる質を化現せる神なり。其の人格は未だ十分に發達せざりきと雖ども大に神聖純潔てふ二ヶの美質を備へ以てギリシア人の家族的生活をして清淨ならしめたりしが如し。此の女神は一生不犯を契ひてアゼチ及びアルテミスの二神と共に希臘人に向て人生の高尙なる一方面たる一生不犯的純潔は至善至粹の女性が徒に熱望する妄想にあらずして熱心に力を盡せば實際にも躋達せらるゝものなることを示せり。

デメター女神

デメター女神、即ち「地母」<sup>ガイア</sup>としてふ觀念は東洋國民有通の觀念なれどもされど希臘人は敢て彼等より之を轉借したるに非らずやはり希臘固有のものなり。人類を載せ、且つ之に衣食を供給する大地は、親切なる惠深き母、保母、養育者なりと觀せられたり。此くて大地は一の女神とせられ、而して萬民の尊崇を受くるに至れり。然るにギリシアにありては、土地は腴沃なりと雖ども、大に播種耕作に努力を要せしを以て、此の神は又農業と親密なる干係を有するに至れり。然り而して農は天下の大本、民の頼て以て平和安穩にして整然秩序ある生活を保ち得る所以なるを以て、此の神は更に又セスモフオロス神てふ名を以て、文明及び律法の創設者として崇拜せられたりき。オリンパス群神外の神にして、最も主要なるものをガイオニサス、レトパーセフオチ及びハデス等なりとす。

ガイオニサス神

ガイオニサス神は酩酊の神なりき。アフロダイト神の肉情を化現せる神なるが如く、此の神は酩酊を化現せる神なり。創めて葡萄樹を造り、始めて葡萄樹を希臘に輸入したりとの意味ならん。之か培養法を教へ且つ其の菓實の酒性を含むことを發見したる神なりと傳へられる。ゆへに此の神の祭禮には、男女相集りて大宴を張り暴飲亂舞彈絃擊鼓以て前後を忘るゝに至らざれば、此の神に對して不敬なりと考へたりき。されば此の祭禮の人民の上に及ぼし、影響の如何なりしやは想像するに難からず。されど其の祭日の少なかりしはせめてもの幸なり。又其の儀式は何處にても同じからざりき。アゼンスにありては女子は此祭にたづさはることなく、又男子は酒宴を設けず、互に辨論を闘はして、以て樂とせりと云ふ。とにかくガイオニサス神は



ギリシアの諸神中アフロダイテ神に次て氣にくわぬ神なり。

百三十

#### レト女神

レト女神、又の名レトナ女神と云ふは、ダイオニサスに反し、國民の精神上に純潔高尚なる影響を及ぼしし神なり。ペラ女神の前にユヌス神の妻たりき。母の愛、妻の貞潔の摸範なり。されど此の女神には、別に此れとて取り出で、云ふべき職務なきを見れば、其のオリンピア諸大神中に列せらるる所以は解し難し。恐くは理想的な女性として見るが正しからん。

#### パーセフオン女神

パーセフオン女神は冥土の女王なりき。甚だ純潔貞節なる神として表はさる。されど其の治らしめす境の一向希臘人の注意せぬ下界冥土にてありしかば、宗教上緊要なる地位を占めたりき。

#### ハデス神

ハデス神は冥土をしるしめす王なりき。甚だ高き地位を占め、或はユヌス神の弟神として、或は其の同輩として表はされたりきされど其の治しめす境の影くらき冥界にてあるものから、其身自らも影の如き神にて、劃然たる人格を備ふることなく、隨ふて國民も此の神のためにとて、別段祭壇を設くることもなかりき。

さて以上列擧せる諸神の外前節の神名帳にも掲げたる如く、神祇の數甚だ多けれど、今一々之を叙説するも冗雜なれば、茲に筆を擱き、此より祭祀の性質、及び其の祭祀がギリシアの國民上に及ぼしし實際の勢力を畧説す可し。

#### 第二 崇拜の性質

概言せば、希臘人の崇拜はたのしげなる輕快なるものなりと云ふ可し。其全体より云へば希臘人は罪惡に就ては深痛なる感覺を有せず、鬼神に就ては尊崇の念高からず、又苟も罪を犯さざる以上は毫も鬼神を恐れず、否な却て常に多くの惠物を要求せり。彼は祈禱し、具饌せり。されど贖罪の爲めにも、神怒を和らぐる爲めにも非ず、恩惠を乞ひ受けんが爲めなりき。彼は疾病危難の際には神に禱願し、而して其の疾病より復し危難より免れたる時には決して其禱願を實行するを忘れ又は怠ることなかりき。其の住家は祠を以て充ち、彼は常に其の祠に供獻して守護神の恩寵を乞へりき。プラトーは自から云へり。彼は朝夕祈禱を怠らず、又定時の食は必ず祈禱か讚美歌を以て終りたりと。されど彼果して眞率誠實の念を以て然かせしか、恐くは只習慣上よりせしまでの事ならん。

實際上に於ては、希臘人の宗教的崇拜は主として祭祀に參することにて成れり。其の祭祀にはギリシア國民全体の共に相集まりて行ふものと、各家族及び各州各市各講社に特殊なるものと別ありき。希臘國民全体の行ふ所の大祭典には四種ありて、其の一或は二は毎年廻り來れりオリンピア及びデルヒにて行はる、大祭テメア及びコリンス地峽にて行はる、大祭之なり。アイオニア部族全体の年々行ひし處の大祭典には二種あり。一はデロスにて、他はミカレに近きパニオニユムにて行れたり。又各州各市にはそれ／＼特殊の祭典行はれたり。而して其等の祭典の多くは大抵年に一回行はれ、又或るものは數日に亘れり。

希臘には日曜日なし。即ち終日宗教上の勤行をなすための定期の聖日なし。されど祭日は甚だ數多かりしを以て一週間に一度ぐらひは必ず何かの祭典は廻り來れり。而して其等の祭典は大

に彼等の待ちもふくる處のものなりき。其等の祭典は概ね音樂會、舞蹈會、相撲會、演藝會等を以て連續し、始より終まで愉快なるものにてありき。ヨトヒ其の内にはスバルタのヒアキンシア祭も、終に近くに及んでは大に愉快なる祭典となり、宴會、舞踏等續々設けられしなり。されば希臘人は聖日を眞實なる聖日として待ち望み、殿堂或は劇場内に於て、各其の藝妙を闘はし、以て義務と快樂とを結合せんことを樂めり。幾千萬の禮拜者は各好みの衣装を着け、各好みの藝能を現はして、互に賞賛し賞賛せらる、實に美觀云ふ可らざりき。デエーリンゲルは云へり、希臘人は實に祭祀を以て生活の眞粹と考へたりき」と。各州各市に行はる、小祭典も其の範圍於ては、快悟にして全く宴會の如きものにてありけり。

日光にも影ある如く、うるはしき方面のみのものなし。以上述べたる處は希臘の宗教のうるはしき方面なれども、其れにも亦陰鬱なる方面あらざるを得ず。災禍數々國民の上に或は家族、或は一箇人の上に落つ。而して此等は嚇怒せる神或は猛惡なる魔鬼の所業なりとせられたりき。罪惡の感覺は數々大罪を犯せしもの心理に現出し、良心は甚大なる苦痛を感じ、又復讐の魔鬼は災害を下して彼を苦難の内に沈めんとすと信じ、慘憺悽痛なる苦行を修して以て、其の罪を贖ひ、其の應報を免れんとせり。げに希臘人も亦贖罪式を有せしなり。國民全体の犯したる罪は人身御供の功德によらざれば、決して贖れがたしとは蓋し屬々法例に録せらるゝを見るなり。さればプラトリーの言によれば、其罪過に就て何たる沈痛なる感覺を抱く人は實に僅少なりきと云ふ。多くの人は概ね己れ犯したる罪の如何なるを問はず、群神の内にも亦同し所行を

なせるものあるを見、之に託して以て己が罪を辨じ而して夫れにて世人の非難をまぬがれたりと考へしなり。殊に甚しきは、人罪を犯して神怒を招けりと思ふときは、直ちに小量の祭物を供すれば神は其等少量の祭物に満足して直ちに之を免すと考へたりしを以て罪を犯せば必ず小量の祭物を供し而して以て其罪を贖ひ得たりと信じ、心中一點苦痛を感ずることなく、更に又其の罪業を犯さば又直ちに小量の祭物を供し、此くして幾度も之を反復せり。

終りに秘法に就て一言す可し。秘法とは人々相集りて組織せる講社中行はる、秘密なる儀式を云ふ。其會員は互に密會に於て見聞したる事は一も講外の人々に告げざることを契ひたりき。各秘法は概ね或る一神の崇拜と結合し、神傳中に傳はれる其の神の生活功業を表號的に表現するを以て旨とせり。其は一般の宗教と撞着する點を存せず、又別に説明を要せざれば解し難き點も有せず。種々の秘密講社には各々特殊の記號及び規定書ありて其によりて講員互に相知れり。されば別に神學上の教説とも云ふ可きものは各講社何れも有せざりき希臘人は大に此等の秘法を愛好し、何れかの講社に入らざるものは少なかりきと云ふ。デエーリンゲル氏は其の源因を探りて曰く

希臘人が大に秘法を愛好したりしは、蓋し彼等の所謂秘法なる者は、其裏面の平凡なるはどにかく、其表面の大に秘密に見ゆると、又其の密會に於て行へる快活なる演劇的表現によりて惹起さるゝ感情の多様なるを、種々なる技藝の奏演とにあり。

されば秘法は一般希臘人の上に健全或は高尚なる影響を及ぼさざりしなり。講員の行狀は別に講外なる人々に比して勝れたる處とてはあらざりき。プラトリーは「エリユシニア」秘密講は只人をして不義を行ふに剛ならしむるのみと云へりきと云ふか。

第八章 印度文學一斑（印度の宗教其の一）

百三十四

あるが中にも、印度に發達したる諸宗教の研究は困難なるはなし夫れヘブライの宗教は擧げて一部の舊約書中に明なり。以て其綱概を知るに難からず。波斯之宗教、埃及の宗教、其他希臘羅馬の宗教に至ても亦然り。均しく印度に發達したる宗教の内にも韋陀教の如きはさしたる困難を與へず。然るに韋陀の時代を後に見て、太古アリヤン人が印度の主人公となり、其活潑なる鬪争的生活が冥想默念の沈靜的生活に一變したる時代に至ては、實に數多の困難障害交々起り來りて大に其の研究者を苦ましむるなり、然り而して其の困難たる主として彼等の哲學宗教の二者相混淆して、其間劃然たる差別の立て難きに職由す。

故に余は印度宗教の廣野を測量するに先だちて、まづ印度文學地理の一斑を畧説するを以て最良方法と思惟す。蓋し印度文學史のあらましをまづ説明しおきて、さて次に其の宗教論に及ばざれば諸君の了解を助く可しと思へばなり。

さて韋陀時代に就ては、本書第一卷既に之を説けり。之れ太古のアリヤン人が險峻なるヒマラヤの山徑を超へ茫漠たる印度の廣原に移住しつゝありし時代なりけり。此時代に於ては彼等は實に勇壯活潑にして其元氣の鬱勃たりしは、韋陀の頌歌を見れば知るしも。されど土人を征服し、其土に居を定むるに至ては、漸々其地の氣候に感化されもとの元氣はこへやら消へて跡方なくなりて、默想坐禪の生活に、遂に沈溺したりけり。恐くは印度人は、全く其生活を哲學的及び宗教的默想に費したるものはなかる可し。而して此の二者は全く混淆して、一は他を

離れて立ち難き様なり、佛教の如きは、始めは社會改良を以て自任し、其の教は一種の社會論とも云ふ可きものなりしに、後終に形而上的思辨に沈溺するに至りき。故に先づ眼を印度文學界の全局に注がば、獨り其の宗教のみを研究せんこと難し。さればとて印度文學史の諸部分に涉りて委曲に之を説明せんことは到底本書の望み得る限にわらず。余は只其全域に亘りて平易簡明なる解説を與ふれば其れにて満足せり。

韋陀文學に就ては本書第一卷に於て、はゞ説きつくりしれば本章には之を省かん、而して先づ韋陀文學後の最要なる部分、即ち印度法典より説き始めん。

夫れ法律なるものは人類相集りて、一の社會又は團體を形成せんとするとき、まづ最初に起る意識的觀念なり。其の精粗巧拙單複を問はず、或る律法なくしては、決して社會は形成さるゝこと能はざるものなり。下等動物すらもや、社會に類したるものを成すときは、又ヤ、法律に似たるものを制定すと云ふ。蜂の習慣を精究したる人嘗て云へり。蜂は検査官の如きものを巢口におきて、夕方に歸り來る群蜂を檢せしめ、若し蜜を携へずして歸れるものあれば、直ちに之を捕へて所罰し。又他蜂の蜜を盗みたるものは死刑に處し、終日身を隠くし出でて蜜を求めざるものは先づ嚴罰に當て、而も尙ほ改めざるときは終に死刑に處すと。蓋し生産能は蜂社會の法律の唯一の起源且つ原本の素因なるが如し。

人類社會に於ても法律の起源并に原本の因は例と廣大複雑なりとは雖ども、其大旨は蜂社會の法律の素因に敢て異ならざるが如し。されど人間社會に法律思想の發生せし種々の原因を尋究せんとは法理學の職にして、本書の範圍外にあるを以て、余は只開化民族即ちセミチツク、モン

ゴリヤン及びアリヤン民族の法律思想の根幹たり、原動力たる最要の觀念を指示するに止めん。先づセミナツク民族より始めんに、概言せばセミナツク族の政治は神政的なりと云ふ可し。詳言せば彼等は神を以て法律の土臺とし、神を以て無上の立法家となす。故に其の法律は全く宗教的なり。見よセミナツク民族の大部分を保てる回教國は、今日すら尙ほ「コラン」を以て唯一無二の法律書となすを又ヘブリー人の舊約書を見よ。該書の内にはシナイ山上に於て授かりたる神法を録せるものあり。而して此は則ちヘブリー人の法律書なり。其の所載の法律は甚だ優勝なりと雖ども、されど社會の人數非常に増加したる今日に於ては、彼等を適用せんこと甚だ難し。彼等は猶太人の荒野にさまよへる時代又はパレスティンに移住して毫も外國人と接觸せざりし時代には、誠に適切したりしならん、されど今日の廣大なる社會には如何ならんか。モンゴリヤン民族の法律思想は大體の趣に於ては大にセミナツク民族のに類似せり。されど其根柢は異なれり。即ちモンゴリヤン民族は法律の基礎を長者の上にけり。但し長者とは君父を云ふ。セミナツク、モンゴリヤン共に其の法律の觀念は愛の觀念なり。均しく愛を以て基本とせり。されどセミナツク民族は其倫理并に法律の條規に於ては神の觀念に格段の重目を與へモンゴリヤン民族は君父に對する愛を最重とせり。之れ勿論モンゴリヤン人種の法律には毫も敬神の念なく、セミナツク人種の法律には敢て君父を愛敬するの情表れられずと云ふ意に非ず。余はこゝに只其の特色を摘示せるのみヘブリー人は云ふならん。汝の全心全情を以て汝の神を愛せよ。」と。是れ彼等か第一最要の誠なり。又次に曰ふならん。汝の身を愛するか如くに汝の隣人を愛せよ。」彼等が法律箴言は總て此の二誠を以て基本とせり又モンゴリヤン人は云はん

「君に不忠なるは之れ不孝なり。」友に接して信ならざるは不孝なり。「勉めて職を勤めざるものは不孝なり」「戰ふて勇なきは不孝なり。」

アリヤン人種の法律思想は全く器械的なり。彼等は個人相互の利益を以て法律の基礎とせり。彼等は法律を以て純粹なる契約とせり。獨逸の大哲學者カントは此が解を下して曰く「箇人の行爲が相互に影響を及ぼす限、箇人と箇人の外部の實際的關係なり」と。而して今や此の精神が文明諸國に於て制定せらるゝ總ての法律の基本となりつゝあるなり。蓋し社會の原始的純粹なる状態にある上はセミナツク并にモンゴリヤン人の法律の觀念は甚だ適切なりしなる可し。されど社會の愈々器械的となり、商業の精神が愈々箇人并に社會の活動の主動機となれる今日に至ては敢て愛よりも更に強き或物を要せざるを得ず。

之より本章第一の問題、即ち印度の法典を説く可し。夫れ印度の法典中最も古く且最も神聖なりとして印度人の尊崇至らざる所なきものは摩奴の法典なり。惟ふに印度の新古兩文學中此法典は能く印度人の宗教的、社會的并に倫理的思想を表現せるものはあらざる可し。其編纂の年代に就ては二三の異議あり。前世紀并に現代の英國學者中此は西紀前千五百年と同五百年との間に成れるものなりと主張するものあり。又西紀後五百年となすものあり。其の差二千年なり。大差と云ふ可し。是に於てか兩者の調和を試むる折衷論者現れたり。其の説に云ふ。摩奴の法典は、其の或部分はリツク韋陀後早くも編纂されたらんが、後訂正敷衍屢々起り、終に西紀後五百年に至て全く今日の形をとれり。余は此の説は前二説よりも穩當なりと考ふ。蓋し「リツク」韋陀によりて見ればアリヤン古代の人々は大に、法律の制定を好めりしが如し。又彼

等既に詩歌を有せし上は、或る法律をも確かに有せしならん。而して其等の法律が漸々訂正布  
衍され、彼等遂に一ケの政府を設立せし時代に至て、始めて現在の形をとりしならんとは、惟  
ふに蓋然の範圍を超へたる説には非ざる可し。

摩奴の法典は十二章より成れり。第一章及び第十二章は宇宙及び人類の創造、并に人間が終に  
究竟最勝樂の境に臻達する最良法を説けり。

第二章は婆羅門學生の生活の始に就て説けり本章中には箇人性即我性の觀念を論説せるを以て  
甚た有趣なり其の中の言に曰く「我慾は讚賞す可きものにあらず。されど尙ほ非我慾は此の世  
に存在せず」と。箇人性は秘慾的動機より來れる時すら、吾人は之を發達せしめざる可からずと  
云へり。蓋し我性の發達は印度人の宗教的思想の中心なるなり。

第三章は結婚法并に家族の宗教的義務。

第四章は私有財産法、

第五章は祓除潔齋等の宗教的義務。

第六章は仙人并に托鉢僧の生活。

第七章は王族及武士族、即ち第二階級の義務。

第八章は民法并に刑法。

第十章は階級に就て。國民を四階級に分ち、第一階級を婆羅門、第二階級を刹帝利、第三階級  
を吠舍耶第四階級を首度羅と稱せり。ア、星霜二千年を経る以前より全然印度を腐敗せしめた  
るは實に此の章なり。

第十一章は贖罪、懺悔及び之に關係ある諸の教義を説けり。

此の書の包有する所、廣大にしてこゝには委曲に之を説述するの暇なく、只上戴の事項を擧ぐ  
るに止めねかん。

摩奴法典に次て緊要なるを耶儒那伐爾伽ジャヌナワラとす。其の年代に於ても亦摩奴に次ぐなる可し。此は  
其の中に記載さるゝ祭祀の狀態によりて、又佛教に對し論評的の語氣あるを見て知らる。(但し  
摩奴の内には佛教に就て云へる處なし)。而して此書の編纂は西紀後二百年及び六百年の間なら  
んと云はる。所戴の事柄は印度人の法律思想に隨ひて、三部に分たる。(一)箇人法并に社會法、  
(二)民法并に刑法。(三)滅罪苦行法并に贖罪法等是れなり。今日の學理上より見れば、此の書摩奴  
に一段勝れおれりと雖も、嘗て摩奴の如き高き位置を占めたることなし。其他知名の法典十八  
種及び之に施せる數多の解釋書あり。されど一々こゝに論及する能はず。再び韋陀直次の時代  
に返らしめよ。

夫れ純粹なる韋陀文學は四章陀の内に包有せらる。四章陀は總て同時代に編纂されたるものに  
あらず。最古のものは利俱韋陀なり。此の章陀はアリヤン人種最古の狀態を表はせり最後の韋  
陀は阿他縷婆韋陀なり。此の書は屢々韋陀の中に編入されず。三明智とは即ち只前三章陀にの  
み與へらるゝ稱號なり。(四章陀の事は本書第一  
一七七八九章を見よ)

四章陀に次で婆摩拏ブハスあり。四章陀は各特殊の婆羅摩拏を有せり。婆羅摩拏は總て異なりたる時  
代に異なりたる祭司の手になりたる神學書なり。ヤ、聖書の註釋に類似せり。されど其間一大  
差別の看過す可からざるものあり。總じて聖書の註釋は神聖なるものと見做されずして、學識

才能あるもの見解なりと見做さる。されど、婆羅摩拏は、マトヒ草陀よりは劣れども、均しく神聖なるもの、神の啓示し玉へるものとして尊崇さるゝなり。利俱草陀には二ヶの婆羅摩拏あり。此の二者は大に類似せり。他の三草陀も亦各特殊の婆羅摩拏を有せり。總て婆羅摩拏の用語は文法上より見れば純粹健全なりと雖も、其の成分には小供らしき思想も多し。婆羅摩拏に次て來れる神學的文學を阿蘭若アララフと云ふ。此の書は深林の中に隱遁せる行者の誦讀に備へられたるものなり。其の性質大に婆羅摩拏に類似せり。又婆羅摩拏の如く僧侶の日々に勤行す可き儀式をも記載せり。

之に次て來るは、大に哲學的薰習を帯び稍々深遠なる思想を藏せる一種の文學なり。之を鄒巴ウパ尼婆度ニポダと稱す。其の數甚だ多くして既に發見せられたる丈にても百七十餘種あり。概ね阿他縷婆草陀に屬せり。されど其の編纂の年代は彼と同しからず。其は又純粹儀式的なるものと、純粹哲學的なるものとの二大部に分たる。第二部即ち純粹哲學的鄒巴尼婆度の性質は全く凡神教的なり。其は個人的實在物が漸々上進して究竟宇宙的の精靈中に冥没さるゝの道を教也。實に佛教の主唱する哲學的思想の全体は鄒巴尼婆度より來れり。若し鄒巴尼婆度なかりせば佛教は遂に人類の三分の一を信服せしむる能はざりしならん。

鄒巴尼婆度の哲學的なる部分は梵文學中近代該文學研究の旺盛を極むるに先て、印度國外に知られたる唯一の書なり。其は既に三百年前に波斯語に翻譯されたりき。而して、佛人ヂュペロンの翻譯したるは實に此の波斯語にてありけり。其の羅甸文にて出版されたるは乃ち西紀後千八百一年并に同二年の事なり。當時獨逸の大哲學者シヨペンホーエルは大に印度の思想ニ傾心

してありしが、彼、ヂュペロンの譯書を閱讀せし時、實に大に歡喜し、日頃熱求しつゝありし黄金鑛を、今こゝに掘り當てたるが如くに叫べり。曰く

余は「ウパニシヤド」を組織せる各章句は、余の闡揚せんと欲する本原的觀想より必然の結果として演繹さるゝを得、(マトヒ其等の演繹其物は到底其の中に見出されざれども)と主張し得。第一世紀、異教哲學者の大多數の内に、終に基督教として萬民の宗教たる可かりし猶太の有神教が、燦然たる光芒を放射せるを見るが如く、今や余輩は近代の學者の著作中に、早晩萬民の宗教たる可き印度土生の凡神教が灼然輝けるを見るを得。又曰く。

此の書は予が生活の慰安たり。又予が死時の慰安たる可し。

マクス、ミュラー講師は東洋聖典集中に主要なる「ウパニシヤド」の二三を譯出せり。云ふまでもなく他の諸譯に勝れて巧妙なり。余は曩に哲學的には佛教は「ウパニシヤド」の上に設立されたりと云へり。之が一例證としてマ氏譯中最初の「ウパニシヤド」第一章の綱概を摘記せん。其の劈頭の句に曰く。

庵アトを默想せよ。

而して此の庵とは何ぞと云ふに、萬物之精は、土なり。土の精は水なり。水の精は植物なり。植物の精は動物なり。動物の精は人間なり。人間の精は言語なり。言語の精は利俱草陀なり。利俱草陀の精は婆馬草陀なり。婆馬草陀の精は庵なり。

實に爰に庵は人性的實在物なり、一語に非ず、一熟音に非ず。若し庵に代ふに佛陀を以てせば

次に來れる「ウパニシヤド」全体は一層亮然たる可し。但し「ウパニシヤド」に就て詳しくは次卷に説く可し。

「ウパニシヤド」を以て印度人の精神はいよく形而上的、思辨的、凡神的信仰に進めり。而して彼等が祖先の健強なる多神教を失へり。印度の諸哲學は悉く「ウパニシヤド」より派生せり。其の内左の六派は最も著名にして、印度哲學六大派として世に知らる。

- (一) 彌曼婆哲學(韋陀論師哲學)
  - (二) 毘檀陀哲學(韋陀論師哲學)
  - (三) 僧祇耶哲學(數論哲學)
  - (四) 瑜珈哲學(瑜珈我哲學)
  - (五) 尼耶也哲學(尼提子哲學)
  - (六) 頌樓尺迦哲學(勝論哲學)
- (一) 彌曼婆は其の實哲學の一系体たるものに非ず。寧ろ韋陀解釋の一系体なり。其目的は反對の諸派が種々異解を附せるより生せる、韋陀に關する疑議并に矛盾を解釋するにあり。
- (二) 毘檀陀は印度諸哲學中最も思辨的哲學的なるものなり。其の本質を窺ふに鄒巴尼婆度哲學の大に發達して其の究竟の階段に臻達したるものなりと云ふ可し。近世の或學者は此の哲學を稱して、

宇宙萬有を以て究竟自識の靈原、——永遠よりの唯一の實在、——大心、大我、即ち梵天祖公より發源流出せるものと觀する唯心的一元哲學なり。

と云へり。法界の庶類一切萬物の眞腦に存して之に生命活力を與ふるものは即ち此の永遠よりの唯一の存在なる元精なり。此元精は一切物の外に嚴在す。物と結合すと雖ども、物の外に存するもの又之に汚染せざるものなり。

此の派も亦、其の權輿を韋陀に置けり。而も一切萬事萬物悉く自己の見解に隨ひて凡神教的に解説を下せり。

さて屢々云へる如く、韋陀の觀念は擬人的なりき。韋陀の宗教は多神教なりき。而して人間自からの思想にては多神教の結果は一神教なる可しと惟ふ。然るに印度に於ては、之と異なりて、終に凡神教に歸着せり。之れそも如何なる理由によれるか。又彼等の同胞なる希臘哲學は嘗て凡神教に近邁することなかりき。プラトの唯心説に於ても凡神教の傾向を見ず。實に凡神教的觀念は希臘哲學上別段目立ちたる影響を及さざりしなり。然らば印度人の全く凡神教中に沈溺するに至れるは如何なる源因によるか。之れが答解種々あり。其の二三を擧げん。

(1) 希臘哲學の生存は僅少の年間に止まれり。三百年以上を超へず。然るに印度哲學は今日に至るまで少くも二千五百年間は連續せり、若し希臘哲學も亦此く長く生存したらんには或は凡神教をも發生したらんもはかられず。

(2) 凡神教は常にやゝ此の世に不滿を抱ける人より生る。換言せば凡神教は概ね歷世教に同伴せり。本來無神教徒なりしシヨペンホーエルも後年歷世教を唱ふるに至ては又漸々凡神教に近けり。今希臘人は其の國家及び其の生活に就ては嘗て不滿の念を發せしことなく、常に之を尊重したりしに、印度人は之に反して此の二者孰れに對しても嘗て不滿の念を去り

たることなし。其の國は、常に此生活につかれ難行苦行に依て之を解脱せんとする、遁世家を以て充てり。宜哉かゝる國土に凡神教の旺盛を極むるは。之れ理の當然なり。もどより怪むに足らず。

(三) 僧祇耶派、此の哲學は二十五諦を立つ。其内二十四諦は物質的にして、只一諦のみ非物質的なり。毘檀陀哲學に反對して、第一原因を萬有の創造者となさず。先づ常住なる物質的本元を立て、之を自性と云ふ。更に此の自性の外に獨立なる靈体を立つ、之を我知と呼べり。自性我知と和合して茲に一切世間を生ずるの機熟す。而して自性、一動、覺を生ず。覺又大と稱せらる。次に覺より我慢生じ。夫より五唯、五知根、五作根、心根を生じ。五唯より又五大を生ず。數論哲學(僧祇耶の支那譯語)其の原理に於ては明かに二元論なり。されど物質的の方面、靈的の方面を歴せり。又數論の我知はプラトリーの觀念に類す。但し左の差違ありと思ふ。即ちプラトリーの觀念は常住不滅にして法界萬象の形式摸型たるに、數論の我知は亦常住不滅なれども。其の簡人性を住持せんか爲めに物質と結合するものなり。

(四) 瑜珈は僧祇耶派の一分派とも稱す可き者なり。此の哲學は僧祇耶の二十五諦に更に一諦を加ふ。之を眞我と云ふ。此物總て形質の指摘す可きを有せず。之れ瑜珈派の神なり。故に瑜珈派は又有神の僧祇耶派とも稱せらる。此哲學は總て六處の感覺思念を斷滅して木石の如くに無念無想となり、以て萬有の眞本たる眞我に還没するを以て解脱とせり而して苛刻極れる感識斷滅の苦行を制定せり。二三の例を擧ぐれば。或る行者は端坐沈黙兩眼を張りて、太陽を凝視し、一秒も瞬することなく、終に全く視覺を失ふに至りて行成れりとす。又或る行者は瞑目嚴然交互に

片足を以て直立し、毫も軀幹を屈せず、終に兩足用をなさず、身立つ能はざるに至てやむ。又或る行者は交互に高く片手を指上し摩痺拘攣終に兩手の有るを覺へざるに至らざればやまず。又或る行者は長く指爪を生長せしめ恰も蛇の指頭より垂るゝが如くに至るを喜べり。聞くならく、先きつ頃、外敵侵入し來りて戰爭烈しく、彈丸雨飛し、砲聲天地を裂ける、其が眞中にも獨り瑜珈徒は默然毅然端然秋毫も動かざりきと云ふ。

(五) 尼耶也(六) 唎棲尸迦相依て一体系の如くに成れり。而も尙は劃然たる別あり。尼耶也は因明論の研究を主とし、唎棲尸迦は形而上的并に抽象的問題の研究を重せり。二者の推究法亦異なれり。尼耶也は四種の眞智證得法を立つ、即ち現量、比量、比較量聖言量之なり。然るに唎棲尸迦は只前二者を承認するのみ。ニヤヤヤてふ語は内向の義、詳しくは分析的推究の義なり。今日の印度人は因明論の義に用也。吾人の思想を分析検査して一定の法則を闡明し、以て一家特得の印度論理學、即ち因明論を發揮したるは實に此の派なり、惟ふに此の學派の印度最境界に及ぼせる影響は何たる他の學派よりも大ならん。唎棲尸迦の七句義論、之をアリストテレスの四元因論及びカントの十二範疇論と對照するは又面白し七句義とは即ち(一)に實(二)に德(三)に業(四)に大有性(五)に大異性(六)に大和合性(七)に無有是なり。但しアリストテレス四元因論并にカント十二範疇論に就ては本書第一卷第二章を見よ。

以上六大印度哲學の綱領を略説し了れり。

印度は實に廣大なる文學を有せり。而して其は數多哲學者の勞力によりて漸々闡明され、又其の内の有益なるものは日々歐洲語にて譯出されたり。詩歌、戯曲、哲學、神學、科學上の文書



實に其數かぞふるに遑わらず。余は今茲に一々此等の書に論及する能はず。只以上に述べたる一斑にて満足せざる可からず。余は以上説く處によりて印度人の思想殊に宗教的思想の一斑を叙したり。勇壯活潑なる元氣を以て險峻なるヒマラヤ山徑を横斷したるアリヤン人が、漸々其元氣活力を失ひて終に瑜珈の徒に於て見るが如き、無氣力なる怠慢なる隱遁者流に化したるを示したり。此くして彼等は又其の國土をも失ひたりしなり。余輩かゝる歴史を讀まば先づ一顧之に鑑みて、大に己が國家の將來に付て警戒する處あらざる可らず。夫れ箇人は國家の單位なり、基礎なり。國家を生かすも箇人なれば、又殺すも箇人なり。瑜珈徒の如き氣風人民の間にさかんにして、而して國家いかに隆盛なるを得んや。さて印度滅亡の源因、并に其の挽回策は今や史家政治家の概ね注意する處の大問題、宗教家も亦決して輕視す可からざる大問題なり。前問題即ち滅亡の源因に就ては上文彼等の文學史上よりや、説明を試みたり。余輩は其の地の氣候の之にあづかつて大に力ありしを云へり。されど之れ唯一最大の源因に非ざること勿論なり。更に熱度の高き地方に棲息する國民にして、而も衰頹印度の如く甚しからざるものあればなり。彼等の宗教并に思辨的哲學も亦其の源因なりしこと疑ふ可からず。總じて凡神教的哲學は人間の活動を遲緩ならしめ、又其の元氣を枯らすものなり。第二の問題、即ち印度人元氣挽回の良策ありや、否やの問題は、一層困難なるものなり。印度人は實に熟睡の体なり否な死せるに非ずやと思はる、程なり。如何なる刺激劑も彼等を興憤せしむる能はず。基督教すら、而も三百年前より傳教せらるゝにもかゝはらず、毫も彼等が眞腦を衝く能はざるなり。蓋し印度に於ける基督教不振の大源因は、主として其の傳教者の征服者に屬し、又の其生活の程度の高

きが爲め一般の人民の上に多くの刺激を與ふる能はざるにあるならん。

又印度人振起復興の途上に横はりて之が大障壁を成すものは階級制度なり。階級の觀念は深く彼等か心底に根據し、各階級の人々は全く他階級の人々とは別國人の如き感を抱き。之と交を共にし、事を共にする能はざるが如くに考へおれり。之れ實に彼等の一致を妨げ、彼等の結合をやふり、以て内亂を起し、外敵の侵掠を容易ならしむる大魔物なり、而も彼等は恬然として茲に省るところなし。殊に争鬪い甚しかりしは、國民の粹たる婆羅門族と刹利耶族との間なり。蓋し前者は系統の尊をほこれども、實力は却て後者に在るを以て、後者は猥りに前者の傲慢なるを快とせず。屢々之に向て打撃を加へたり。婆羅門は遂に彼等と刹利耶とは双子なりと云ふに至れり。又屢々婆羅門が心を盡くして王者の効績をよみたる詩歌あるを見る。余輩は茲に「評議官」其權を失ひ、武夫專横を極めたる時代の羅馬の形勢を想ひ起さずんばならず。夫れ階級の重き鎖が人民の頸につながるゝ上は、印度は決して覺醒振起する能はざる可し。否な管に印度に限らず、何れの國民に於ても然り。猥りに階級に重目をおき人を塞げる上は、睡りたるはさめ難く、さめたるは立ちがたかる可し。然り而してかゝる鐵壁を打壊し、かゝる鐵鎖を切斷するものは實に基督教なり。而も此の基督教が未だ彼等の間に勢力を振ふ能はずと云ふ。そも彼等は不幸なるかな。あゝ印度は自から奮起せざる可からず。到底他の力を待つ可からず。他國民は却て彼等の不振を喜べるならん。蓋し彼等はいよゝく處し易ければなり。あゝ印度は奮起せざる可からず。彼等は人間の至珍寶、國民の最大財たる自由を失へるなり彼等は自由を失へるなり。之を得んが爲めには亞米利加の大革命ありしなり、佛國の大革命ありし

なり、彼等は決して容易に之を回復すること能はざる可しと雖ども、又勉めざる可からず。余は今本章を終らんとするに當て、近來印度に起りたる宗教上道德上并に政治上の改革者に就て一言す可し。マトヒ彼等の成せし處、未だ多からず又彼等が國民全体の上に與へたる刺激大ならずと雖ども尙ほ彼等の運動は決して無益にあらざるなり。決して無用にあらざるなり。彼等は他日國民の覺醒することあるの徴候を現せるなり。彼等は多年國民をほりこみたる堅水の全く溶け去ることあるの徴候なり。蓋し彼等の全然覺醒し、堅水の悉皆溶解し去るは尙ほ遠き未來の事ならんか。

さて此の種の運動中にて、最も緊要なるものは印度協會なりとす。此は純然たる政治的團體なり。自治權を得んことを目的とせり。毎年一回大會を開きて其目的を達し得可き方策を討議講究せり。然るにマホメット教徒は毫も此の協會に對して好意を表せず。但し現今印度に在る回教徒は其數五千五百萬餘なり。而して彼等は概ね印度人よりも身體強壯なり。今若し英國政府にして印度人を壓せんか、忽ち勃起して勢力を振ふ者はそれ回教徒ならん歟さて英國人も亦印度協會に對しては毫も好意を表せざるなり。印度に在る官吏も、内國に在る人民も毫も該協會には扶助を與へず。否な却て種々の障害を與へ、百方術を盡して其の奏功を妨げんとせり。又回教徒を誘ひて愈々該協會の運動進歩を妨げしむ。ヤ、同情を表し且つ之を獎勵するものは獨り英國の改進黨あるのみ。但し當今は此協會の運動全く政治的なれども、他日愈々發達するに至ては又宗教上にも關與するに至らんこと必せり。

又近世之宗教改革家中にて最も有名なるはラジャヤ、ラム、マフン、ロイなりとす。彼は千七百

七十四年に生れたり。彼第一着の事業は穿婦の焚殺を禁止せんとする事なりき。それより彼は單純なる一神教を説き國民の迷信虚儀を排せり。彼は其教義を韋陀經に附會し其の神をブラマンと稱し、其の協會をブラモサマンと稱せり。されど此の協會は彼の死後に至るまで別段の進歩を見ざりき。彼に次て其の木鐸たりしものはデベンゴマールなり。彼は第一の信神的教會を設立し、之をアチナ、サマシ(第一教會)と稱せり。公然偶像崇拜を排撃して、唯一神教を發揚せり。クシャパ、チャンダー、セン又彼に繼げり。此の人には余ニユー、ヨークに於て會し、少時の談話を試みたる事あり。時に彼はプロトウエイ會館に於て長演説をなしたりき。其の主眼は神の萬物の父なること、及び萬民は互に同胞なることを信すと云ふにありたりき。而して一の祈禱を以て其の演説を終りたりき。余輩の彼に向てイエス、キリストを信するやを問ひしとき、彼は左の如くに答へたりき。曰く然り、確かに彼は世界に至聖たること、宗教界の最大先導者たることを信す。又ブラマンの一代代表者なるを信す。されどブラマンの子にして、彼と同性同質なりとは承認する能はずと。

此の外にも尙ほ多くの宗派あり。されど彼等の將來は如何。今よりは預知し難し。とにかく余輩をして、此の大帝國の億兆を蘇生せしめ、振起せしめんとて心血を絞れる義士烈夫の上にならざる恩寵をたれ玉はんことを在天の父なる神に祈らしめよ。夫れ義の爲めに身をさへげ、正の爲めに心を盡す人は何れの土にあるを問はず、天下の義人五州の志士の宜しく同情を表す可きものなり。

## 第九章 印度教 Hinduism. (印度の宗教其の二)

百五十

### 第一 印度教之解

印度教 Hinduism とは腐敗後の波羅門諸宗教を總稱せる名なり。詳言せば婆羅門教が佛教及び多くの非アリアンの宗教(即ちドラヴィデヤン人及び原土人の諸宗教)と融和混淆せるより漸次に化生せる多神教的諸宗教を總稱せる名なり故に印度教は婆羅門教より脱化せるものなりと雖ども、又大に之と異なるものなり。蓋し婆羅門教は廣大なる同化力を有し、其と接觸し來れる總ての宗教を吸収し、同化せしを以て、終に此く複雑なる諸宗教、即ち印度教を生ずるに至れるなり。而して其等の諸宗教は均しく印度教なる同一の名稱中に包含されるれどもされど彼等は佛教或は古代婆羅門教の如き一團体を成すものに非ざるなり。

### 第二 三体發現説

夫れ印度教發達の諸因を探り、其の廣大なる同化力が如何に働きたかを研究せんには、宜しく其身を印度人の位置におき、印度人の權輿に基き、韋陀、鄔巴尼婆度及び此等の書に基ける諸書に訴へざる可からず。

其等の諸書に教ゆる事柄に就ては既に前章に略説したり。彼等は純粹質撲なる凡神教を教ゆるなり。されど彼等の教ゆる處は單に凡神教に止らず、更に巧妙なる進化發達の理をも説けり。要するに彼等の説く所は「唯一自存の自性、唯一實存之元精、常住不滅の大原内は無限の開展、無限の發現、無限の成壞を好む」と云ふにあり。

之れ印度教の根本なり。而して此の觀念は既に利俱韋陀の創世詩中に現れおれり。

故に色界は總て神の發現なり。下等の可視物は神體發現進化の下段なり。それより上りて高等なる存在連續せり。半神、神、善惡靈、下神上神等は人間以上の進化物なり、此くして終に三主神に達す、此の三主神は常住不滅の元精の第一且つ最高なる發現なり。ADMI 云ふ神秘なる熟音を組成する三文字にて表はさる。

此の三神は通例創造者、保存者、破壊者として記載さる。されど之れ未だ彼等の複雑なる性徳を明説せるものと云ふ可からず。又詩人カールメーザの如く此三神の性徳は常に交換さると云ふも、未だ彼等の關係を明説するに足らず。更に哲學者の解するが如くにも十分ならず。哲學者は云ふ、常住自存之玄靈は三徳を具備せんと欲せり。即ち創造者ブラマたる爲めに業の徳、萬有の造られたる時之れが維持者保存者たる爲めに善の徳、及び同じ萬有の溶化する時、之が破壊者たる爲めに暗黒の徳、此の三徳を具足せんことを欲せり。而して此の三神體は却波の終に至らば溶化の大法に従ひて再び本來の單我に還没す。

蓋し三体發現或は三化身の觀念は漸々に發達したるものにして、而して其の發達する途上無數の外來物を混化せるものなり。今其の跡を尋ぬるに、漠然ながらも既に利俱韋陀中に表はれおれり。即ち奴因羅、阿俱尼及び斯利耶の三柱は三主神を成せるを見る。

韋陀には又時として唄首奴てふ神が大陽の力の一發現として叙さるゝを見る。此の神の他の諸大陽神と異なる處は、彼は三步にして七世界を超ゆと云ふことなり。

後此の神は十二阿婆尼(即ち一年中の各月の大陽を表せる神)の長となれり。婆羅摩那篇には供

獻(夜殊那)と同一視せり。

摩奴の法典中には三神説に付て徴す可き所なし。

惟ふに三体發現説第二段の發達は佛教運動の進歩と同時代にありしなる可し。熱氣の化体なる韋陀の阿俱尼神は甚しく其性徳を布衍して創造者婆羅摩神と成り、而して日神毗首奴及び嵐神留度羅は其の性徳は少しく變したれども、其の名は其儘に世界の保持者及び世界の破壊者となり。されど其始には此の教義は未だ信仰及び愛の宗教(一箇人性的の神を信じ、并に其所造物を憐み之を愛する神を尊愛する宗教)に對する人情の熱望を満足せしむるに十分ならざりしなり。更に又複雑なる人性の他の二部分の要求、即ち一方に於ては世間的活動の宗教、他方に於ては難行滅我の宗教、此の二箇の要求を満足せしむるに足らざりし也。

是に於てか創造者婆羅摩神の觀念は直ちに布衍されたりき。彼は他の方面に於ては又發現物質の擬人されたるもの、及び萬物の主并に父なりと信せられたりき。されど之れ尙十分ならざりしなり。彼は更に二重性能即ち一は静止、他は活動、此二性能を藏するものと信せられたりき。其の活動的性能は即ち彼の錯底と稱せられ、而して彼の妻として擬人されたりき。惟ふに此の女神即ち創造者婆羅摩神の錯底は正しく彼の女性的創造能を表はす可きものなるがされど造化に於ける陰陽兩儀の和合てふ觀念は婆羅摩及び其錯底に於て發達せずして、滋伐并に其の錯底に於て發達したるが如し。故に婆羅摩は其の四顔を以て四韋陀を表はす神にして其女神は言文の女神、梵語梵文の創作者なりと想像せられたりき此の女神は僣羅斯伐底と稱すも河の神也」第二之神体唄首奴は透入保存、維持の神なりしが、其の性徳又直ちに布衍され、無數の分性を

生じたりき。此くて後化身説は此の分性の觀念の内より發生せるなり。毎運の女神洛戸彌は此の神の錯底即ち妻神として配せられたりき。

夫れ破壊は又必ず再造改作を導くものから、留度羅神の觀念は又容易に増大布衍され、正しく他の二神に屬す可き名號、屬性、及び任職の多くは此の第三神体に樂められたりき。

彼は少くも三箇の特別なる性格を有せり。而して其の各は又之に配する女性的即ち活動的勢能即ち錯底を有せり。

第一に、留度羅或は摩訶迦羅(大神主の義)として、彼は自然界の破壊力及び溶化力なり。されど彼よりも更に大なる破壊力は彼の妻神迦理に附せられたり。

第二に、涇伐、薩陀涇伐、三迦羅、三部(即ち永却に幸福圓滿なるもの、又幸福を衆生に與ふるもの、義)としては彼は常に破壊の後自から復起し再造する永却不滅なる自然界の再造力なり。此の玄妙なる性能を有するが故に彼は屢々永却不滅なる創造的元精と同視されたり。否な一大神、最上主として最大常住最上の實在者とするも同視されたり。故に此の性格に於ては彼は人間に像らるゝよりは寧ろ表號にて表はされたり。而して此の表號は陰陽の和合を表せる二重体なり。又此の表號を安置せる殿堂は、恐くは印度に於て今最も多く見る處のものならん。又今も尙ほ最勝無上の創造的勢力は印度全國を通じて波羅摩及び僣羅斯伐底にてはなく、涇伐及び其錯底なる耶喝摩止利の名にて崇拜さるゝなり。

さて第三には、此の第三神は人間の大代表者瑜祇なり。瑜祇は坐彈默想及び難行苦行によりて最高の完全に躋達せり、故に又大瑜祇とも稱せらるる人なり、此の性格に於ては、此の神は嚴

此の表號  
は相抱合  
せる一リ  
ンガ」及  
び「ヨニ  
(其に菌  
の類)な

肅なる裸体の隠遁者及び髪を以て其身軀を被はれ、一所に結坐せる寂然不動なる態を以て表  
さる。以て最高の靈識を證得し、究竟宇宙の大靈と合体するの大妙力は苦行、滅情、斷念、冥  
想によりて得らる可きものなるを己が實例を以て衆生に示教せり。

惟ふに右の性格は後世、婆羅門徒の發明したるものにして、釋迦の性格に擬したるもの、如し。  
彼等は此くして釋迦をも其の宗教中に同化したるならん。

此の第三神体には更に二ヶの性格あり。之れ恐らくは婆羅門教徒が原土人の宗教的本能を満足  
せしめんが爲めに、即ち此の神をして彼等の粗暴猛惡なる鬼神に代らしめんか爲めに之に附與  
したるものなるらし。其の一は即ち宇宙の破壊者なりて第一の性格より脱化せるものなり。  
曰く彼は破壊其物を快樂とする恐ろしき神なり。妖靈怪神の長なり。小蛇を簇めて作りたる冠  
を戴き、鬘鬘をつりたる頸飾をかけ、幽靈妖魔の群集に守られて墓場及び焼場を逍遙すと。

第五の性格は全く第三の性格に反對せり。此の性格に於ては彼は飲酒舞蹈を好める快活放蕩な  
る一神なり。其妻と共にヒマラヤ山巔に住まひ、屢々共にターンタヅハ踏を踏り、又矮小に  
して猾智にたけ、且つ酒を好みて常に泥酔し、千鳥足なる隨行者を伴ひて山上を逍遙すと云  
ふ。是れ此の神のターンタハハ  
に崇拜せらる性格なり。

今終りに臨で、一言諸君の注意を乞ふ可きことは、此の第三神の諸性格には各々其に對應する  
女神ありて、而して此等の女神は各々只其の性格を反映せるのみならず、概ね更に強く之を現  
せることなり。一例を擧ぐれば破壊女神なる迦理は其の夫神なる留度羅よりも更に強暴なり。  
以上叙説する處によりて、此の三体發現の第三神は其の妻神と共に種々の神并に怪力に屬せる

無數の屬性、性行、及び性徳を一身に聚め以て多數の神を代表せるものなるを解せらる可し。

第十章 印度教(印度の宗教其の三)

百五十六

第三 世毘頭無宗及び吠修那毘頭無宗の發達

前章に記載したる涇伐神の崇拜者は世伐と呼ばれ、而して其崇拜は便利上世毘頭無宗(以下略して)と稱せらる。又同理にて毗首奴神の崇拜者は吠首那伐と呼ばれ、其の崇拜は吠首那毘頭無宗(以下略して)と稱せらる。

今此の世宗及び吠宗てふ二語にて表示さる、信仰は、近世印度教の眞の生命及び精神を成すと云ふも決して過言に非ざるなり。而して彼等は敢て反對するもの或は調和され難きものに非ず。寧ろ宗教的思想の異線を現せるものなり。而して其差は同一の宗派中にも保持され得るほどのものなり。げに彼等自身も或る度までは彼等の信仰の互に一致せるを承認しかれり。されど尙ほ各々主とする處の特殊の信條を尊崇するのあまり互に相睥睨し、一時の爭論を惹起せしこと屢々なり。諸宗寛容の精神を法則とする今日すら、彼等は尙ほ各々殊別の記號を携へて以て互に區別せり。

クトヒ涇伐の崇拜は印度國內各所に弘布し、彼の表號を安置せる殿堂は印度の殿堂中最も多く、且つ錯底の崇拜者は迦理、頭無我、地我度陀止利、及び廢止利等種々の名にて呼ばれたる大神の夫神として最大の尊敬を彼に與ふと雖ども、尙ほ彼を撰神として、即ち救済を得んが爲めに特別の祐助を求願する神として彼を撰ぶ人は割合に少數なり。而して其の少數の人々は主として托鉢僧なり。

實に三体發現の第三神は破壊者としても再造者、又は創造者としても、或は隱遁者の主領としても、其の何れの性格に於ても、アマリ人情薄き、且つ嚴刻に過ぎたる神なり。彼は普通の人情を超ゆることアマリ大なり。彼は信仰依屬及び愛を以てよりは、寧ろ畏敬恐怖を以て近よる可き嚴神なり。此は前章彼の性格を叙せる處を見れば明かなり。更に彼の社に於て行はる、祭祀を見ればいよ／＼亮然たり。

吠首奴、訖利斯那及び藍摩等の社祠に於ては、主要なる日祭は先ッ偶像を洗ひ、燈明をあげ、香をたき、次に神饌——蒸飯洗米鮮肉及び菓類——を供ふることなり。而して諸神は其等の神饌の本精を食ふと信じ其下は祭者之を食ふ。又日常殊に祭日には必ず花及び飾物を以て神像を装ふ。されど涇伐神——其の性格の一に於ては隱遁者の主領なる神——には通例神饌を供へず。又其の日祭は甚だ簡單なり。先ッ聖泉よりくみ來れる鮮水を以て、此の神の表號なる「リシガム」(齒の一種)にそゞぎ、次に花を供せり。されど屢々毗盧伐樹葉の外、一物も供せず。又此の神には食物の供へらるゝことあるも、其のおさがりは祭者決して食ふことなし。之れ婆羅摩那法に左の條款あるを以てなり。曰く「花葉、果及び水は涇伐神に供へられたる後は食ふに適せざるものとなる」云々。

故に涇伐よりも人情に富める、更に人間的なる神、信仰の宗教に對する人情の熱望要求を満足せしむる神、人間の要求必要に同感し之を惠與する神、此の種の神が一般の人民の爲めに愈々緊要なりしこと明かなり。然り而してかゝる神は三体發現の第二神に於て見出されたりき。最上實在物が人生の苦難に同感し、汎く人類を親愛する神として現れたるは乃ち此第二神に於てな

りけり。

此の第二神即ち唄首奴神は最もひろく諸人に崇拜さるゝ處の神なり。無数の人々が各々其の保護者、救済者及び朋友として、攘災招福を祈り、安全息才を請願し、又終に天國に救はれんことを祈願する處の神なり。されど此の神が衆生の請願を許容し、彼等の要求を満足せしむるには、其の自体を以てせずして、全く其の化身を以てせり。

第四 化現説

夫れ印度教は其の意匠の明かに追索され得る戯曲の如きものなり。されど其幕數甚だ多くして、且ッ概して次幕は前幕より複雑快活なり。今開きたる幕に於ては場面の變化殊に多し。正に三體發現の場は廻りて、愈々唄首奴化身大立廻の場となれり。

今婆羅門教徒が化身説に一定の形を附し、盛に之を稱道するに至れる次第を考ふるに、蓋し佛教の成功の大に佛陀自身の實踐躬行より生せる世人の尊敬に歸するを見て、茲に彼等は夫れに悟る處ありしに基けるならん。佛陀は其の自から熱心に説き教へし事は、一々自から誠實に躬行せり。彼は誠實にして氣力あり、熱心にして獻身的に働く人なりき。無数の歸依者は恰も蟻の如くに此の言行一致の傳教者のめぐりに簇ひ來り、而して彼自からは遂に佛教の眞中心となれり。彼死せしときは其の教の如く寂滅に歸せしなれども、尙ほ彼の遺物は彼の記念として各所に保存され、社祠に祭られ、世人の尊崇其の生時に異ならざりき。されどトヒ大人なりども只其記念さるゝのみにては、決して數多の年處を通じて、絶へず變らず人民の愛慕を維持すること能はざるものなり。婆羅門教徒は之を見たり彼等は印度人大衆の宗教的切望は、到底かの

遺物崇拜又は既に寂滅に歸したる人の崇拜を以て永く満足さるゝ能はざることを知れり是に於てか彼等は佛滅後直ちに上古より傳來せる史詩藍摩耶那及び摩訶婆羅門を檢し、其の内より信仰尊崇の目的物となり得可きものを引出し來り而して之を世人の最も尊崇する大神の化身權現と稱して以て世人の崇拜を牽かんとせり。然り而して世人の最も尊崇せし三大神の中に唄首奴は最も好く此の目的に適したりき。何んとなれば唄首奴神の根本的觀念は透入貫通等の觀念なるを以てなり。

此くて彼等は盛に唄首奴神の化現説を主唱し始めたり而して此神化現の目的は全く世界の維持保存に在り。故に非常なる厄災殊に惡魔專横を極めて世界壊滅の難の迫れるときには必ず化現して之を救ひ玉ふと主張せり。彼等はいよゝゝ此の説を巧妙精密に組織し、其の化現に五種の別を立てたり。

- (1) 全く人間となること。
  - (2) 其の性質の半は人性にして、半は神性なること。
  - (3) 其の性質の四分一の神性なること。
  - (4) 其の性質の八分の一神性なること。
  - (5) 神性或は神徳を普通の人間及び禽獸木石等に注入すること。
- 次に有名なる十大化身を略説す可し。

(一) 摩篤舍(魚の義)

吠伐斯伐唄期の摩奴はいと祇虔なる敬神家にして濁世の風潮に染まず、勤行怠なかりし

かば、唄首奴神大に彼を愛寵し玉ひ、不思議の方便以て、預め大洪水の起ることを告げ、且つ大船を造りて其の内に七人の理師(智者の義)を載せ、萬物の種を悉く茲に收めおくことを命じ玉へり。摩奴其の命の如くなしおけるが、果せるかな。大洪水來りぬ。是に於てか彼は直ちに大船に乗り移りたり。時に唄首奴神は前額一角を備へたる大魚と化し、錨繩にて舳を其の角にくくり、以て船を大巖の傍に導き玉へり。爰に摩奴は大洪水の了るまで安全に止まりたりき。

(二) 瞿瑠摩(龜の義)

さて大洪水は引きたれども、其れが爲め多くの貴重なる物品は失はれたれば、之を獲んが爲めに、又新しく多くの珍寶を生せんが爲めに、唄首奴神は大龜と化して乳海の底に現れ、其の背を以て曼陀羅山を負ひ以て其の山の臺となり玉ひければ數多の神魔は、此の山の周圍に簇り大蛇を捉へ來りて此の山にまきつけ、之を綱として各々之を握り、而して此の山を以て乳海を攪動し、以て數多の珍寶を製したりき。

(三) 伐羅波(野猪)

比蘭耶久舍と呼べる大惡魔大地をつかみ去りて、之を大海の最下底に投下しければ、唄首奴神直ちに勇猛なる野猪と化し、玄溟の中に潜入して、争鬪千年を経し後、遂に此の大惡魔を誅して、目出度大地をもとに復し玉ひける。(以上三化現の悉く大洪水に關せ、  
此の事は注意すべき點なり。)

(四) 那羅信訶(半人半獅)

比蘭迦志鉢と呼べる大惡魔は神人、獸魚、如何なるものにも殺されずと云ふいと大なる

恩寵を、婆羅摩那神より授かりたるに託して、いと暴威を振ひ、專横を極め、遂に三界を攪亂し、神の供物を奪ひ去るに至れり。然るに其子富羅布羅陀はいと祇度なる敬神家なりければ、大に唄首奴神を讃稱しけるに、大惡魔之を聞きて非常に赫怒し、直ちに富羅布羅陀を殺さんとせり。時に唄首奴神半人半獅の姿に化して柱の中より忽然現れ玉ひ、直ちに大惡魔を寸斷し玉ひける。以上四化現は世界四大期の第一大期に起れるものなり。

(五) 伐摩那(矮人)

世界の第二大期に唄首奴神は馬利と稱する大惡魔を三界より追ひ出さんが爲めに、矮人と化し玉へり。さて唄首奴神矮人と化して、馬利の前に至り、吾三足歩み得るだけの地を我に與へよと乞ひ玉ひけるに大惡魔其の矮小なるを見て、微笑しながら之を許しければ、神忽ちに高大なる身体と頓變じて二足にて天地を歩み玉へり。されど憐愍の念を生して下界だけを惡魔に残し玉へり。

(六) 波羅斯藍羅摩(斧を携へたる藍摩)

唄首奴神婆都利亞族のいよ／＼強盛を極め、遂に婆羅門族を壓倒するに至らんことを恐れ、之を防かんが爲めに婆羅斯藍摩と化現し玉へりき。

(七) 藍摩王

第二大期の終に、大惡魔羅伐那を誅せんが爲めに藍摩王と化現し玉へりき。

(八) 鳩利首那(暗黒の神)

世界第三期の終に唄首奴神暴君忸薩を滅さんが爲めに月種族の伐斯提伐と提伐稽の第八



子として生れ玉へり。之を鳩利首那と稱す。  
(九) 佛陀

佛陀を以て明首奴の一化身とすることに付ては種々の巧妙なる説あれども、要するに只  
佛教を同化するの一方策に過ぎざるが如し。實に印度教は常に此の手段を以て他宗を同  
化するなり。彼等は今や基督を以て又明首奴の一化身なりと主唱し以て基督教をも同化  
せんと企てつゝあるなり

(十) 迦瑠基或は迦瑠金

第四大期(但し現世)の終に至らば明首奴神此の世を救はんが爲めに迦瑠基神と現じ玉ふな  
り。此の時迦瑠基神は全地の悪人を絶滅し、再び善人義人をつくり、全造物を改造し、純  
潔なる新世界を開き玉はるなり

今化現説をときとらんとするに當て、一言注意しおく可き事あり。即ち三大神の中に世界の  
難を救はんが爲めに肉体をとつて化現し玉へるは獨り明首奴神のみなること之れなり。他の二  
大神婆羅摩那及び涇伐の化現に就ては、史詩及び富蘭那經中に記する處なきに非ず、されど此  
の二大神の化現は決して明首奴の如く世を救はんが爲めに非ずして、單に其の二形体又は一發  
現と云ふがほどのものなり。

さて前文に云へる藍摩耶那及び摩訶部羅咀の二大史詩は此の化現説に好材料を供せしものなる  
を以て左に、此二大史詩の梗概を畧説して以て本章を終らんとす。  
此の二大史詩述作の年代は大抵西紀前五百年頃の事ならんと云ふ。而して其の全く婆羅門風に

組織されたるは藍摩耶那は西紀前三百年頃にして、摩訶部羅咀は其より後ならんとは今日の通  
論なり。

藍摩耶那の梗概

此史詩は至聖のものとして、世宗明宗共に尊崇する處のものなり。其の名を釋せば藍摩(王の  
名)及び阿耶那(遠征の義)となる。即ち藍摩王の遠征の義なり、其の作者は人間なれども、  
神來の智識を授かり得て此の史詩を作りたるなりと傳ふ。七卷二萬四千節あり。其の梗概あら  
く左の如し。

第一卷 婆羅篤と稱す。藍摩の幼時を叙せり。

月種族、阿瑜度耶國の陀薩羅咀王子なきを憂ひて、諸神に祈願しけるに、靈驗著しく、  
其の三妻に四子生れたり。長は即ち藍摩なり。其の性の半は明首奴神の神性を受けた  
り。藍摩すこやに生長て天晴の若殿となれるとき、伐提波國の耶那伽王に招かれ其の  
朝にとまりけるが、一日國王秘藏の強弓を群臣に示して曰く若し此弓を折るものあ  
らば朕が一女私咀姫(絶世の美人)を與へんと。群臣之を試みたれども、皆能はざりき。  
然るに獨り藍摩は立派に之を打折りければ、國王大に喜びて約の如く私咀姫をぞ賜は  
りける。

第二卷 阿瑜度耶篤と稱す。

阿瑜度耶に於て起りし事件、并にクイケエ(父陀薩羅咀王の一妻)の讒言によりて藍  
摩、王宮より放ひ出さるゝ顛末を記す。

第三卷 阿羅尼耶篇と稱す。

藍摩阿羅尼耶の深林に脱れて爰に住へる間の事件を記す。其の内には錫論島の魔王羅伐那理なく私咀姫を奪ひ去れることも含めり。

第四卷 紀首金度婆篇と稱す。

斯羅利婆の首府紀首金度婆に於て起れる事件、并に藍摩をたすけて私咀姫を取戻さんが爲め錫論島に向て出發する猿猴諸王の事を寫叙す。

第五卷 寸陀羅篇と稱す。

不思議の力によりて數多の海峡を無難に通過し、遂に藍迦に上陸するに至れる始末を記す。

第六卷 跋度波篇と稱す。

藍迦に於て羅婆那を敗り、私咀姫を取戻し、阿余度耶に凱旋し、遂に王位にのぼるに至れる顛末を記す。

第七卷 嚳咀羅篇と稱す。

藍摩王位にのぼりし以後、私咀姫と共に昇天するに至れるまでに起れる事件の重大なるものを記す。

摩訶部羅咀の梗概、

摩訶部羅咀は世界の史詩中最とも長篇のものなる可し。其の所載の事柄の範圍甚だ廣し。口碑、傳説、倫理哲學等の諸項に涉れり。其の今日に傳はれる形の如くに排列組織さるゝまでに

は數度の改編を経たるが如し。されど婆羅門の學者は故意と此の書眞實の編成者の名を隠し、神仙毗耶徒を以て其の作者とせり。之れ諸人をして、此の書に對していよく神聖の感あらしめんが爲め也。

此書十八篇二十二萬行あり。左に各篇の大意を摘記す可し。

第一篇 阿耨篇と稱す

月種王の皇子頭利咀羅首止羅及び槃頭の兄弟二人其伯父比首摩の養育を受けし有様、并に盲目なる頭利咀羅首止羅其妻喝殘陀利より五人の惡子（玖瑠諸王と呼ばる）を擧げ、槃頭の二妻浮利咀及び摩度利は五人の善子（槃頭諸王と呼ばる）を生めることを記す。今其の諸皇子の性格を檢するに五善子即ち槃頭諸王の長瑜耆首知羅は印度人の抱ける人間優勝 Excellence の理想なり。正義潔白の摸範なり。次の美摩は剛勇強健の典型なり。第三の阿呪那は殆んど人間完全 Perfection に對する歐州人の理想に達せり。第四の那鳩羅及び第五の倭陀提伐は双子なり。共に愛嬌ありて氣品高く、且つ快活なり。以上五善子に反して五惡子即ち玖瑠諸王の長頭慮余度波那は總て害惡の摸範なり。

第二篇 倭部波篇と稱す。

波斯知那浮羅に於ける大倭部波即ち諸皇子の會合を叙す。此の時五槃頭王の長瑜耆首知羅は倭鳩尼と双六を戦はして敗をとり、其の王號を失ひ。而して五槃頭王は其の姤と共に十二年間林中に退かざるを得ざるに至れり。

第三篇 伐那篇と稱す。

迦美耶迦林中に於ける五槃頭王の生活を寫す。

第四篇 毘羅阻篇と稱す。

林中退隱の十二年過ぎ、其の第十三年目の事を記す。

第五篇 宇度余我篇と稱す。

槃頭王其の國を恢復せんが爲めに戦争の準備をなせる有様、并に其の敵鳩爾王も亦之に應ずるの準備に收々たる有様を叙す。鳩利首利及び婆羅摩は兩家の親族なるを以て孰れをも援け難く遂に其の戦争にあづからざることに決せり。されど鳩利首那は阿儒那の取者として働くことを諾せり。

第六篇 比首摩篇と稱す。

兩軍爾提比に近き鳩爾鳩世止羅に戦ふ景を寫す。鳩爾軍の總大將比首摩は阿儒那の爲めに射落されたり。

第七篇 度呂那篇と稱す。

度呂那、比首摩に代りて鳩爾軍を監する有様并に數多の激戦を叙す。其の内の一戦に鳩爾軍の大將度呂那は頭利首咀、儒無那の爲めに殺されたり。

第八篇 迦爾那篇と稱す。

迦爾那、又度呂那に代りて鳩爾軍の大將となりしか、數多の激戦の後、終に又阿儒那の爲めに殺されたる事を叙す。

第九篇 倭利耶篇と稱す。

倭利耶、鳩爾軍の總大將に撰ばれし頗末、及び數多の決戦の状況を叙す。此等の大激戦に於て鳩爾軍の勇士は概ね討死し、只僅かに三人の勇士と頭慮度波那を殘せるのみ。而して美摩と頭慮度波那は棍棒を以て一騎打ちせしが、遂に後者は打殺されたり。彼は鳩縷諸王の主公にして又最年長者なり。

第十篇 倭浮智迦篇と稱す。

生残りたる鳩縷の三勇士夜槃頭の陣を襲ふて、五槃頭王の外總ての兵將を殺せしことを叙す。

第十一篇 斯德利篇と稱す。

討死したる勇士の尸を見て、女王殘陀波利及び他の妻女、婦女等の泣き悲める様を寫す。

第十二篇 三智篇と稱す。

波斯智知浮羅に於ける瑜度比首智羅の即位式を叙す。此時曩に阿儒那に射られ深手を負ひたれども未だ生残りありし比首摩は今新に即位せし國王に向て懇々國王の義務にまた、困難に處する法則及び究竟の解脱を得る法則等に就て教へたり。

第十三篇 阿奴倭那篇と稱す。

尙ほ續きて比首摩の教誡を録す。其の教誡の事項甚だ多し。國王の義務、自由、斷食、飲食等に就て、而して之に混ざるに逸話、道德上宗教上の論說并に形而上の講究を以て

せり。此く永々しき教誡を授けたる後、比首摩は終に息たへはてたり。

第十四篇 アスバドヒカガ稱す。

瑜度比首智羅愈々王位を攝し、其のしるしとして馬祭を行ひし景況を寫す。

第十五篇 アスラウツカガ稱す。

盲目の老玉頭利咀羅首止羅、其の妻倭陀利及び槃頭諸王の母、浮利咀を伴ひて林中に退くことを叙す。後二年林火起りしとき、彼等は天國及び勝福を得んか爲めに其の身体を犠牲として遂に焚死せり。

第十六篇 摩倭羅稱す。

鳩利首那及び婆羅摩の死、彼等の天に還ること、及び海岸に沿ひたる鳩利首那の市度羅伽の陥没、等を記す。

第十七篇 摩訶浮羅斯咀尼伽稱す。

瑜度比首智羅及び其の兄弟四人が皆な其の國を讓與して、迷縷山なる因度羅の天に向て出發することを記す。

第十八篇 スガガカ稱す。

五槃頭王其の妻度呂波提及び其親族の昇天を叙す。

附録 後世の作にして鳩利首那の血統出生及び幼時の生活を叙す。

### 比較宗教學卷之二終

### 第二章附録

さても激烈なる争は天朝に始まりたり一部之群神は相結びて神王サターンを貶し、シュニス神をして王位にのぼらしめんと謀り、他部之群神は又相結びてサターン神王を援けシュニス神の大望を妨げんとせり時にプロメシユスは賢明善良なる勦戎をサタン群神に與へたれども彼等は之に従はざりければ、彼は其母ギニアと共にシュニス黨に加擔したり。是に於てか老神サターンは遂に其の王位を奪はれ、其の殘黨と共にタルタルスに追はれ、而してシュニス神は終に王位にのぼりたり。

シュニス神いよく王位にのぼるや、先づ己を助けて功あるものを召して、それら賞を與へたり。然るに大功あるプロメシユスには一言の賞詞だに與へざるのみか、聞くも恐ろしき刻刑に處したり。

憐れなるかな、プロメシユスは寒風剗々たるコーカサス高嶺の絶頂白雪の皚々たる中に起れる大巖の上に縛りつけられ、日々に大鷲の巨嘴にて其の肝臓を摘食され、世に恐ろしき苦痛を受けたり。(大鷲來りて其の内に悉く彼の肝臓を摘食して去る。然るに一夜の内に肝臓は又もこの如くに生ず。翌日大鷲又來りて之を摘食す。此くの如くして幾日も續けたり。)

そも如何なれば、彼は其の大功あるにもかゝはらず、かゝる刻刑に處せられたるかを尋ぬるに、始めシュニス神の老王サターン神を追ふや、謂らく現在の人類は悉くサターン神の造りたるものなり故にサターン神若し他日再び力を得て王位を復せんと謀るときあらんには、彼等は必ず彼をたすけて己に反く可し。シカズ今の中に悉く彼等を滅絶しかかんにほと。而して彼等は未

二  
だ火を知らざれば宜しく焚殺す可しと。實に當時の人類は未だ蠢愚蒙昧にして野蠻の域にありしなり。彼等は未だ火を製し之を用ふることだに知らざりしなり以て其の智識の程は察せらるゝなり。然るにプロメシユースはユニース神の企をきゝて大に人類を憐み密に造火の秘法を人間に教へたり。此くて人類は種々火の用法を發明し、又それより種々の技術を發明したれば、遂にユニース神は容易に人類を滅すこと能はざるに至れり。是に於てか彼は赫怒し、直ちにプロメシユースをどらへて之を前述の刻刑に處したるなり。  
以上希臘の鬼神傳に於て、主上權の一神より他神に移る次第を示し又プロメシユースの處刑を叙して以て希臘の神の如何に人間に近きやを示したり。

明治廿七年五月十二日印刷  
全 年五月十五日發行

譯者

米田庄太郎

奈良縣大和國奈良町大字登大路奈良英和學校寄宿舎

發行者

池田平三郎

東京市京橋區銀座二丁目六番地

印刷者

橘磯吉

東京市京橋區弓町二丁目三番地

發賣所

大日本聖公會書類會社

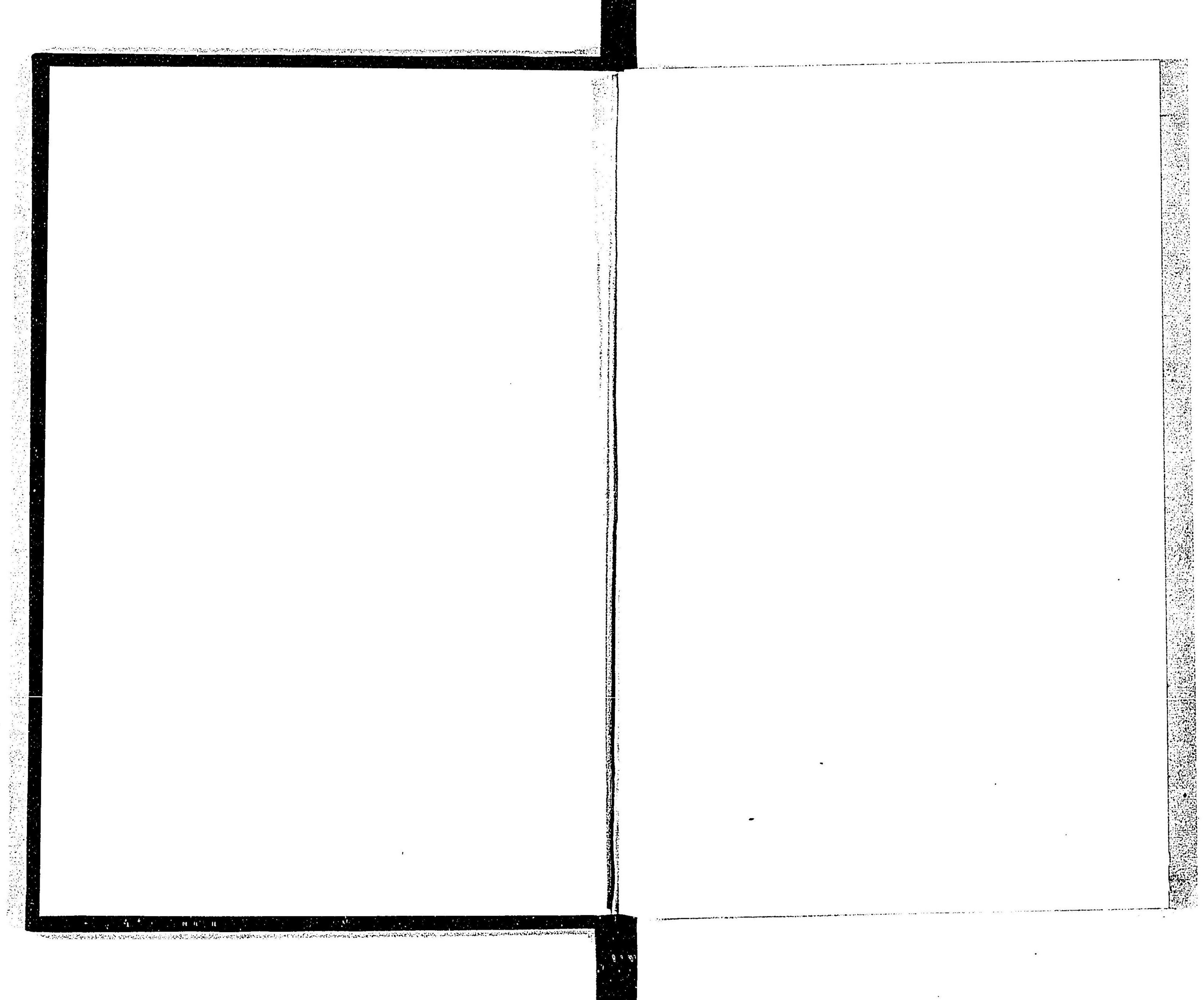
東京市京橋區銀座二丁目六番地

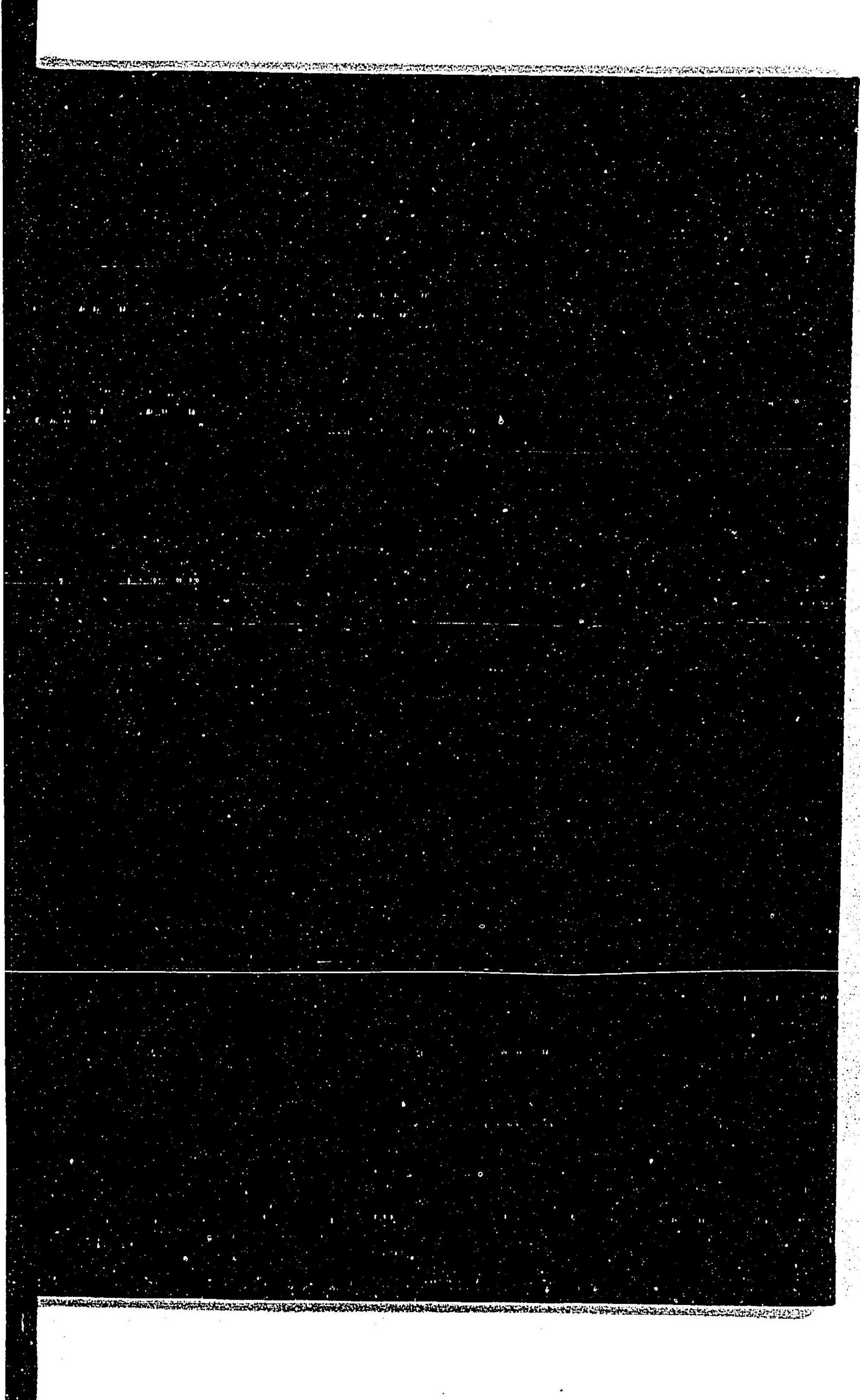
印刷所

三協合資會社

東京市京橋區弓町廿四番地  
電話千三百八十四番

Z-5K62







43  
52

